

# 植民地期ベトナムのドンズー運動と義塾運動

—20 世紀初頭ベトナム・日本関係史の研究—

ダオ テュ ヴァン

平成 28 年 06 月

# 博士論文

## 植民地期ベトナムのドンズー運動と義塾運動

### —20 世紀初頭ベトナム・日本関係史の研究—

金沢大学大学院人間社会環境研究科  
人間社会環境専攻

学籍番号：1121072709

氏名：ダオ テュ ヴァン

主任指導教員名：古畑 徹

## 目次

凡例 .....	1
序論 .....	3
(1) ドンズー運動についての研究史 .....	4
(2) ドンキン義塾と義塾運動の研究史 .....	9
第一部 20 世紀初頭におけるベトナムの状況とベトナム知識人の日本認識 .....	15
第一章 20 世紀初頭におけるベトナムの状況 .....	15
第一節 フランスによる第一次植民地開発 (1897-1914) .....	15
(1) 統治機構 .....	15
(2) 経済政策 .....	15
(3) 文化・教育政策 .....	17
第二節 ベトナム社会の変化 .....	18
(1) 農村部 .....	18
(2) 都市の発展と新しい階級・階層の出現 .....	19
(3) 世界情勢の知識人への影響 .....	20
第二章 ファン・ボイ・チャウとその渡日前の日本観 .....	22
第一節 渡日以前のファン・ボイ・チャウ (1867-1905) .....	22
第二節 ファン・ボイ・チャウの渡日前の日本観 .....	24
第三章 ファン・チャウ・チンの日本観 .....	27
第一節 ファン・チャウ・チンの生涯 (1872-1926) .....	27
第二節 ファン・チャウ・チンの日本観 .....	28
第四章 20 世紀初頭におけるベトナム知識人の日本観 .....	31
第二部 ドンズー運動 (1905-1909) .....	34
第一章 ドンズー運動の目的 .....	34
第一節 維新会の成立 .....	34
第二節 日本に対する武器援助要請計画 .....	36
(1) なぜファン・ボイ・チャウは日本を選んだのか .....	36
(2) なぜ援助計画は変化したのか .....	38
第二章 ベトナム青年の渡日留学とその活動 .....	43
第一節 ベトナム青年たちの渡日学習状況 .....	43
(1) ベトナム青年留学生の数 .....	43
(2) ベトナム青年留学生の生活 .....	45
(3) ベトナム青年留学生の勉学 .....	47

第二節	越南公憲会の設立と活動	50
第三節	小結	52
第三章	ベトナム各地におけるドンズー運動支援	53
第一節	トンキンにおける支援運動	53
(1)	19 世紀後半から 20 世紀初頭までのトンキンの状況	53
(2)	ドンズー運動に参加したトンキン青年とその支援者	55
(3)	トンキンにおけるドンズー運動の特徴	59
第二節	アンナンにおける支援運動	61
(1)	20 世紀初頭におけるアンナンの状況	61
(2)	ドンズー運動に参加したアンナン青年とその支援者	62
第三節	コーチシナにおけるドンズー運動	70
(1)	19 世紀後半から 20 世紀初頭までのコーチシナの状況	70
(2)	コーチシナにおけるドンズー運動の過程	72
(3)	コーチシナにおけるドンズー運動の特徴	74
第四節	小結	82
第三部	ベトナムの義塾運動と慶応義塾	83
第一章	20 世紀初頭近代日本教育に対するベトナム知識人の認識	83
第一節	近代日本教育に対するベトナム知識人の認識	83
第二節	福沢諭吉の実学観とベトナム知識人の実学観	84
(1)	福沢諭吉の実学観	84
(2)	ベトナム知識人の実学観	85
第二章	明治期における慶應義塾史概説	89
第一節	草創期の慶應義塾	89
(1)	慶應義塾の起源	89
(2)	慶應義塾設立の目的	91
第二節	明治期における慶應義塾の活動	92
(1)	塾生と塾舎	92
(2)	慶應義塾のカリキュラム	96
第三章	ベトナムにおけるドンキン（東京）義塾の設立と義塾運動の発展	100
第一節	ドンキン（東京）義塾の活動	100
(1)	開塾目的	100
(2)	ドンキン義塾の活動	104
第二節	義塾運動の発展	108
第三節	小結	111

結論 .....	113
----------	-----

参考文献 .....	116
------------	-----

I. 日本語文献（五十音順） .....	116
----------------------	-----

II. 欧米語文献（アルファベット順） .....	117
---------------------------	-----

III. ベトナム語文献(アルファベット順) .....	118
------------------------------	-----

## 附録

## 凡例

- (1) 本論文におけるベトナム及び欧米の人名・地名の表記の原則として原音に近いカタカナ表記を記し、最初のカタカナ表記には ( ) の中で原文を添えた。
- (2) Viet Nam に関しては、原音に近いカタカナ表記「ヴェトナム」を採用せず、日本語で最も一般に使われている「ベトナム」を用いた。但し、引用した文章の中で「ヴェトナム」の表記があれば、そのまま「ヴェトナム」を用いた。
- (3) ベトナムのグエン朝（阮朝）はベトナム全域を Bac ki（北圻：バッキ）、Trung ki（中圻：チュンキ）、Nam ki（南圻：ナムキ）の三つの地域に分けていた。フランスもそれに従ったので、植民地期のベトナムも三つの地域に分けられ、ベトナム語では Dong Kinh（東京：ドンキン）、An Nam（安南：アンナン）、Giao Chi Trung Hoa（交趾中華：ギョオチチュンホア）を呼んだ。フランス語表記では Tonkin（トンキン）、Annam（アンナン）、Cochinchine（コーチシナ）であった。本稿では、扱う時代がフランス植民地期であるという点を重視して「トンキン」、「アンナン」、「コーチシナ」という表記で統一した。ただし、「東京義塾」についてはベトナム人による組織であったことから、ベトナム語の発音に合わせて「ドンキン義塾」と表記した。
- (4) 潘周楨に関しては従来ファン・チュー・チン（Phan Chu Trinh）という音写が使われてきたが、現在、ベトナムではファン・チャウ・チン（Phan Chau Trinh）と呼ぶのが一般的である。日本の研究の多くはファン・チュー・チンもしくはファン・チュ・チンとしているが、本稿では現在のベトナムの音に従ってファン・チャウ・チンと表記する。
- (5) ベトナムの書名と欧米の書名に関しては、本文では日本語訳の書名を載せ、注を付して原書名を掲載した。
- (6) 史料の引用については、漢文及びクオック・グ（国語：Quoc ngu）で書かれた史料は日本語訳のみで引用した。ファン・ボイ・チャウが広東の監獄につながれた際に書いたとされる自伝『獄中記』（1914）は『ヴェトナム亡国史他』（平凡社、1966）に掲載された南十字星訳「獄中記」が日本語訳の定番になっているので、そこから引用した。また、ファン・ボイ・チャウが晩年に書いた自伝『年表』は、最初に漢文で書かれたが、その後、本人がクオック・グに訳したものが死後に刊行されて流布した。『年表』の漢文の写本、クオック・グの刊本、それぞれに2つの系統があつて内容等に異同があり、書誌学的な検討が今後の課題になっている。この論文では、クオック・グに訳された Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001 に基づいた。
- (7) 本稿の最後に地図を附したが、トンキンの地図は Albert Savine による Carte des postes du Tonkin を使用した。これは 1888 年のトンキン地図である。この地図の出典は、Bibliothèque nationale de France, département Cartes et plans, GE D-21728 で、以下の URL で公開されている。  
(<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b53057851q.r=tonkin>)

アンナンの地図は Jean-Louis de Lanessan による Annam を使用した。これは 1888 年のアンナン地図である。この地図の出典は、Bibliothèque nationale de France, GED-816 (IV)、以下の URL で公開されている。

(<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8439722p.r=annam>)

コーチシナの地図は G. Butteux による Carte routière de la Cochinchine pour les provinces de Baria, Bienhoa, Cholon, Giadinh, Tayninh, Thudaumont, dressée d'après les renseignements les plus récents [Document cartographique] / par G. Butteux, 1906 を使用した。これは 1906 年のコーチシナ地図である。この地図の出典は、Bibliothèque nationale de France, département Cartes et plans, GE C-3550、以下の URL で公開されている。

(<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b530607462.r=Cochinchine>)

## 序論

日本とベトナムの関係には長い歴史がある。ベトナムが東西交易に本格的に参加した 17 世紀、日本はインドシナに盛んに朱印船を送り、ベトナムはもっとも交易量の大きな相手国の一つとなった。17 世紀初頭、日本の朱印船はベトナムの港にを頻繁に出入りした。同じ頃グエン・ホアン（Nguyen Hoang：阮潢）によってベトナム中部のホイアンの港が開かれたとき、既に何百人もの日本の商人がそこに住んでいた。日本の商人は皆、銀や青銅、銅などをベトナムの絹や砂糖、香辛料、白檀などと交換して持ち帰り、莫大な利益をあげた。ホイアンには日本人町が形成され、大いに繁栄した<sup>1</sup>。グエン・ホアンは徳川家康に書簡を送って国交を結び、江戸幕府とフエの阮氏政権の間では書簡や贈物の交換が行われた。判明しているだけで、江戸幕府が朱印船によって外国に送った国書 365 通のうち 130 通の相手がベトナムであったという<sup>2</sup>。江戸幕府の海外渡航禁止令（1635）によって日本とベトナムの直接交易は終わったが、日本とベトナムとの関係は 17 世紀の間、中国船、オランダ船などを通じて続けられた。しかし、1715 年に日本が対外貿易額の制限を行ってから、日本とベトナムの交易の勢いはなくなってしまった。

日本が明治維新を経て西欧文明を本格的に受容し、近代社会を形成し、富国強兵の国づくりを行ったことは、清朝とベトナムの知識人層を刺激した。ベトナムでは長い期間にわたり国内の戦乱が続いていたが、フランス勢力の支援を受けたグエンチョウ（Trieu Nguyen: 阮朝）によって 1802 年に統一された。しかし、それ以来フランスはベトナムに介入してその勢力を広げようとはかり、1858～62 年のコーチシナ戦争に勝利してから植民地支配をはじめた。不満なベトナムの知識人たちは王政復古を目指して勤王運動を展開したが、フランスはその運動を強く弾圧し、苦境に立たされたベトナムの知識人たちは外国の支援を期待した。そのような知識人の一人がファン・ボイ・チャウ（潘佩珠：Phan Boi Chau）である。

彼は、1904 年に同志グエン・ハム（Nguyen Ham）の住宅（グアナム（Quang Nam）省、タンビン（Thang Binh）県）で維新会を創設し、武器援助を要請するために日本に渡った。日本では大隈重信、犬養毅、後藤新平、福島安則らが彼と接触し、援助してくれた。また彼はベトナムの青年を日本に留学させ、その近代化と富国強兵を学ばせようとした。彼の働きかけに応じて、ベトナムから 200 人もの学生たちが密かに日本に留学した。この運動はドンズー（東遊）運動と呼ばれ、ベトナム独立運動史上、画期的な運動として高く評価されている。

また、ドンズー運動が展開している最中である 1907 年 3 月、ハノイ（河内：Ha Noi）にドンキン義塾が設立され、合法的な啓蒙運動が開始された。その後、同様に義塾を名乗って近代的私学校を開く義塾運動が、ベトナム各地で展開された。ハノイのドンキン義塾はもとより、これらの地方各省に出現した義塾は、その名前から見て、福沢諭吉が日本の東

<sup>1</sup>石井米雄監修；桜井由躬雄・桃木至朗編『ベトナムの事典』（東南アジアを知るシリーズ）同朋舎、1999、p.58

<sup>2</sup>前掲『ベトナムの事典』、p.58



京に開いた慶応義塾を模倣したものとみられている。

このように 20 世紀初頭におけるベトナム・日本関係史は、フランスに対抗する 2 つの運動—ドンズー運動と義塾運動—によって彩られている。しかし、この 2 つの運動は今まで別の方向を向いた運動として理解され、そのつながりがあまり追究されてこなかった。それはその中心となった担い手であるファン・ボイ・チャウとファン・チャウ・チンがその路線をめぐって決別し、それぞれの路線を歩んだと見られているからである。しかし、同時期に日本との関係を強く意識した 2 つの運動が、全く無関係のまま別々の路線を歩んだというのはいささか無理な理解に思われる。それゆえ、本稿では、2 つの運動を中心に 20 世紀初頭のベトナム・日本関係史を研究することで、2 つの運動のつながりをできるだけ具体的に示してみようと思う。ただし、その前に、2 つの運動に対する研究史をたどり、それぞれの運動の研究において、どんな課題が残されているのかを明らかにし、その上で本稿の具体的な課題を設定しようと思う。

### (1) ドンズー運動についての研究史

まずは議論の前提として、従来のドンズー運動の研究史を整理する。

最初に、ベトナムにおけるドンズー運動の研究状況から説明する。

ドンズー運動のあらましは、1920 年代後半から、その当事者であったファン・ボイ・チャウが書いた回想録などのなかに登場する<sup>3</sup>。しかし、フランス統治下ではそこまで、研究と呼べるような著作は出されていない。

ドンズー運動の研究は、まず 1950 年代初めに南ベトナムで始まった。南ベトナムの研究者たちの関心はファン・ボイ・チャウとドンズー運動で日本へ行った留学生個人に対するものであった。代表的な研究としては、ゴ・タン・ハン (Ngo Thanh Nhan) 『ファン・ボイ・チャウの指導をうけた志士と日本への留学生』<sup>4</sup>、テ・グエン (The Nguyen) 『ファン・ボイ・チャウの経歴と詩文 1867-1940』<sup>5</sup>、フォング・フー (Phuong Huu) 『大ドンズー運動』<sup>6</sup>などがある。これらの著作はファン・ボイ・チャウとドンズー運動に参加した人の簡単な伝記であり、そのため、ドンズー運動の本格的な研究とはいえなかった。70 年代になると新たな研究者が本格的な研究書を出版するようになった。代表的なものに、グエン・ヴァン・シュアン (Nguyen Van Xuan) 『維新運動』<sup>7</sup>、ソン・ナム (Son Nam) 『北部中部南部における維新運動』<sup>8</sup>、グエン・クアン・ト (Nguyen Quang To) 『巢南 (Sao Nam) ファン・ボイ・

<sup>3</sup> Phan Boi Chau, *Nam quốc dân tu tri*, Giac quan thu xa, Ha Noi, 1927. Phan Boi Chau, *Nu quốc dân tu tri*, Dac Lap, Hue, 1927. Phan Boi Chau, *Luan ly van dap*, Duy Tan tho xa, Sai Gon, 1928. Phan Boi Chau, *Van de phu nu*, Duy Tan tho xa, Sai Gon, 1929. Phan Boi Chau, *Sao Nam van tap*, Bao Ton, Sai Gon, 1935.

<sup>4</sup> Ngo Thanh Nhan, *Nhung chi si cung hoc sinh du hoc Nhat Ban duoi su huong dan cua cu Sao Nam – Phan Boi Chau*, Anh Minh, Hue, 1951.

<sup>5</sup> The Nguyen, *Phan Boi Chau than the va tho van 1867 – 1940*, Bo Van hoa Giao duc va Thanh nien, Sai Gon, 1950.

<sup>6</sup> Phuong Huu, *Phong trao Dai Dong Du*, Nam Viet, Sai Gon, 1950.

<sup>7</sup> Nguyen Van Xuan, *Phong trao Duy Tan*, La Boi, Sai Gon, 1970.

<sup>8</sup> Son Nam, *Phong trao Duy Tan o Bac Trung Nam, Dong Pho*, Sai Gon, 1973

チャウの人間性と詩文』<sup>9</sup>がある。最初の2つの著作は、維新運動のなかの重要な運動としてドンズー運動をとらえ、その全体像を明らかにしようとしたものであり、最後の1つはファン・ボイ・チャウの詩文集で、資料集として価値があった。

一方、北ベトナムでは、1950年代後半にファン・ボイ・チャウと彼のドンズー運動についての研究がはじまり、多くの論文や著作が発表された。代表的なものに、トン・クアン・フィエット (Ton Quang Phiet) 『ファン・ボイ・チャウと民族抗仏運動の一時代』<sup>10</sup>、チャン・ヴァン・ギア (Tran Van Giau) 『19世紀から1945年8月革命までのベトナムの思想発展』<sup>11</sup>、チャン・フイ・リエウ (Tran Huy Lieu) 『抗仏80年史』<sup>12</sup>がある。これらの研究によって、ドンズー運動は、ベトナムの独立運動史における勤王運動から民主民族運動への過渡期であるという位置づけが示され、それがその後もドンズー運動の基本的な理解となった。

1975年以前における南ベトナムと北ベトナムのドンズー運動の研究を比較すると、南ベトナムの研究はそもそも研究者の数が少なく、研究そのものの数も少ない。その研究の中で検討された史料自体も少数にとどまる。これに対して北ベトナムの研究は、レベルの高いものと言える。北ベトナムの研究が今も評価されているのは、ドンズー運動をベトナム民族運動史の流れのなかに位置づけたからで、ファン・ボイ・チャウのドンズー運動を含む革命運動を研究する際の基礎的な理解とファン・ボイ・チャウの役割を確認したからである。

南北ベトナムが統一された1975年以後、ドンズー運動の研究はより詳細なものになった。まず注目された研究は、1981年にチュオン・トゥー (Chuong Thau) がベトナム史学院に提出した博士論文『ファン・ボイ・チャウの人間性と救国事業』<sup>13</sup>である。この研究では、19世紀の維新運動が封建的であるのに対し、ファン・ボイ・チャウのドンズー運動は、将来的に資本主義国家を構想しており、資本主義的性質を持つ運動であるという新しい理解が示されている。1990年になると、チュオン・トゥーがファン・ボイ・チャウの著作を集めて、『ファン・ボイ・チャウ全集』10冊を出版した<sup>14</sup>。この著書は2001年に再版されているが、これによってファン・ボイ・チャウの著作が簡単に、かつ一度に見られるようになったことの意味は大きい。また、この頃の他の研究傾向としては、ドンズー運動の志士の生涯と事業についての研究が盛んに行われている。2005年になると、ハノイ国家大学で、ドンズー運動開始から100年を記念した国際シンポジウム「東遊運動100年記念とベトナム-日本の文化教育における関係」<sup>15</sup>が行われた。このシンポジウムでは日本とベトナムの研究者が一堂に会し、様々なテーマを議論した。また同年には、ファン・ボイ・チャウのふる

<sup>9</sup> Nguyen Quang To, *Sao Nam Phan Boi Chau con nguoi va tho van*, Duy Tan tho xa, Sai Gon, 1974.

<sup>10</sup> Ton Quang Phiet, *Phan Boi Chau va mot giai doan lich su chong Phap cua dan toc*, NXB Van hoa, Ha Noi, 1958.

<sup>11</sup> Tran Van Giau, *Su phat trien cua tu tuong o Viet Nam tu the ki XIX den Cach mang thang Tam 1945*, NXB Khoa hoc xa hoi, Ha Noi, 1973.

<sup>12</sup> Tran Huy Lieu, *Lich su 80 nam chong Phap*, NXB Van Su Dia, Ha Noi, 1958.

<sup>13</sup> Chuong Thau “Phan Boi Chau con nguoi va su nghiep cuu nuoc”, 1981.

<sup>14</sup> Chuong Thau (ed), *Phan Boi Chau toan tap*, NXB Thuan Hoa, Hue, 1990.

<sup>15</sup> このシンポジウムの内容は、*Quan he van hoa, giao duc Viet Nam – Nhat Ban va 100 nam phong trao Dong Du*, NXB Dai hoc Quoc Gia Ha Noi, Ha Noi, 2006. の題名で出版された。

さとゲアン（乂安：Nghe An）でも「ファン・ボイ・チャウと東遊 100 年」というシンポジウムが行われた。このシンポジウムの内容は、その後、『東遊運動とファン・ボイ・チャウ』の題名で出版された<sup>16</sup>。

欧米でも、1960 年代末から 70 年代にかけて、ファン・ボイ・チャウの思想や著作に関する研究が行われた。これは、ベトナム戦争及びこれに勝利したベトナムの新たな国家建設の時期に当たり、それらへの関心が背後にあるものと思われる。

ベトナムの宗主国であったフランスでのファン・ボイ・チャウ研究は、ジョルジュ・ボーダレル（Georges Boudarel）<sup>17</sup>が 1969 年に彼の生涯と著作について三つの論文を発表したところから始まった<sup>18</sup>。その後もフランスのベトナム近代史研究のなかで、ファン・ボイ・チャウはしばしば取り上げられている。

ベトナム戦争の当事国であったアメリカでは、1971 年にデビッド・G・マー（David G. Marr）が『ベトナム反植民地主義 1885－1925』を出版し、そのなかでドンズー運動を反植民地運動の一つと位置付けている<sup>19</sup>。

そのほかにドイツでは、1978 年にハイデルベルグ（Heidelberg）大学南アジア研究所のヨルゲン・ウンゼルト（Jorgen Unselt）が、『ファン・ボイ・チャウ 1867－1940 の晩年の著書にみえる愛国思想とマルクス主義』<sup>20</sup>を発表し、はじめてファン・ボイ・チャウの晩年の思想にマルクス主義的なものがあることを明らかにした。

日本でもベトナム戦争との関係でベトナム史への関心が高まり、ファン・ボイ・チャウやドンズー運動についての研究も 1960 年代にさかんとなった。たとえば、長岡新次郎と川本邦衛は、ファン・ボイ・チャウの著作 *Viet Nam vong quoc su*（ヴェトナム亡国史）、*Nguc trung thu*（獄中記）、*Thien ho De ho*（天か帝か）、*Hai ngoai huyet thu*（海外血書 初篇）を日本語に翻訳し、1966 年に『ヴェトナム亡国史他』の名前で出版した<sup>21</sup>。また、谷川栄彦は 1961 年の論文「第一次世界大戦前のヴェトナム民族主義」<sup>22</sup>でドンズー運動に言及した。谷川は、20 世紀初頭のベトナム民族主義の急進派としてファン・ボイ・チャウの活動を論じ、その最初の大きな活動としてドンズー運動に言及し、その活動を通して民族主義・近代思想を

<sup>16</sup> *Phong Trao Dong Du va Phan Boi Chau*, NXB Nghe An va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Nghe An, Ha Noi, 2005.

<sup>17</sup> ジョルジュ・ボーダレル（Georges Boudarel）（1926－2003）はフランスの有名なベトナムの研究者。彼は、1949～1964 年の間、ベトナムに住んでいた。第 1 次インドシナ戦争（1946～1954 年）の時期である 1951 年、彼はヴェトミン（Viet Minh）に参加し、フランス人捕虜の通訳をした。帰国後、1967 年からは Paris Diderot University（Paris VII）で教鞭をとり、1991 年まで務めた。  
(<http://tuoitre.vn/Van-hoa-Giai-tri/244280/Cau-chuyen-doi-nguoi-cua-mot-nha-Viet-hoc.html> 最終閲覧日 2013 年 6 月 10 日)

<sup>18</sup> ジョルジュ・ボーダレルの 3 つの論文は下記の通り。“Bibliographic des œuvres relation à Phan Bội Châu éditées en Quốc ngữ à Hanoi depuis 1954”, B.F.E.O. vol.56, 1969. “*Mémoires de Phan Bội Châu*” (Phan Bội Châu niên biểu), France-Asie/Asia XXII, 1969, pp. 3-210. “Phan Bội Châu et la société vietnamienne de son temps”, France-Asie/Asia XXIII-4, 1969.

<sup>19</sup> David G. Marr, *Vietnamese Anticolonialism, 1885-1925*, University of California Press, California, USA, 1971

<sup>20</sup> Jorgen Unselt, *Vietnam: Die nationalistische und marxistische Ideologie im Spätwerk von Phan Bội Châu, 1867-1940*, Wiesbaden, Steiner, German, 1980

<sup>21</sup> 潘佩珠著；長岡新次郎・川本邦衛編、『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966

<sup>22</sup> 谷川栄彦「第一次世界大戦前のヴェトナム民族主義」『法政研究』27-2・3・4、1961、pp.481-496

固めたと説いた。

1970年代になると、ファン・ボイ・チャウ及びドンズー運動に関して、さまざまな言語で書かれた史料や論文を集めて研究が行われるようになる。そうした研究の代表者が、酒井いづみと白石昌也である。酒井いづみは、1972年に「ベトナムにおける20世紀初頭の抗仏闘争—ファン・ボイ・チャウの思想と活動」を発表した<sup>23</sup>が、この論文におけるファン・ボイ・チャウ理解は北ベトナムにおける研究の影響が強いといわれている。白石昌也も1970年代半ばからファン・ボイ・チャウとドンズー運動についての研究を学術雑誌に次々発表した<sup>24</sup>。のちに白石はこれらをもとに『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』を出版して、高い評価を得た<sup>25</sup>。この著書は2000年にベトナム語に翻訳され、ベトナムの国家政治出版社から刊行されている<sup>26</sup>。本書が目指したのは、「ベトナム民族運動史の視点と日本・アジア関係史の視点を有機的に関連づけることを通して、チャウたちの主張と活動を、東アジア近代史・国際関係史の枠組の中に位置づけるとともに、ベトナム近現代民族運動史の分脈の中に帰納的に位置づけること」<sup>27</sup>で、この考えのもとに、ファン・ボイ・チャウの渡日前の経歴や彼を取り巻くベトナムの状況、彼の渡日前の国家観とその特色、渡日期の活動と対日認識及びそれに影響を与えた国際関係、ドンズー運動の瓦解過程、そしてその後世への影響などが詳細に論じられている。特に彼の対日観を、「同文同種同洲」的認識・一元的文明進歩史観・社会ダーウィニズムの3点に集約する議論は優れたものである。ただし、この研究はファン・ボイ・チャウの思想の追究に力点が置かれたこともあり、ドンズー運動自体の研究は日本での活動が中心で、ベトナムにおける支援活動についてはほとんど検討がなされておらず、この部分はさらに深める必要がある。

1980年代になると、ベトナムから日本に留学し、日本の史料を使って、ファン・ボイ・チャウとドンズー運動についての研究をするベトナム人研究者が出てくる。その最初がヴィン・シン（Vinh Sinh）である<sup>28</sup>。彼は、日本やベトナムの研究者の論文を集めた論文集『フ

<sup>23</sup> 酒井いづみ「ベトナムにおける20世紀初頭の抗仏闘争—ファン・ボイ・チャウの思想と活動」(上)『月刊アジア・アフリカ研究』133、1972、pp.16-33。同「ベトナムにおける20世紀初頭の抗仏闘争—ファン・ボイ・チャウの思想と活動」(下)『月刊アジア・アフリカ研究』134、1972、pp.20-37

<sup>24</sup> 白石昌也「ファン・ボイ・チャウと日本」『東南アジア史学会会報』25、1975、pp.1-3。同「開明的知識人層の形成：20世紀初頭のベトナム」『東南アジア研究』13-4、1976、pp.559-579。

<sup>25</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書店、1993

<sup>26</sup> Shiraiishi Masaya, *Phong trao dan toc Viet Nam va quan he cua no voi Nhat Ban va Chau A -Tu tuong cua Phan Boi Chau ve cach mang va the gioi* (tap 1 va tap 2), NXB Chinh tri Quoc Gia, Ha Noi, 2000.

<sup>27</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』、p.17

<sup>28</sup> Vinh Sinh については、Viet Sciences というHPの筆者紹介に、次のように書かれている。

Vinh Sinh is a professor of Japanese History at the University of Alberta. He is a specialist in Japanese intellectual history, and cultural and intellectual interactions between Japan and East Asia. He has served at different times as a Research Fellow at the Institute of Social Science and the Faculty of Law of the University of Tokyo, and as a Visiting Professor at Meiji University, Hanoi National University, and the Nichibunken. His major publications include: *Vietnam and Japan: Cultural Interactions* (Van-Nghe, 2001); *Overtaken Chariot: The Autobiography of Phan-Boi-Chau* (co-editor and co-translator, University of Hawai'i Press, 1999); *Hyôden Tokutomi Sohô* [Tokutomi Soho: A Critical Biography] (Iwanami Shoten, 1994); *The Future Japan* (editor and co-translator of Tokutomi

ファン・ボイ・チャウとドンズー運動』<sup>29</sup>を編集するとともに、自らも「ファン・ボイ・チャウと福沢諭吉：独立国家の認識」を発表している<sup>30</sup>。

それにつづくのが、1990年代に広島大学に留学したグエン・ティエン・ルック (Nguyen Tien Luc) で、彼は博士論文「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」<sup>31</sup>の第Ⅱ部で、ベトナム人留学生の日本での生活などの日本におけるドンズー運動の様子について具体的に研究した。また、本論文の第Ⅰ部ではベトナム知識人たちの日本観にも検討を加え、ファン・ボイ・チャウについては白石らの研究を踏襲しつつも、彼が日本のどこに注目したのかの変化を追い、渡日前には軍事的側面に注目していたが、渡日後はその精神性に注目して日本を「文明国」として位置づけるようになり、それをベトナム近代化のモデルにしようとしたことを明らかにした。さらに、第Ⅰ部・第Ⅱ部の両方で、ファン・ボイ・チャウと梁啓超や中国革命派との関係・交流に言及し、白石らの研究を踏襲して彼の思想への梁啓超の影響の強さや中国革命派への同感の表明などを確認する一方で、彼らと一線を画した点がどこにあったのかを明らかにした。

21世紀に入ると、新たな視点からのドンズー運動研究が登場する。それが宮沢千尋による、1907年の日仏協約でファン・ボイ・チャウが日本を退去した後、日本に再来日したクオン・デ (彊柢: Cuong De) やその後も日本にとどまったベトナム人留学生たちの日本における活動についての研究である<sup>32</sup>。宮沢の新しさは、それまでのドンズー運動研究がファン・ボイ・チャウ個人にばかり注目してきたために脱落していた、ドンズー運動後のクオン・デの活動や在日ベトナム人の活動を、日本側の外務省史料等で丹念に明らかにした点にあり、ドンズー運動の意義を考えるうえでも重要な研究といえる。

以上、ドンズー運動の研究史を簡単にたどってみて言えることは、民族運動・独立運動の流れのなかで理解が深められてきてはいるが、多くが概観的であり、またファン・ボイ・チャウ個人に対する関心が強く、運動の構造的な理解にまでは結びついていない印象が強いということである。したがって、ドンズー運動がベトナム各地の民族運動や近代化の動きとどのような関係にあったかという視点に乏しく、留学生を送り出す側であるトンキン、アンナン、コーチシナなどの各地域での具体的な運動の問題はあまり研究されていないのである。

---

Soho's book *Shorai no Nihon*, University of Alberta, 1989) which won the Canada Council's 1990 Canada-Japan Book Prize; *Phan Bội Châu and the Đông Du Movement* (Yale Center for International and Area Studies, 1987) . ([http://vietsciences.free.fr/design/ltg\\_vinhsinh.html](http://vietsciences.free.fr/design/ltg_vinhsinh.html) 最終閲覧日 2013年7月20日)

<sup>29</sup> Ed. Vinh Shin, *Phan Boi Chau and the Dong Du Movement*, Yale University Center for International and Area Studies, New Heaven, USA, 1988

<sup>30</sup> Vinh Sinh, "Phan Boi Chau and Fukuzawa Yukichi perception of national Independence", Ed. Vinh Sinh, *Phan Boi Chau and the Dong Du Movement*, Yale University Center for International and Area Studies, New Heaven, USA, 1988, pp.101-149.

<sup>31</sup> 本博士論文は広島大学学術情報リポジトリに掲載されている。URLは以下のとおり  
[https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/31747/20141016182455394788/diss\\_ko1951.pdf](https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/31747/20141016182455394788/diss_ko1951.pdf)

<sup>32</sup> 宮沢千尋「再来日後のベトナムドンズー運動盟主クオンデ侯をめぐる日仏植民地帝国の対応と取引」『ベトナムの社会と文化』5・6 合併号、2005、pp.115-150。同「クオンデ侯と全亜細亜会議長崎大会」『ベトナム 社会と文化』7、2006、pp.80-109。同「クオンデのファン・チュウ・チン宛書簡と「サンテ監獄事件」」『東洋文化研究』15、2013、pp.51-80

そのため、筆者が属するハノイ師範大学では筆者を含む 5 名の研究グループを立ち上げて、2006 年から各地域におけるドンズー運動の研究を始めた。リーダーはグエン・ゴ・コウ (Nguyen Ngoc Co) 教授が担当し、研究の課題名は “Dong Du movement – a historical phenomenon and its influences on the patriotic movement and national liberation in Viet Nam in the early 20<sup>th</sup> century” (ドンズー運動—歴史現象と 20 世紀初頭のベトナムの愛国運動と民族解放運動におけるその影響) でベトナム文部省の補助金を得た<sup>33</sup>。その研究内容は、トンキン、アンナン、コーチシナなどの各地域の具体的な運動を明らかにすること、及びドンズー運動と維新 (Duy Tan) 運動、ドンキン義塾との影響関係を明らかにすることであった。本稿は、そこでの研究成果を踏まえたものである。

## (2) ドンキン義塾と義塾運動の研究史

次いで、ドンキン義塾と義塾運動についての研究史を明らかにする。

ベトナムではドンキン義塾はフランス植民地時代から研究されていた。1937 年にダオ・チン・ナット (Dao Trinh Nhat) は『ドンキン義塾』<sup>34</sup>を発行した。この本はドンキン義塾についての逸話を集めたもので、史料は十分ではないが、最初に出されたドンキン義塾研究の著作である。

1954 年に北ベトナムが解放されると、フランスのベトナム侵略史に研究者の関心が集まり、その一環としてドンキン義塾の研究も登場してくるようになった。当時の階級的視点で歴史研究が行われ、そのような視点からドンキン義塾を扱った論文が『詩史地』(Van Su Dia) (後に『歴史研究』(Nghien Cuu Lich Su) に変わる) にいくつも発表された<sup>35</sup>。これらの論文では、ドンキン義塾は本質的には民族民主資本であったが、徹底はされていなかったという評価がされた。また、50・60 年代には、ドンキン義塾の詩文を集めた本がいくつも出版された。例えばダン・サイ・メイ (Đang Thai Mai) の『20 世紀初頭におけるベトナムの革命詩』<sup>36</sup>、レ・ディン・キイ (Le Dinh Ky) の「ドンキン義塾—愛国詩の新たな発展」<sup>37</sup>などである。これらはその後の研究の基礎になった。

60 年代初め、北ベトナムの歴史学者たちはドンキン義塾の歴史的意義、本質、傾向、事実関係めぐって論争した。この論争では、ダン・ヴェト・タン (Dang Viet Thanh) <sup>38</sup>がドン

<sup>33</sup> グエン・ゴ・コウ (Nguyen Ngoc Co) 教授はハノイ師範大学 (歴史科学部) に属し、ベトナム近代史を専門とする。他の 4 名は、グエン・ヅウ・ビン (Nguyen Duy Binh)、ファム・クオックス (Pham Quoc Su)、ダオ・テュ・ヴァン (Dao Thu Van)、ホ・コン・ニュ (Ho Cong Luu) で、いずれもハノイ師範大学の講師である。ベトナム文部省から研究費を受け、2006 年 5 月から 2008 年 6 月までの 2 年間活動した

<sup>34</sup> Dao Trinh Nhat, *Dong Kinh nghia thuc*, NXB Mai Linh, Ha Noi, 1937

<sup>35</sup> Tran Huy Lieu “Nhưng cuộc vận động Đông Du và Đông Kinh nghĩa thực, Duy Tân là phong trào tu thân hay tiêu tu thân?”, *Van Su Dia*, No.11, 1955, pp.35-38; Van Tam, “Góp ý kiến vào vấn đề: Tinh chất cách mạng qua các cuộc vận động Duy Tân, Đông Du, Đông Kinh nghĩa thực”, *Van Su Dia*, No. 15, 1956, pp. 61 – 71; Nguyen Binh Minh, “Tinh chất và giai cấp lãnh đạo hai phong trào Đông Kinh nghĩa thực, Đông Du”, *Van Su Dia*, No.33, 1957, pp. 19-33; No.34, 1957, pp.6- 12.

<sup>36</sup> Dang Thai Mai, *Van tho cach mang Viet Nam dau the ki XX*, NXB Van hoc, Ha Noi, 1961.

<sup>37</sup> Le Dinh Ky, “Đông Kinh nghĩa thực – Một bước phát triển mới của thơ ca yêu nước”, *Van hoc*, No.6, 1968

<sup>38</sup> Dang Viet Thanh, “Phong trào Đông Kinh nghĩa thực – một cuộc cách mạng văn hóa dân tộc dân chủ đầu tiên ở nước ta”, *Nghien cuu Lich su*, No. 25, 1961, pp. 14-24.

キン義塾をベトナム初の文化革命と高く評価したのに対し、トゥ・チュン (To Trung)<sup>39</sup>はドンキン義塾の思想闘争は資本主義的傾向に過ぎないとしてあまり評価しなかった。また、ドンキン義塾の本質、意義についての評価は三つに分かれた。グエン・アン (Nguyen Anh) はドンキン義塾の活動は、20 世紀初頭のベトナム民族運動の 1 つであり、改良主義的な傾向の強いファン・チャウ・チン (潘周楨: Phan Chau Trinh) の影響下にあるものであったと評価し<sup>40</sup>、グエン・ヴァン・キエム (Nguyen Van Kiem) はこれとは逆にドンキン義塾はファン・ボイ・チャウの民主主義を目指す民族運動の一部であり、ファンが直接指導したと評価している<sup>41</sup>。チャン・ミン・テウ (Tran Minh Thu) はドンキン義塾の活動を思想的・文化的な民族運動と位置づけ、改良傾向と暴力的な傾向の双方を有するが、より暴力的な傾向が強かったと、グエン・アンとグエン・ヴァン・キエムとの折衷的な評価をした<sup>42</sup>。60 年代には論争は終わらなかったが、ドンキン義塾についての認識は高まった。

1954 年のジュネーブ協定では解放されなかった南ベトナムでは、当初ドンキン義塾に言及する研究はあるものの、研究者の関心は低かった。ドンキン義塾自体をテーマにした最初の研究は、1956 年のグエン・ヒエン・レ (Nguyen Hien Le) の『ドンキン義塾』<sup>43</sup>で、それまでは資料を紹介して史実を研究するような本はなかった。1970 年には、グエン・ヴァン・シュアン (Nguyen Van Xuan) 『維新運動』<sup>44</sup>が出版され、その一章としてドンキン義塾が取り上げられた。これは新史料を使い、学術的に高く評価された研究で、彼は義塾運動を全国維新運動の一部分であるという理解を示している。また、1975 年にヴ・ドック・バン (Vu Duc Bang) は「ベトナム現代における最初の私立大学」<sup>45</sup>を発表した。この論文では、慶応義塾に対する言及があり、慶応義塾がドンキン義塾に影響を与えたと評価した。

以上述べてきた 1975 年のベトナム統一までの北ベトナム・南ベトナムのドンキン義塾に関する研究をまとめると、北ベトナムでは歴史的な位置付けや本質という議論が中心だったのに対し、南ベトナムでは史料を紹介して事実関係を明らかにしようとする傾向があった。これに対し、分断が解消された 1975 年以降になると、新たな観点がさまざまに登場し、研究が大きく進展する。

まず 80 年代に、チュオン・トゥーが『東京義塾と 20 世紀初頭の文化改革運動』<sup>46</sup>を出版した。この本はドンキン義塾運動を総合的に研究したもので、その文化教育・社会活動・

<sup>39</sup> To Trung, “Phong trao Dong Kinh nghĩa thực – mot cuoc cai cach xa hoi dau tien ( trao doi y kien voi ong Dang Viet Thanh) ”, *Nghien cuu Lich su*, №29, 1961, pp. 53-55

<sup>40</sup> Nguyen Anh, “Dong Kinh nghĩa thực co phai cuoc van dong cach mang van hoa dan toc khong?”, *Nghien cuu Lich su*, No.32, 1961, pp.38-46

<sup>41</sup> Nguyen Van Kiem, “Tim hieu xu huong va thuc chat cua Dong Kinh nghĩa thực ”, *Nghien cuu Lich su*, No, 66, 1964, pp. 39-45

<sup>42</sup> Tran Minh Thu, “ Co gang tien toi thong nhat nhan dinh ve Dong Kinh nghĩa thực”, *Nghien cuu Lich su*, No.81, 1965, pp.31-37

<sup>43</sup> Nguyen Hien Le, *Dong Kinh nghĩa thực*, NXB La Boi, Sai Gon, 1956

<sup>44</sup> Nguyen Van Xuan, *Phong trao Duy Tan*, NXB La Boi, Sai Gon, 1970.

<sup>45</sup> Vu Duc Bang, “Dai hoc tu lap dau tien tai Viet Nam hien dai”, *Tu tuong*, No.48, 1975, pp. 103 – 119; No.49, 1975, pp. 142-166

<sup>46</sup> Chuong Thau, *Dong Kinh nghĩa thực va phong trao cai cach van hoa dau the ki XX*, NXB Ha Noi, Ha Noi, 1982

経済活動を具体的に明らかにした。そして、民族解放運動におけるドンキン義塾の位置付けについては、「ドンキン義塾は純粋な学校ではなく、単なる社会文化の改革運動でもなく、本質的には、初めて私たちの国に登場したブルジョア政治改革運動である。それは 20 世紀初頭に民族解放と民主主義革命のための、イデオロギーの基礎となるものであった」<sup>47</sup>と述べた。これは従来の研究と比べても非常にレベルが高いものであった。

1997 年はドンキン義塾開塾 90 周年の記念の年だったので、特に多くの出版物や論文が発表された。その中には、『ドンキン義塾詩文』<sup>48</sup>というドンキン義塾で作られた詩文集めたものもあった。また、『歴史研究』1997 年第 4 号（通巻 293 号）<sup>49</sup>には東京義塾の特集が組まれ、新たな見解がいくつも発表された<sup>50</sup>。その中の、グエン・ヴァン・キエムの研究はドンキン義塾の理論面についての研究の発展に寄与した。また、チュオン・トゥーは東京義塾と地方の義塾運動について述べた。この他には、ホ・ソン（Ho Song）がドンキン義塾と維新運動の関係について詳しく研究し、あらためてドンキン義塾は全国維新運動の一部分であると位置づけた<sup>51</sup>。21 世紀に入って、チュオン・トゥーとチン・ティエン・テュアン（Trinh Tien Thuan）がドンキン義塾と慶応義塾の関係を扱った研究を発表している。ただし、これらの論文ではベトナム語の史料しか扱っていないため、慶応義塾についての記述は詳しくない<sup>52</sup>。

ここまで見てきた研究では、義塾運動を維新運動の一環として見る視点はあったものの、義塾運動と 20 世紀初頭の政治傾向との関係や愛国政治運動との交流という視点がなかった。これに対し、近年になってドンズー運動との関係を迫りかける研究も出てき始めており、筆者もそうした視点で義塾運動の研究を進める必要があると思っている<sup>53</sup>。

ドンキン義塾の研究は、ベトナム以外でも行われている。アメリカでは、先述のデビッド・G・マー『ベトナム反植民地主義 1885-1925』がドンキン義塾についても論究し、反植民地運動の一つと位置付けている<sup>54</sup>。また、ヴ・デック・バン（Vu Duc Bang）は「ドンキン義塾運動 1907 - 1908」<sup>55</sup>を 1973 年に発表し、ベトナム語とフランス語の史料を使っ

<sup>47</sup> チュオン・トゥー前掲書、p. 98

<sup>48</sup> Cuc Luu Tru Nha nuoc va Vien Vien Dong Bac Co, *Van tho Dong Kinh nghia thuc*, NXB Van Hoa, 1997

<sup>49</sup> *Nghien cuu lich su*, so 4 (293), 1997

<sup>50</sup> 例えば、Nguyen Van Kiem, “Gop them vao su danh gia Dong Kinh Nghia Thuc”, pp. 1-10; Chuong Thau, “Dong Kinh nghia thuc (1907) va phong trao nghia thuc o cac dia phuong”, pp. 11-16; Nguyen Thanh, “Dong Kinh nghia thuc va Dai Nam (Dang Co Tung Bao)”, pp. 17-20.

<sup>51</sup> Ho Song, “Dong Kinh nghia thuc trong phong trao Duy Tan o Viet Nam vao dau the ki XX”, *Nghien cuu Lich su*, No. 295, 1997, pp. 67-72; No.296, 1998, pp. 23-32.

<sup>52</sup> Chuong Thau “Tu Khanh Ung nghia thuc o Nhat Ban den Dong Kinh nghia thuc o Viet Nam”, *Nghien cuu Lich su*, No. 370, 2007, pp. 7-14.; Trinh Tien Thuan “Fukuzawa Yukichi - Khanh Ung nghia thuc cua Nhat Ban va Dong Kinh nghia thuc o Viet Nam” in *Nhieu tac gia, 100 nam Dong Kinh nghia thuc*, NXB Tri Thuc, Ha Noi, 2008, pp. 380-387

<sup>53</sup> このことについては、*Quan he Viet Nam - Nhat Ban va 100 nam phong trao Dong Du*, NXB Dai hoc Quoc gia, Ha Noi, 2006 の中に Nguyen Ngoc Co, “Dong Kinh nghia thuc va phong trao Dong Du” pp.275-285; Pham Xanh, “Phong trao Dong Du - su phoi hop giua ben trong va ben ngoai”, pp. 441-454 の二論文がある。

<sup>54</sup> David G. Marr, *Vietnamese Anticolonialism, 1885-1925*, University of California Press, California, USA, 1971

<sup>55</sup> Vu Duc Bang, “The Dong Kinh free school Movement, 1907 - 1908” in Walter F. Vella ed, *Aspects of Vietnamese History*, The University Press of Hawaii, USA, 1973, pp. 30-95



てドンキン義塾の設立、活動、結末を具体的に論じている。

ベトナム以外で義塾運動の研究が多い国は、ドンキン義塾に影響を与えたとされる慶應義塾があった日本である。

最初にドンキン義塾を扱った研究は、1967年に発表された和田博徳「アジアの近代化と慶應義塾 - ベトナムの東京義塾・中国のその他について -」<sup>56</sup>である。和田は「私は慶應義塾において東アジア近代史を専攻している関係から、この問題に興味を持って調べたところ、慶應義塾がアジアの近代化に及ぼした影響には頗る大きなものがあった事実を始めて知ることができた」(p.5)と述べるとともに、「義塾」の意味について「義塾という熟語は古くから中国にあったので、『慶應義塾百年史』上巻にも慶應義塾の命名について説明した個所で、『義塾』という語の中国における本来の語義は、公衆のため義捐の金を持って運営する学塾で、学費を収めないものを言う。ところが、福沢が『義塾』なる語に盛った内容、『彼の共立学校の制』とは、イギリスのパブリック・スクールの組織であろうと推定される」(p.7)と説明した。また、和田はドンキン義塾について、「そこで名称だけから見ると、ベトナムの東京義塾も或いは古い中国風の学塾であって、慶應義塾のような近代的学校ではないのではないかという疑が起こるかも知れない。しかし、東京義塾の内容をよく検討すれば、そのような疑もたちまち消えて、東京義塾が全く我が慶應義塾をモデルとして作られた近代的学校であったことが容易に知れるであろう」(p.8)と述べている。さらに、「東京義塾では我が慶應義塾のように実学を重んじて、ベトナムの古い遅れた風俗習慣を改め、新しい生活方法を奨励するなど、ベトナム近代化のために甚だ多方面に互る教育啓蒙活動を行った」(pp.8-9)と評価しているが、ここで教えられていた実学がどのようなものであったかについては言及がなく、その後もドンキン義塾で行われたとされる実学の内容・実態についての研究は行われていない。和田の論文は、不十分なものではあるが、ドンキン義塾と慶應義塾の関係に言及した最初の研究として意義がある。

次にドンキン義塾に言及したのは、和田の研究の発表から10年以上経った1981年にファン・チャウ・チンの教育観を論じた、白石昌也「ファン・チュ・チン—ベトナム近代教育の提唱者」<sup>57</sup>である。白石昌也は、ファン・チャウ・チンはドンキン義塾の設立に関与し、演説などの活動に参加したと述べた。白石のドンキン義塾運動の中心人物はファン・チャウ・チンであるという意見は、グエン・アンなど一部のベトナム歴史研究者と同様のものである。また、この論文で白石はドンキン義塾と慶應義塾の関係について「この学校は、日本の慶應義塾にちなんで義塾という名前を採用したと言われる。東京とはハノイのことである。一説によれば慶應義塾のことをハノイの人士に紹介し同様の学校を設立することを提唱したのは、ファン・チュ・チンその人だと言われる。確かに彼は1906年に日本に赴

<sup>56</sup>和田博徳「アジアの近代化と慶應義塾 - ベトナムの東京義塾・中国のその他について」、日吉論文集編集委員会編『日吉論文集：慶應義塾大学商学部創立十周年記念』慶應義塾大学商学部創立十周年記念日吉論文集編集委員会、1967、pp. 5-19

<sup>57</sup>白石昌也「ファン・チュ・チン—ベトナム近代教育の提唱者」阿部洋編集『現代に生きる教育思想 第8巻 アジア』、ぎょうせい、1981、pp. 285-318

いており、その際慶應義塾を訪問したことはおおいにあり得るし、またそうでないとしても明治維新以後の偉大なイデオログであり近代教育実践の提唱者でもあった福沢諭吉の開設した私立の教育関係に、大きな関心を抱いていたことは事実であったろう<sup>58</sup>と述べているが、それ以上の言及がなく、まだ両者の関係についての根拠が十分に提示されてはいなかった。

白石のあと 90 年代までは、福永英夫の『日本とヴェトナム』<sup>59</sup>にわずかながら言及があるのみで、ドンキン義塾についての研究は管見の限り見当たらない。その後、2000 年代に入り、岡田建志が 2 つの論文を発表する<sup>60</sup>。岡田はこの 2 つの論文で、新たなフランス語史料を用いて、マイラム義塾<sup>61</sup>の設立、活動などについて論述する。特に注目すべきは、前者の論文において「ドンキン義塾が弾圧されるとマイラム義塾も存続することができなかった」<sup>62</sup>とする従来の理解を、新史料を用いて「ドンキン義塾の閉鎖後少なくとも半年程の間マイラム義塾は存続していた」<sup>63</sup>と述べていることである。ベトナムではマイラム義塾に関する具体的な研究がなく、岡田の研究は、この義塾に関する最初の実証的な研究として重要なものである。

さらに、岡田の研究に続いて橋本和孝による義塾運動とドンズー運動の関係性を追求した研究が登場する。橋本和孝は、まず「ドンズー運動と東京義塾—ベトナム・アンチ・コロニアリズムとレシプロシティー」において、ドンズー運動とドンキン義塾運動の開始と隆盛、終焉についてベトナム語、英語、日本語などの多様な言語資料を使って分析した。橋本はこの論文では、「東京義塾は単なる民間学校であったわけではなくて、若者の眼を海外に向けさせ動員させるには、絶好の場所であったのであり、実際東遊運動の「秘密機関」としての性格を有していた」<sup>64</sup>と捉えている。つづいて橋本和孝は「ドンズー運動から東京義塾へ—『文明新学策』を中心として」<sup>65</sup>を発表して、ドンキン義塾で教科書として使われた『文明新学策』の内容を具体的に紹介した。ドンキン義塾にとって重要な教科書であった『文明新学策』を日本語に翻訳しただけでなく、ドンキン義塾運動の思想を詳しく研究したという点で、橋本の研究は重要な意味を持つといえる。

以上のドンズー運動と義塾運動についての研究史を踏まえて、本稿では、20 世紀初頭の

<sup>58</sup> 白石昌也「ファン・チュ・チン—ベトナム近代教育の提唱者」、p.303

<sup>59</sup> 福永英夫『日本とヴェトナム—その歴史のかかわり—』近代文藝社、1995

<sup>60</sup> 岡田建志「マイラム義塾—20 世紀初頭のベトナムにおける—私塾の実態」『日本・東アジア文化研究』第 1 号 2002、pp.73-84。同「マイラム義塾設立の周辺」『日本・東アジア文化研究』第 2 号 2003、pp.1-12。

<sup>61</sup> マイラム義塾は、20 世紀初頭にベトナムに設立された私塾の 1 つ。1907 年 3 月にハノイの郊外のホアンロン（環龍：Hoan Long）県ホアンマイ（黄梅：Hoang Mai）総ホアンマイ社に設立された。

<sup>62</sup> 「マイラム義塾—20 世紀初頭のベトナムにおける—私塾の実態」、p.74

<sup>63</sup> 「マイラム義塾—20 世紀初頭のベトナムにおける—私塾の実態」、p.81

<sup>64</sup> 橋本和孝「ドンズー運動と東京義塾—ベトナム・アンチ・コロニアリズムとレシプロシティー」、p.202

<sup>65</sup> 橋本和孝「ドンズー運動から東京義塾へ—『文明新学策』を中心として」（『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題』（ベトナムシンポジウム 2013）、国際日本文化研究センター、2015、pp. 119 -129）閲覧には以下のサイトを使用した。

<http://publications.nichibun.ac.jp/ja/item/symp/2015-03-31-1/pub>

ベトナム・日本関係史について、植民地期ベトナムのドンズー運動と義塾運動を中心に研究する。ドンズー運動と義塾運動は、いずれも 20 世紀初頭に展開した運動である。これらを検討する前提として、第一部では、この時期のベトナムの状況を、当時の世界情勢との関係を含めて明らかにしたうえで、そうした状況下で成長したベトナム知識人の日本観について、第二部に関係するファン・ボイ・チャウの渡日前の日本観と、第三部に関係するファン・チャウ・チンの日本観を中心に検討する。第二部では、豊富な研究蓄積のあるドンズー運動だが、まだ具体的な様相で見逃されている点があるので、それらを明らかにする。つまり、まず日本におけるドンズー運動の状況について、渡日ベトナム青年たちの学習状況を中心に具体的に分析し、ついで送り出す側のベトナムの状況に目を転じ、ベトナムから東遊運動を支援する動きを、地域的な違いを念頭に具体的に分析する。第三部では、ドンキン義塾が慶応義塾を模倣して作られたという通説の妥当性を軸にして、福沢諭吉と慶応義塾がベトナムの知識人に与えた影響の大きさを検討しながら、義塾運動の具体的な姿を検討する。まず、検討の前提としてベトナム知識人の実学観を福沢諭吉の実学観との相違を中心に検討し、そのうえでドンキン義塾設立に関する諸問題を、慶応義塾との関係性や相違点を明らかにしながら検討する。さらに、ドンキン義塾の具体的な活動とその広がりをその刊行物に注目しながら分析する。

## 第一部 20 世紀初頭におけるベトナムの状況とベトナム知識人の日本認識

### 第一章 20 世紀初頭におけるベトナムの状況

本論文で取り上げるドンズー運動と義塾運動は、いずれも 20 世紀初頭に展開した運動である。これらを検討する前提として、まずはこの時期のベトナムの状況について概観しておきたい。

#### 第一節 フランスによる第一次植民地開発（1897－1914）

フランスは 1885 年から 1896 年の間に軍事力によるベトナム各地の平定を基本的に終え、1897 年からは植民地ベトナムの大規模な開発を行った<sup>66</sup>。以下、この時期のフランス総督府の国家機構、経済政策、文化・教育政策を概観する。

##### （1）統治機構

フランスは、19 世紀末にベトナム、カンボジア、ラオスからなるインドシナ連邦<sup>67</sup>を樹立し、フランス人総督<sup>68</sup>がその頂点に君臨した。

ベトナムは 3 つの地域に分割され、3 つの異なる制度で統治された。北部のトンキン半保護領、中部のアンナンは保護国、南部のコーチシナは直轄植民地であった。それぞれの地域には多くの省があり<sup>69</sup>、地域と省の首長はフランス人であった。省以下にはフー（府：Phu）、ヒュエン（県：Huyen）、チュウ（州：Chau）があった。ベトナムの末端の行政単位はトンシャ（村社：thon xa）で、地方にベトナム人の役人が管理した。中央から末端に至るまでの行政機構は、すべてフランスのインドシナ総督府が支配した。

##### （2）経済政策

フランスは耕地の強奪を推し進めた。トンキンでは早くも 1902 年までに 18 万 2000 ヘクタールの土地がフランス植民地主義者によって奪われた。コーチシナでは耕地面積の 4 分の 1 がカトリック教会によって占められた。新しい地主もベトナムの旧来の地主と同様に、小作人に働かせて地代を取る形で農民から搾取した。

<sup>66</sup> 1897 年から 1914 年までの大規模開発の時期を第一次植民地開発期と呼ぶ。

<sup>67</sup> 1887 年 10 月のフランス大統領令によればインドシナ連邦はトンキン、アンナン、コーチシナ、カンボジアで構成されている。1899 年にラオスが編入された。

<sup>68</sup> 総督はベトナム語ではトアंकエン（全権：Toan Quyen）。

<sup>69</sup> トンキン：26 省や 35 ダイリ（代理：Dai ly）と 2 都市（ハノイとハイフォン）。また、省内の遠隔地方の中心地には支庁があり、これを代理と呼んだ。支庁長（フランス語で délégué）は常にフランス人を以って充てられる。

アンナン：14 省と 1 都市（ダナン（Da Nang））

コーチシナ：20 省と 2 都市（サイゴン（Sai Gon）とチョロン（Cho Lon））

（Vien Su hoc, *Lich su Viet Nam 1897－1918*, NXB Khoa hoc Xa hoi, Ha Noi, 1999, pp.12-17）

鉱工業では、フランスはまず石炭と金属を開発する事業を集中的に進めた<sup>70</sup>。鉱山開発の後、セメント、レンガ、電気、水道、精米業、紙、マッチ、酒、砂糖、繊維などの製造業が興され、これらもフランスに大きな利益をもたらした。19世紀末から20世紀初頭にかけてのベトナムにおけるフランス資本の産業別分配比率を表1に示したが、資本の半数が鉱工業に投資されており、フランスがこの方面にいかに力を入れていたかがよくわかる。

表1：インドシナにおけるフランス個人資本の分配状況（1888年—1918年）<sup>71</sup>

分野	資本（百万 Fr）	比例（%）
鉱工業	249	51
交通運輸	128	26
交易	75	15
農業	40	8
合計	492	100

また、フランスは、ベトナム人民の財産を搾取し、闘争運動を弾圧するために交通運輸網を築いた。道路は遠く離れた僻地にまで達し、コーチシナ沿海部の水路・運河は大いに開発された。ベトナムの鉄道敷設距離は、1912年までに2059キロメートルに及んだ。

さらに、フランスはベトナム市場を独占し続けるために、ベトナムに輸入されるフランス製品に対して非常に軽い税率を課すか、免税とした。一方他国の製品には重税が課され、税率が120%に及ぶ商品もあった。一方、ベトナム製品は主にフランスに輸出された。

表2：インドシナの収税状況（1899—1918）<sup>72</sup>

時期	コーチシナ	トンキン	アンナン	カンボジア	ラオス	合計（%）
1899-1903	33%	32%	16%	16%	3%	100
1904-1908	31%	34%	17%	16%	2%	100
1909-1913	29%	36%	16%	17%	2%	100
1914-1918	26%	35%	16%	20%	3%	100

フランスは、植民地化以前からあったに税に加えて各種の新税を導入した。最も重い税は塩税（Thue muoi）、酒税（Thue Ruou）、アヘン税（Thue Thuoc phien）であった。3つの税は間接税で、この収入源を確保するために、植民地権力は各村が消費しなければならぬアルコールの量をあらかじめ定めたり、またアヘンを辺鄙な片田舎まで持ちこんで売りさばいたりした。インドシナ総督府の地域別の税収割合を表2で示したが、コーチシナ・

<sup>70</sup> 1912年には石炭の生産高は1903年の2倍に増加していた。1911年だけでもフランスは数万トンの亜鉛（Zn）の鉱石、数百トンの鉛（Sn）、銅（Cu）、数百キロの金（Au）と銀（Ag）を採掘した。

<sup>71</sup> Ch. Robequain, *L'Evolution économique de l'Indochine française*, Paris, 1939, p.181

<sup>72</sup> Bulletin économique de l'Indochine, No 171, 1925, p.151

トンキン・アンナンというベトナム地域だけで 20 世紀初頭の全税収の約 8 割を占めていたことがわかる。

納税者に直接かけられる直接税は、総督府の財源とはならず、各地域の財源となった<sup>73</sup>。直接税には人頭税と田税があった。19 世紀末から 20 世紀初頭のわずか 10 数年の間（1899－1912）に財政規模は膨張し、インドシナ財政は 2 倍に増加し、トンキン、アンナン、コーチシナの財政も少なくとも 50%は増加した。これ以外に、フランスは道路工事、河川掘削、橋梁や官邸、兵營の建設などの労役をベトナム人民に強制した。

### （3）文化・教育政策

フランスの文化・教育政策は、占領時期の違いを反映して地域ごとに異なっている。

最初にフランスの植民地となったコーチシナでは、トゥデック（嗣徳：Tu Duc）帝がフランスの統治を不可能ならしめるために行政官庁の地位を下げ、官吏を引き揚げたので、学校は閉校同様になり、科挙は廃止された。その後第 3 代コーチシナ総督グランディエール（Grandière）提督は先ず通訳と下級官吏を養成するためにサイゴンに学校を設立した。総督は初等教育の再建にも努力し、従来の漢字に代わってクオック・グ（国語：Quoc ngu）を教えさせた。コーチシナにおける漢字教育はフランスの同地占領後約 30 年で全廃された。そして省または郡の主要都市にはフランス語を使用する小学校が設けられた。

トンキンとアンナンにおいては、漢字教育は禁圧されることなく存続された。しかし、一方でコーチシナ同様にフランス語及びクオック・グを使って教授する小学校を各省に開設し、ハノイとフエには高等小学校が設けられた。この学校でフランス語とクオック・グを使用した。また、19 世紀の末に至り、フランスはベトナムに対し、同化政策を実験的に行った。トンキン及びアンナンの理事長官ポール・ベール（Paul Bert）は仏越両文化の融合を図る目的で 1886 年「トンキン翰林院」（Académie Tonkinoise）を創立して、ベトナムの伝統文化を研究すると同時に、西洋の科学知識の移植に努めさせたのである<sup>74</sup>。

また、インドシナ総督ポール・ドゥメール（Paul Doumer）（在任：1897－1902）に至り、再び同化主義的傾向が濃厚になり、トンキンとアンナンにおいて施行されていた科挙は中国の制度の模倣に過ぎないとして、これを改革してフランス語及びクオック・グを科目に加えた。次のインドシナ総督ポール・ボー（J.Paul Beau）（在任：1902－1908）は、1906 年 3 月に「会同改良学務」を施行した。これにより、小学校と中学校においては漢字の学習は必修であったが、それと並んで修身・歴史・文学・法律などが加えられ、科学・保健衛生・地理の授業はクオック・グで行われ、中学校ではフランス語も必修とされた。

<sup>73</sup> フランス領インドシナ時代初期のトンキン社会の変化を生み出した重要な要素のひとつは、植民地政府の徴税による搾取であった。もともとのグエン朝の租税は寛大なものであったが、1895 年にポール・ドゥメール（Paul Doumer）がインドシナ総督となると、連邦財政制度の整備が行われ、植民地政府は各種の税を再編して直接税と間接税に大別し、増税政策を採っていく。直接税は人頭税と田税の 2 種類で、州の財源となるものであったが、トンキンの人びとに対する人頭税は当初 5 ハオであったのに、1897 年以降は 5 倍の 25 ハオに増額された。

<sup>74</sup> Phan Trong Bau, *Giao duc Viet Nam thoi can dai*, NXB Giao duc, Ha Noi, 2006, p. 59

それでもフランスは 1919 年の科举廃止までベトナムにおいては伝統的な教育制度を維持していた。ただし、先述のように最後の数回の科举ではフランス語が科目に追加された。一方で、植民地官僚の子弟の教育やフランス統治に奉仕する現地人を養成するために、新しい学校や文化施設、医療施設を設立していった。

また、1886 年から始まった普通教育システムは、先述のように時期によって教授内容に変動はあるが、おおよそ以下の 3 階段に分かれていた。

- ・村レベルの幼学校（漢字とクオック・グを教授）
- ・府、県レベルの小学校（漢字とクオック・グを教授、フランス語は任意）
- ・省レベルの中学校（漢字、クオック・グ、フランス語は必須）

## 第二節 ベトナム社会の変化

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、フランスの植民地開発の影響を受け、ベトナム社会には多くの変化がもたらされた。その変化を、農村部、都市部、世界情勢の知識人への影響の 3 つに分けて記述する。

### (1) 農村部

封建地主階級はフランス植民地主義に屈服し、その手先となり、その数は日増しに増加した。それでも、一部の中小規模の地主には愛国心があり、それが抵抗運動のバックグラウンドになっていた。こうした地主階級の多くは、ベトナムの伝統的な村落社会では紳豪（*than hao*）と呼ばれた人々である。では、ベトナムの伝統的村落社会というのはどういうものなのか。

ベトナムの伝統的村落社会の構成員は、一般に内籍民（*dan noi tich*）と外籍民（*dan ngoai tich*）とに分けられる。内籍民とは人丁税（*thue nhan dinh*）を納める義務を持つ有産者、つまり民丁（*dan dinh*）であり、外籍民とは無産者及び他処から移住してきた者、人丁税を納める義務を持たない者である。内籍民は村落の協働業務に対する発言権・参加権を多かれ少なかれもつが、実際の雑務や共同作業のための労役などは外籍民が担っていた。一方、村落内部の重要事項の決定は、上記の両者とも別の存在である官員（*quan vien*）層によって独占されていた。この層は 3 種類に分けられる。第一グループは職色（*chuc sac*）と呼ばれる科举合格者や職爵（*chuc tuoc*）保有者など、第二グループは職役（*chuc dich*）と呼ばれる現職もしくは元の村役人など、第三グループは試生、科生（科举を目指しているがまだそれには合格していない者）である。これら官員層のなかでも発言権を持つのは、職色、職役の上層部である。こうした官員層が「紳豪」とも呼ばれた人々で、知識人を含めた村落有力者の総称と考えられており、フランス人はこれをノターブル（*notables*）と呼んだのである。彼らは村落にまで直接的な権力を及ぼせなかった阮朝の国家権力と村落との接点となり、国家権力による官爵付与という権威づけを背景に実質的に村落を支配する一方で、

国家権力・官人機構の内部でその村落の利益を代表・代弁する存在でもあった<sup>75</sup>。だからこそ、阮朝権力に代わってフランス植民地権力が支配するようになると、自己の権力を維持するために新興のフランス植民地権力に従属する者もできれば、旧来の阮朝権力こそ紳豪にとって不可欠の存在と見なして強い忠誠心を抱く者も出てくるのである。

一方、一般の農民の多くは、フランス植民地支配のなかで、飢餓、貧困に瀕していた。かれらは田畑を奪われ、重税に加えて村の役人による無数の徴収にあえいだ。多くの農民が破産し、村に残って地主のために小作人となる者もあれば、村を捨て、フランスのプランテーションの人夫となる者もいた。それ以外には、都市に出て床屋、車引き、ボーイや料理人、女中、乳母の職に就いて生計を立てたり、一部のフランスやベトナム資本家のために工場や鉱山などで労働者となったりした。1907年にトンキンの企業71社で働いている労働者についてのデータがあるが、それによると、総労働者数13,816人中、成人男性は5,699人(41.25%)と半数以下で、それよりも成人女性の方が6,597人(47.75%)と多く、残りは子供の1,520人(11%)であった<sup>76</sup>。

農村に残るにせよ、都市に出るにせよ、農民の生活は貧苦の中にあり、出口の見えないものであった。フランス植民地政府の搾取制度を忌み嫌うと同時に熱い民族意識を持っていた農民は、かれらに自由と衣食をもたらせてくれるのであれば、いかなる個人、組織、階層、階級が提唱する闘争にでも呼応し、参加する用意があった。

## (2) 都市の発展と新しい階級・階層の出現

19世紀末から20世紀初めにかけて、フランスによる工業化の進展とそれを支える農村からの労働者の流入によって、ベトナムには都市が誕生し、日増しに発展していった。ハノイ、ハイフォン(Hai Phong)、サイゴン(Sai Gon)、チョロン(Cho Lon)以外にはナムディン(Nam Dinh)、ホンガイ(Hon Gai)、フエ(Hue)、ダナン(Da Nang)、ミトー(Mi Tho)などがあつた。

都市の発展と同時に、ベトナムにブルジョア階層が初めて出現した。彼らは請負業者や代理店、企業主、手工業者で、最も多かったのは商店主であつた。彼らはフランスの資本家に排斥され、植民地政権により抑えつけられた存在であつたが、一方で、彼らはフランスに従属した立場にあり、経済的にも弱体であつたため、生計を立てるに十分なだけの変化を望むにとどまり、20世紀初めの民族解放革命運動に呼応したり、参加したりする態度をみせるまでにはいたらなかった。

この時期にもう1つの大きな階層も出現した。それは、都市プチブル層(小資本:Tieu Tu

<sup>75</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジアファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書店、1993、pp. 71-75。ただし、白石のこの記述の基は、グエン・フォン・フオンの研究(Nguyen Hong Phong, *Xa Thon Viet Nam*, NXB Van Su Dia, Hanoi, 1959, pp.126-135)及び桜井由躬雄の研究(桜井由躬雄・石沢良昭『東南アジア現代史Ⅲ』山川出版社、1977、pp.26-27)である。

<sup>76</sup> Ngo Van Hoa, Duong Kinh Quoc, *Giai cap cong nhan Viet Nam nhung nam truoc khi thanh lap Dang*, NXB Khoa hoc Xa hoi, Ha Noi, 1978, p. 114



san) である。彼らは小規模手工業工場主、小商店主、通訳、教師や学生であった。彼らの生活は農民、工場労働者、都市貧民よりは楽だったが、不安定なものであった。彼らは民族意識を持ち、特に教師、学生らは 20 世紀初めの愛国運動に積極的に参加した。

植民地の工業が発展したことにより、労働者階層が形成された。ハイフォン、ハノイ、ナムディン、サイゴン、チョロンなどの都市では、数千人に達する労働者が使われていた。第一次世界大戦以前の総計では、ベトナムに約 5 万 5000 人の工業労働者がいた。戦争中に不可欠な現地商品を生産する必要から、工場に労働者は集中し、その数を増し、1919 年には約 10 万人に達した。彼らはほとんどが農民出身であり、破産して土地を失ったために、鉱山、工場、プランテーション（ドンディエン：Don Dien）などで働き口を探した。労働者とその家族はブルジョア的及び封建的植民地主義者に搾取されたため、早くから雇用主に対する激しい闘争精神を持ち、就業条件と生活の改善（労働時間の短縮、賃上げなど）を求めて、組合を作り、ストライキを行った。

### (3) 世界情勢の知識人への影響

20 世紀初めにヨーロッパのブルジョア民主主義思想が中国の書籍を通じてベトナムに伝えられると、ベトナムの知識人たちはその新たな知識を受容し、その思想は救国運動に新たな刺激を与えた。この時期にベトナム知識人たちは「新書（Tan Thu）」に接した。ヒュン・テック・カン（Huynh Thuc Khang）は『自伝』（Tu Truyen）の中で 1904 年前後のことを回想して、「この頃中国では日清戦争[一八九四～九五年]、戊戌政変[一八九八年]、庚子連兵[一九〇〇年の自立軍蜂起と興中会惠州蜂起]などの諸事件が起こった後であって、[ベトナムの]多くの士夫が覚醒し、西学を全国に広める運動を起こした。「新書」や「新報」、とりわけ康[有為]、梁[啓超]の著作が徐々に我が国にも入り、また日露戦争の報も伝わってきた」<sup>77</sup>と述べている。

ヒュン・テック・カンの『自伝』にもあるように、ちょうどその時期、日露戦争（1904-05）が起こり、アジアの新興国・日本がヨーロッパの大国・ロシアに勝利した。このことはベトナム人の民族意識を大いに刺激し、ナショナリズムが勃興していった。また、日本が資本主義の道を進み豊かな強国になったことも当時の愛国者たちを刺激し、彼らは日本と同様な救国の道を進みたいと考えた。また『年表』によれば、この時グエン・ハム<sup>78</sup>は「今、外からの支援を求めるなら、日本に渡る以上の策はない」<sup>79</sup>と述べたと伝えている。

<sup>77</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジアファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書店、1993、pp. 133 -134

<sup>78</sup> グエン・ハム(1863－1911)はクワンナム（Quang Nam）省タンビン（Thang Binh）府タンミ（Thanh Mi）村で生まれた。彼は儒教家の子、1904 年にグエン・ハムとファン・ボイ・チャウと同志などハムの住宅で「維新会」が設立された。ドンズー運動の活動の中でグエン・ハムは重要な役割を担当した。例えばベトナム青年を海外へ送り出し、寄附を募集した。

<sup>79</sup> Chuong Thau (ed ), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.129

このように、19 世紀末から 20 世紀初めまでの中国の変法運動と日本の勃興が、当時のベトナム知識人たちの思想に強い作用を及ぼしたとみられる。彼らは、国の挽回を希望するのであれば、「維新」をしなければならない、つまり欧米資本主義国の文明を学び、政治、経済、文化、教育などを改革しなければならないと考えた。これは、ベトナム民族解放運動における新たな思想のひとつの傾向であった。しかし、大きな傾向としては一致していても、その中には異なる二つの主張があった。一つは武器を用いて国の独立を回復すべきだという主張であり、もう一つは合法的方法を用いて、文化的、社会的改革を公然と行い、商工業を発展させ、国家を強くし、徐々に国家の独立をはかっていくべきだという主張である。前者の代表がファン・ボイ・チャウ、後者の代表がファン・チャウ・チンである。この二人の思想や活動については、第二章、第三章で、詳しく検討する。

## 第二章 ファン・ボイ・チャウとその渡日前の日本観

本章では、ドンズー運動を検討する前提として、その指導者であったファン・ボイ・チャウの渡日までの人生を確認し、その当時の彼がどのような日本観を持っていたかを検討する。なお、基本史料としてファン・ボイ・チャウの回想録である『獄中記』<sup>80</sup>と『年表』<sup>81</sup>があり、これらを使ってその人生と対日観を研究した先行研究として、白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』<sup>82</sup>とグエン・ティエン・ルック「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」<sup>83</sup>がある。本章はこれらに多くを依拠しており、これらに依拠する場合は、直接引用や議論をする場合を除いて、特に注を付けていない。

### 第一節 渡日以前のファン・ボイ・チャウ（1867—1905）

ファン・ボイ・チャウが、20 世紀初頭におけるベトナム民族解放運動の指導者であることはよく知られている。号はサオ・ナン（巢南：Sao Nam）、ティ・ハン（是漢：Thi Han）ある。彼は 1867 年に、ベトナム中部のゲアン（Nghe An）省ナムダン（Nam Dan）県ドンリエト（Dong Liet）社サナム（Sa Nam）村で生まれた。彼は貧しい儒者の出身で父ファン・ヴァン・フォ（Phan Van Pho）は塾館師として生計を立てていた。母グエン・ティ・ナン（Nguyen Thi Nhan）は篤行な人であった。ファン・ボイ・チャウは幼少期より、父親に漢字を教わり、8 歳で「郷里府県の小考」を受験して首席となった。13 歳で近古の詩文を作ったが、郷村の塾の教師には理解できないほどになっていた。この時期に父親は彼に教えることがなくなり、父は同じナムダン県にある、スエンリエウ（Xuan Lieu）社のグエン・キュエ（Nguyen Kieu）に指導を頼んだ。彼はこのことによって多くの漢文を読む機会を手に入れた、と『年表』に記している<sup>84</sup>。

17 歳となった 1883 年、ベトナム北部（トンキン）がフランスによって再び占領され、反仏運動の義兵が蜂起した。当時彼はトンキン義兵に呼応したかったが、義兵を挙げるだけの力がなかった。そのため彼は「平西収北」（Binh Tay Thu Bac – フランス人を平らげトンキンを回復しよう）という檄文を作ったが、この檄文に人々は関心を持たなかった。彼は

<sup>80</sup> Chuong Thau (ed), “Nguc Trung Thu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001.

なお、日本語訳は、雑誌『日本及日本人』昭和 4 年 6 月臨時創刊号（通巻 179 号、1929）に掲載された南十字星訳が最初で、これは現在、潘佩珠著；長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』平凡社、1966、に収録されている。

<sup>81</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001.

<sup>82</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書店、1993

<sup>83</sup> グエン・ティエン・ルック「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」広島大学大学院、文学研究科、博士論文、1998。本博士論文は広島大学学術情報リポジトリに掲載されている。URL は以下のとおり。

[https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/31747/20141016182455394788/diss\\_ko1951.pdf](https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/31747/20141016182455394788/diss_ko1951.pdf)

<sup>84</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, pp.111 - 112

この時期に世に出るにはまず名を成さねばならぬことを悟り、科挙を受験することにした。そしてこの年にファン・ボイ・チャウは覈（郷試受験資格の認定試験）を受けて首席となった<sup>85</sup>。覈の首席に対しては頭処という称号が与えられる。儒生ファン・ボイ・チャウの肩書きは、科挙に合格する 1900 年まで、ずっとこの頭処のままであった<sup>86</sup>。

19 歳となった 1885 年、ハムギ（咸宜：Ham Nghi）帝を推戴した反仏派のクーデターが王都フエで起こり、中部各地の紳豪たちが呼応した。ゲアン省でもグエン・スアン・オン（Nguyen Xuan On）、ディン・ヴァン・チャト（Dinh Van Chat）などの官吏、紳豪たちが勤王の旗を掲げた。彼と友人達 60 人は「試生軍（Thi sinh quan）」を組織したが、この組織は軍備も糧食も欠けており、実体が備わっていなかった。フランスの鎮圧部隊が近づくと動揺して解体してしまった。その後の 10 年余りは、家計を支えるために教師稼業をし、雌伏の時期を過ごした。

1900 年、彼は 34 歳でやっと郷試に首席で合格しジィアグエン（解元：Giai nguyen）となった。ファン・ボイ・チャウは 6 歳から 34 歳までの 28 年間について『獄中記』の中で次のように述べている。

私は幼少から壮年時代にわたって頭が良いといわれ、螢雪の勤学も怠りませんでした。が、しかも得た所はわずに科挙の学問にすぎません。つまり当時清朝にあっては、科挙の学問が最も盛んで、わが国人は、事ごとにこれに倣っていやしくも似ないところを恐れるという有様でしたから、私達の出世の途はどうしてもこれによらねばならず、またこの時勢に従うまいとしても外に学問の途はなかったのです。ああ、このような時勢にとらわれた私が、ただ科挙の文詞に空しくほとんど半生涯の歳月をついやしたことは、実に私一生の損失であり、経歴中の最も大きな遺憾であります。<sup>87</sup>

1900 年、彼の父親が死に、家族に対する責任が軽くなったため、ファン・ボイ・チャウは科挙官僚の道を拒み、民族運動の道を目指し始めた。『年表』によると、ファン・ボイ・チャウはこの時次のような行動を始めたという。

その時、私は革命運動の計画の実現を始めた。まず、私の同志グ・ハイ（Ngu Hai）と討論し、3つの活動の計画を定めた。1つ、旧勤王の残党や緑林の青年と結び、義兵を集める、手段は暴動を第一とする。2つ、皇族の中から盟主を立て、密かに各地の有力者と結び、支援を求める、さらに南北の忠義の士を糾合し、同時の大挙を図る。3つ、以上の2つの計画を行うために、外国の援助を必要とする。もし外援が必要な時期には、出国して求援のことを起こす。この計画の目的についてはベトナムの独立を回復し、独立政府を立てる、それ以外には主義はなかったのである<sup>88</sup>。

<sup>85</sup> グエン・ティエン・ルック、「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」博士論文、p.28

<sup>86</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』、巖南堂書店、1993、pp. 57-58

<sup>87</sup> 南十字星訳「獄中記」、潘佩珠著；長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、p. 101

<sup>88</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.120

1902年にファン・ボイ・チャウはトンキンを視察した。彼はホアン・ホア・タム（Hoang Hoa Tham）の根拠地（フォンスオン：Phon Xuong）を訪問し、ファン・ボイ・チャウが蜂起すれば彼らは提携するという約束を得た。1903年春に彼はフエに戻って国子監に入学した。彼の目的は、フエでおとなしく勉学を続けて出世することではなく、フエ官界での人脈を作り、同志を求めることにあった。

彼が最初に接触を試みたのは、クアンナム（Quang Nam）省の勤王残党グエン・ハムであった。彼はこの後、ドンズー運動を展開する中心人物の一人となり、国内にあって参謀的な役割を担当することになった。『獄中記』によれば、この出会いの時に、グエン・ハムは彼に対して次のように述べたという。

元来、大事を図るには一に人心を収め、二に資金を集め、三に武器を整えねばならぬ。

人心を収めた上は大金は集まる。軍器の問題は従って解決にかたくはない。<sup>89</sup>

この3つの要素のうち、人心を収めるのが一番大切な事である。そのため、皇族を盟主に推戴することが必要であった。グエン・ハムはそのための方法として、この言葉に続けて皇族を推戴することを提案した。チャウはこれに賛成してフエへ戻り、皇族の中から畿外侯（Ki Ngoai Hau）クオン・デ<sup>90</sup>を選んだ。

1903年後半、彼は南遊に出立した。旅行の目的は、南部義兵の残党と接触することであり、南部志士グエン・タン・ヒエン（Nguyen Thanh Hien）と会った。彼らはその後、コーチシナにおけるドンズー運動の重要な支援者となった。

1904年4月にグエン・ハムの家で「越南維新会」（Viet Nam Duy Tan Hoi）を結成した（この会の活動については第二部第一章第一節で検討する）。

1905年2月、彼は2人の同志ダン・トゥ・キン（Dang Tu Kinh）、タン・バット・ホー（Tang Bat Ho）とともに密かに出国した。彼らは同年4月頃に日本に到着した。

## 第二節 ファン・ボイ・チャウの渡日前の日本観

ファン・ボイ・チャウは渡日前に近代日本の状況をどのように認識していたのだろうか。19世紀半ばからベトナムには中国から「新書」が伝わっていた。「新書」というのは従来の漢籍古典とは違い、中国と世界の新しい状況が書かれた、経世の方策を定義する内容のものであり、中国人の著作だけでなく、欧文の中国語への翻訳やベトナム人の著作をも含むものである。ベトナムの知識人はこの「新書」を読み、自らも「新書」を書いた。その際に彼が「新書」から得た、近代日本を含めた外界に対する認識を分析しておきたい。

『年表』によれば、彼は様々な「新書」を読んだ。具体的には『普法戦紀』（Phap Pho chien ky）、『中東戦紀』（Trung Dong chien ky）、『中国魂』（Trung Quoc hon）、さらにグエ

<sup>89</sup> 南十字星訳「獄中記」、長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、p.107

<sup>90</sup> クオン・デ（1882－1951）はフエにて、阮朝の始祖ザロン（嘉隆：Gia Long）帝の長子・英睿皇太子グエン・フック・カン（阮福景：Nguyen Phuc Canh）の直系4代目として生まれた。幼名はグエン・フック・ダン（阮福単：Nguyen Phuc Dan）。

ン・ロ・チャックの『天下大勢論』（Thien ha dai the luan）などである<sup>91</sup>。このうち日本認識に関わるのは『中東戦紀』と『天下大勢論』である。

『中東戦紀』は、1896年に出版された林樂知（『万国公法』主筆のアメリカ人ヤング・アレン）の著書である。ここでの「中」とは中国、「東」とは日本を指す。内容は日清戦争（1894－1895）の資料や評論を集めたものである。日清間の戦争、及び外交交渉の過程を詳しく記述したものであるが、著者の眼目は、対日敗戦の事実を指摘し、中国における改革の必要性を訴えることにあった<sup>92</sup>。

また、グエン・ロ・チャックの著作『天下大勢論』は、1892年のティディン（殿試：Thi Dinh）の課題として世界の大勢を問われた際に提出されたもので、漢文で書かれている。この著作の一部は1930年代に「ティエンジアン」（Tieng Dan）紙に紹介され、その後1995年にドアン・レ・ジャン（Doan Le Giang）、マイ・カオ・チュオン（Mai Cao Chuong）の両氏がグエン・ロ・チャックの著作を集めた際に、全文が紹介された。この本は『グエン・ロ・チャック：陳情書と詩文』<sup>93</sup>で、グエン・ロ・チャックの著書を現代ベトナム語に翻訳して出版した。『天下大勢論』の内容は日本の「富国強兵」、世界列強の情勢についてだけでなく、中国、タイの改革事情にも触れた評論である。ファン・ボイ・チャウは「新書」に接触した時のことを、『年表』に

梅山先生<sup>94</sup>は秘蔵していたグエン・ロ・チャックの著作『天下大勢論』を私に渡した。私はこの本を読んで初めて世界の大勢を知り、私の心の中に新しい思想がこの時初めて芽生えた。また梅山先生は私に『中東戦紀』、『普法戦紀』、『瀛環志略』などの書物を借してくれたので、私はそれによって西洋諸国の殖民地競争の状況、国家・民族滅亡の悲惨さのおおよそを知って、大いに驚いた。<sup>95</sup>

と記している。

ファン・ボイ・チャウは日露戦争における日本の勝利に大きな影響を受け、日本ならばベトナムに武器を支援してくれると考えた。ファン・ボイ・チャウは『獄中記』において、日露戦争のことを次のように述べている。

この時に当たって東風一陣、人をしてきわめて爽快の想いあらしめた一事件が起こりました。それは他でもない、旅順・遼東の砲声がたちまち海波を逐うて、私達の耳にも響いて来たことでありました。日露戦役は実に私達の頭脳に、一新世界を開かしたものであるということが出来ます。

（中略）

<sup>91</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア―ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』、巖南堂、1993、p.132

<sup>92</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア―ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』、巖南堂、1993、p.132；Nguyen Van Kiem, *Lich su Viet Nam*, p.55, Tran Van Giau, *Su phat trien tu tuong o Viet Nam tu the ky xix den Cach mang thang Tam*, pp. 409－412.

<sup>93</sup> Doan Le Giang, Mai Cao Chuong, *Nguyen Lo Trach, dieu tran va tho van*, NXB Khoa hoc xa hoi, Ha Noi, 1995

<sup>94</sup> 梅山先生（Mai Son Tien sinh）はグエン・テウオン・ヒエン（Nguyen Thuong Hien）

<sup>95</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu” in *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, pp. 116－117

今日の計としては日本新たに強く、彼もまたアジアの黄色人種である。今ロシアと戦ってこれに勝ったについては、あるいは全アジア振興の志もあろうし、かたがたわが国が欧州一国の勢力を削るは彼において利である。われらがここに赴いてこれに同情を求めれば、軍器を借り、もしくはこれを購うこと必ずしも困難ではあるまいと。<sup>96</sup>

また、『年表』には、グエン・ハムの意見として次のような文章がある。

ただ日本のみ、黄色人種でありながら維新をなした国であって、ロシアと戦って勝ち、野心まさに漲っている。今そこに住んで、利害を持って動かせば、きっとわが国を助けんと望むであろう。日本の出兵を求めることは難しいが、武器を売ったり、資を借りることについては必ずや容易に力となってくれるであろう。<sup>97</sup>

このようにファン・ボイ・チャウとその周辺の人々は、日本に大いに期待していたが、その一方で、彼は1903年に『琉球血涙新書』を書いている。彼はここで日本の琉球侵略について述べており、日本の帝国主義的性格を理解していたものとみられている。にもかかわらず彼は渡日して日本に援助を求めようとしており、それがなぜかで研究者の意見が分かれている。この問題については、第二部第一章第二節（1）で検討する。

以上、ファン・ボイ・チャウの渡日前の日本観を検討した。彼が日本とそれに関する世界情勢を知った情報源は「新書」であり、そこで日本が強国になってきたという認識を得た。そこに、日本の日露戦争勝利の情報が入り、日本に期待するようになったのである。ただし、彼は日本のことを絶賛していたわけではなく、その帝国主義的性格もきちんと認識していたのである。

---

<sup>96</sup> 南十字星訳「獄中書」、潘佩珠著；長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』平凡社、1966、pp.116-117

<sup>97</sup> Chuong Thau (ed), "Phan Boi Chau nien bieu", in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Ngon ngu Van hoa Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 129

### 第三章 ファン・チャウ・チンの日本観

本章では、義塾運動を検討する前提として、その指導者であったファン・チャウ・チンの人生を確認し、彼がどのような日本観を持っていたかを検討する。

#### 第一節 ファン・チャウ・チンの生涯（1872－1926）

ファン・チャウ・チンも 20 世時期初頭の民族解放運動家としてよく知られている。号は西湖（タイ・ホ：Tay Ho）である。彼は 1872 年、ベトナム中部クアンナム省タムキ府（Phu Tam Ky）ティエンフォン県（Huyen Tien Phuoc）タイロク村（Xa Tay Loc）に、3 人兄弟の第 3 子として生まれた。彼の父親は官吏で知識人の反乱に参加した 1 人であったが、1887 年、他の反乱指導者に敵に通じたとの疑いを掛けられて殺害された。これはファン・チャウ・チンの一家にも大きい影響をあたえ、ファン・チャウ・チンは 13 歳で孤児となったものの、家で科挙のための勉強に励んだ。1900 年、彼は郷試に合格して挙人（Cu nhan）の肩書を得ている。この時彼は 29 歳であった。さらに 1901 年に会試（Thi Hoi）を受けたファン・チャウ・チンは、これに補欠合格して副榜となった<sup>98</sup>。ファン・チャウ・チンはその翌年、父の死後親の代理となった長兄が亡くなったため田舎へ帰り、葬儀を挙げた。その翌年、1903 年に彼は戻って、フエで官職に就いた。この時のフエ滞在中に彼は「新学」に接し、多くの愛国の知識人と交流し、新しい政治主張を身に付けた。彼が当時交流した知識人は、ファン・ボイ・チャウ、ヒュウ・テック・カン（Huynh Thuc Khang）、チャン・クィウ・カップなどである<sup>99</sup>。しかし、ファン・チャウ・チンは伝統的な官僚機構に失望し、1905 年には辞職するに至った。それ以降彼は救国運動に専念したのである。

1905 年旧暦 2 月、ファン・チャウ・チン、ヒュン・テック・カン、チャン・クィウ・カップたち 3 人はアンナン南部諸省への行脚を行った。これは一般に南遊（Nam du）と呼ばれている。さらに、1906 年にトンキンに行って当時まだ反仏抵抗の陣を張っていたデ・タム（De Tham）に会い失望している。そして同年、香港を経由して日本へ到着し、数週間滞在中、ファン・ボイ・チャウとともにいろいろな場所を見学し今後のことを相談した<sup>100</sup>。帰国後しばらく経った 1906 年 8 月、インドシナ総督宛公開書簡『潘周楨投法政府書』を執筆した。

1907 年、ハノイに「ドンキン義塾」という愛国的で近代的な学校を設立した。彼はその講師となり、授業のいくつかではファン・ボイ・チャウの著書も使用した。しかし、1907 年 11 月にインドシナ総督の指示でドンキン義塾は閉鎖され、9 か月でその運営を終えることとなった。この「トンキン義塾」は慶応義塾の影響を受けたとされているが、確かにそうであるかどうかは第三部で検討する。

1908 年、チュンキ抗税デモがおきると、ファン・チャウ・チンは首謀者との嫌疑をかけ

<sup>98</sup> Chuong Thau (ed), Duong Trung Quoc, Le Thi Kinh, *Phan Chau Trinh toan tap*, tap 1, NXB Da Nang, 2005, p. 14

<sup>99</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*. Tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 124

<sup>100</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*. Tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 158



られ、コンダオ島に流刑にされる。1911 年、彼はサイゴンに帰され、さらに渡仏して 1925 年までフランスに滞在した。1922 年カイディン（啓定：Khai Dinh）帝がフランスを訪問したとき、彼は『七条陳』（That dieu tran）を書いて痛烈なカイディン帝批判をしている<sup>101</sup>。1925 年 6 月ファン・チャウ・チンはベトナムに帰り、同年 11 月に 2 つの重要な講演「君治主義と民治主義」（Quan tri chu nghia va dan tri chu nghia）、「東西の倫理と道德」（Dao duc va luan ly Dong Tay）を行った。その 1 ヶ月後彼は病気になる、1926 年 3 月 24 日、亡くなっている<sup>102</sup>。

## 第二節 ファン・チャウ・チンの日本観

ファン・チャウ・チンは 1903 年から 1905 年のフエ滞在中に、「新学」に接し、中国の洋務思想や変法自強思想を知った。つまり、彼は中国経由で西洋思想や近代文明の一端に触れたのである。また、日本の近代化についての情報も「新学」を通して得た。さらに、1904 年には日露戦争が始まると、ベトナム知識人たちの日本を明治維新という近代化事業を行った国という認識に、日本を黄色人種の強国として捉えるイメージが加わった。ファン・チャウ・チンも日本に強い関心を示すようになった。彼は日露戦争のことを「仏越連協後之新越南」に

突然、雷の聲が起こる、驚天動地、日露戦争の波紋、中国維新の動力が四方にひろがって、ベトナム全国を振り動かした。それゆえに全国の各党を揺り動かした。<sup>103</sup>

と述べられている。

1906 年春にファン・チャウ・チンは日本に渡った。彼は日本に数週間滞在して、ファン・ボイ・チャウといっしょに日本の各学校を見学し、1906 年前後にベトナムに戻ってきている。彼は日本の近代化事業には感銘を受けたようであるが、ファン・ボイ・チャウの武力革命によるフランス支配打倒の主張、日本の支援に頼らんとする姿勢には賛同しなかったとみられる<sup>104</sup>。また、ファン・チャウ・チンは日本に対する不信感を抱き、

現在世界で中国が自救することができないこと、日本が何にもすることができないことを知らなければ、あの人（筆者注：ファンを指す）の見識は何年か前のフエのヴォ・チュ（Vo Tru）（筆者注：勤王運動指導者の 1 人）、トンキンの天兵の見識とあまり異なるところはないだろう。もしファンの要求に応じれば、中国と日本が攻めて来ることになり、家（筆者注：ベトナム領土）に虎、狐を迎えて、両者が競争に興じることに他ならないだろう。<sup>105</sup>

<sup>101</sup> 今井昭夫「ファン・チュー・チンにおける「民主主義」と儒教」『東京外国語大学論集』第 40 号、1990、p.157

<sup>102</sup> Chuong Thau (ed), Duong Trung Quoc, Le Thi Kinh, *Phan Chau Trinh toan tap*, tap 1, NXB Da Nang, Da Nang, 2005, p. 41

<sup>103</sup> Chuong Thau (ed), Duong Trung Quoc, Le Thi Kinh, “Phap Viet lien hiệp hau chi tan Viet Nam” ,*Phan Chau Trinh toan tap*, tap 3, NXB Da Nang, Da Nang, 2005, p. 63

<sup>104</sup> グエン・ティエン・ルック「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」、p.40

<sup>105</sup> Chuong Thau (ed), Duong Trung Quoc, Le Thi Kinh, “Phap Viet lien hiệp hau chi tan Viet Nam” ,*Phan Chau Trinh toan tap*, tap 3, NXB Da Nang, Da Nang, 2005, p. .85

と述べている。また、ファン・チャウ・チンは日本の民智<sup>106</sup>とベトナムの民智を比べていた。『獄中記』には、このときのファン・チャウ・チンの言葉として、

日本国の民智を見てこれをわが国民に比ぶれば、実に雛鶏と大鷹の違いがある。大兄は今ここにあって、どうぞ力を、蒙を啓き愚民を指導する文字の著作に努められたい。

国内にあって子弟を開導することは、自分がこれに当たろう。自分の舌が動く間、フランス人は、これを如何ともなし得ないであります。 <sup>107</sup>

とある。

ファン・チャウ・チンが日本について注目したのは民智、民権、民主、文明である。「東西の道德と倫理」<sup>108</sup>によると、

今、イギリス、ベルギーは立憲君主制に従っている。その中の 2 つの国の民智は大変進歩的であった。つまり、王の権力は減らされたけれども、民は王を尊敬し、王は民を愛する。日本はまだ、他の 2 つの国に比べて劣っているけれども、いつの日か必ずそれらの国に追いつくことができるでしょう。 <sup>109</sup>

と、日本を評価している。つまり、ファン・チャウ・チンは、日本を立憲君主制の国とみなし、同じ立憲君主制のイギリスやベルギーのように民智が発展して、これらに追いつくだろうと、日本の民智の進歩を信じている。こうした日本に対する見方は、ファン・チャウ・チンが民智を啓発し、民の権利を向上させて、国内を改革しようとしたその方向性と一致している。

また、彼は「七条書」の中で日本の状況について、

今、我々は亜欧諸国の情勢に目を向けよう。日本は我が国と同文・同種の国であろう。その国は 40 年前に憲法をたて、議員の選挙権を民に与えた。国内の政治は民意によって実施する。天皇は専権を持っていない。そして今その国は強国となり、東亜の中で一番の国である。しかしながら、その民は天皇の権が大きすぎるとみなした。明治天皇は日本の重要な役割を果たした名君であったのに、明治末に天皇を刺殺しようとする陰謀があった。 <sup>110</sup>

と述べている。ここからすると、ファン・チャウ・チンは日本が憲法を制定して議会を設置し、立憲君主国になったことを高く評価していたことは間違いない。

また、ファン・チャウ・チンの日本観のもう 1 つの論点は、日本の文明と道德、倫理との関係であった。ファン・チャウ・チンの 1925 年の講演「東西の道德と倫理」には次のようにある。

<sup>106</sup> 民智は人民が持つ文化・知識という意味で用いられている。

<sup>107</sup> 南十字星訳「獄中記」、潘佩珠著；長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、pp.132-133

<sup>108</sup> 1925 年 11 月 19 日 サイゴンでファン・チャウ・チンが行った演説の題目。

<sup>109</sup> Chuong Thau (ed), Duong Trung Quoc, Le Thi Kinh, “Dao duc va Luan ly Dong Tay”, *Phan Chau Trinh toan tap*, Tap 3, NXB Da Nang, Da Nang, p.258

<sup>110</sup> Chuong Thau (ed), Duong Trung Quoc, Le Thi Kinh, “That dieu thu”, *Phan Chau Trinh toan tap*, Tap 3, NXB Da Nang, Da Nang, p.140

日本が今日強国になった理由は、欧州文明を学んだからなのか、それとも何かモデルを変更したからなのか、我が国の人はいつも日本と同種・同教・同文と自称しておりながら、日本がなぜ進歩・発展したのかを考えない。日本が強国となったのは造船し、鉄砲を作るだけではなく、道德の培養、倫理の修正によってでもあることを知っているのか。日本の歴史を読めば、日本人が皆道德をよく身につけていることがわかる。明治維新から 24 年後<sup>111</sup>に日本に憲法が公布された。<sup>112</sup>

上記の文章からすれば、ファン・チャウ・チンは、日本は西洋の文明を受け入れただけでなく、独自に道德と倫理を涵養したから強い国になれたという理解をしていることになる。それゆえに、ベトナムを強国にするには、日本の道德・倫理を学ぶ必要があると考えたのであり、そう考えたことが彼の義塾運動につながっていくという流れだと思う。ドンキン義塾の教科書『新訂倫理教科書』には「日本明治に勅語有りて云うに、一つ、軍人の本分は忠節を尽くすべし。二つ、礼儀を正すべし。三つ、武勇を尊ぶべし。四つ、信義を重んじるべし。五つ、質素たるべし。（日本明治有勅語云、一、軍人本分宜盡忠節。二、宜正禮儀。三、宜尚武勇。四、宜重信義。五、宜守質素。）」<sup>113</sup>という日本の道德・倫理について述べた箇所があり、ドンキン義塾において日本の道德・倫理が意識されていたということがわかる。

以上のように、ファン・チャウ・チンは、フエで新たに現れてきたベトナム知識人と交流し、早くから「新書」を読むことで日本に関する認識を得た。彼は武装闘争には反対で、暴動は必ず負けると考えた。1906 年に日本へ渡った後も、彼の考えは日本に救援を求めるのはよくないというものであった。この考えによって彼はベトナムにおける 20 世紀初頭の改良主義的な救国運動を行ったのである。

<sup>111</sup> 原文には明治維新から 24 年後に憲法が發布されたとあるが、実際には 1898 年なので、30 年後である。

<sup>112</sup> Chuong Thau (ed), Duong Trung Quoc, Le Thi Kinh, “Dao duc va Luan Ly Dong Tay” ,Phan Chau Trinh toan tap,,Tap 3, NXB Da Nang, Da Nang、p.260

<sup>113</sup> National Library of Vietnam、史料『新訂倫理教科書』第 2 章、兵役

<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/582/>（最終閲覧日 2016 年 5 月 20 日）

なお、この文章は、1882 年 1 月 4 日に明治天皇によって下賜された「陸海軍軍人に賜はりたる敕諭」、いわゆる軍人勅諭の一節である。

## 第四章 20 世紀初頭におけるベトナム知識人の日本観

この章では、ファン・ボイ・チャウとファン・チャウ・チン以外に、20 世紀初頭のベトナムの知識人が日本の近代化をどのように認識していたか、を検討しておきたい。

1905 年 4 月末ファン・ボイ・チャウと一緒に日本に行った同志の一人にタン・バット・ホーがいる。彼が日本に行くまえに持っていた日本の情報について、『越南義烈史』の彼の伝記には、彼の言葉として次のようにある。

癸卯甲辰の年（1903－1904）を経て、日露の戦役で日本が大勝した。東亜の風雲はただならず、中華の志士の著作論文、新聞雑誌がトンキン、サイゴンにはいる。公は懇意の華商に頼み手に入れ読んだ。膝をたたいて念うには、抱懷の計を試すときぞ至れり。ロシアはしりぞき日本が強くなった。欧州の潮勢がアジアで挫折の今、日本に往って武器援助の路と聞くべきかと、そしてまたは、外は強力な隣国と結ぶにせよ、うちに新党の組織がなくてはならぬと。<sup>114</sup>

彼のこの主張は、ファン・ボイ・チャウの受け売りに過ぎない。おそらくファン・ボイ・チャウの同志たちには特別な情報網があったわけではないので、日本が日露戦争に勝ったので、時代が変わりつつあるという程度の認識しかなく、具体的な日本認識はなかったものと思われる。

上記の程度でしかなかったベトナムの知識人の日本認識に対して、具体的な日本の姿を初めて提示したのが、1907 年にドンキン義塾が教科書として発行した『国民読本』である。この書物の著者は不明で、漢文で書かれている。ダオ・チン・ナットによれば、ドンキン義塾には印刷機があり、当時『国民読本』が千冊印刷されたという<sup>115</sup>。1 冊本ではあるが、内容は上下 2 編に分かれている。そのなかで日本について書かれているのは、上編の、「日本政府及地方制度、日本国議会及地方議会、日本学校」、下編の、「日本徴兵略法、日本裁判制度、日本刑罰、日本地方警察」である。以下、この中のいくつかを検討し、『国民読本』の認識がどれだけ正確であったかを確認したい。

『国民読本』の 30、31 番目の項目には「日本政府及地方制度、日本国議会及地方議会」がある。「日本政府及地方制度」には、「日本は明治初に政体の変更を議定し、全国政務は次第に変革していった。（中略）日本政府は内閣の諸官省大臣が参合して成る。内閣は重大事件を相談するところで、国のなかで最高の官府である。（中略）日本の諸官省は我が国の各部と同じである」<sup>116</sup>とある。内閣制度の理解はほぼ正しい。また、「日本国議会及地方議会」には「日本は変政の後、民智が大いに開かれ、天皇に政体の変更を請い、こうして君主制度から立憲制度に変わり、国の議会と地方議会を設立した。国民皆は議員を選挙する権利を有する。選ばれた者は忌避ができない。これもまた国民が享受すべき権利であり、

<sup>114</sup> 鄧搏鵬著：後藤均平訳『越南義烈史—抗仏独立運動の死の記録—』、刀水書房、1993、p.15

<sup>115</sup> Chuong Thau, Dao Duy Man (ed), *Dao Trinh Nhat tuyen tap tac pham*, NXB Lao Dong va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2011, p. 556

<sup>116</sup> National Library of Vietnam、史料 Quoc dan doc ban（国民読本）、上編 NLVNPF-0897-01, RV 1753、<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1111/>

尽くすべき責任である。特にこのことを記すのは、我が民の進取の心を発憤させるためである。国会は全国の政務を議論し、政府の統治を補佐するものである。(中略) 国会には貴族院と衆議院の両院に分かれている。」<sup>117</sup>とあり、国民皆に選挙権があるという点に間違いはあるが、それ以外はおおよそ正しい。

『国民読本』上編の36番目の項目は「日本学校」である。以下のように、ここには他よりもかなり具体的な記述があり、それはおおむね正確である。

全国通行の教育は文部省が担当する。兵事、航海、通信の教育はそれを管轄する各省が担当する。文部省に属する学校は以下のとおりである。

帝国大学 国家応用の学術、技芸を教育する。東京と京都にそれぞれ一所を設けている。東京大学の分科は6つあり、法、医、工、文、理、農である。京都大学の分科は4つあり、法、医、理、工である。

高等学校 専門学科を教授するものが八校ある。帝国大学の予備教育をするものが合わせて七校ある。

中学校 男子に必須の高等普通教育をなす。修業期間は五年。十二歳以上で、高等小学校の第二年課程を終えた者、或いは未だそれに及ばなくても同等の教育を有する者が入学できる。

小学校 高等と尋常の二つに分かれる。修業は九年間である。およそ国民はことごとく尋常小学校に入って学業を終えることになっている。ゆえに名づけて義務教育という。これもすなわち普及教育である。

師範学校 高等師範学校は師範学校、尋常中学校、高等女学校の教員を養成する。尋常師範学校は小学校の教員を養成する。

実業学校 農業、工業、商業において必須の教育をなす。その種類としては、工業学校、農業学校、商業学校、商船学校、実業補習学校がある。(中略)

高等女学校 女子に必須の高等普通教育をなす。修業期間は四年。十二歳以上で、高等小学校の第二年課程を終えた者、或いは同等の教育を有する者が入学できる。<sup>118</sup>

『国民読本』をみると、日本への関心は、とりわけ政治・制度に対するものが強く、それはおおむね正確であるといえるが、必ずしも詳細であるとは言えないようである。ただし、教育に関しては特に関心が強かったようで、かなり具体的なことにまで踏み込んだ記載があるといえよう。

この頃、日本の維新の成功とその近代化の進行を褒め称える詩歌が、ベトナム読書人社会で行われていた。たとえば、

ふりかざす独立の旗打ち振るは  
かの日本もと同文の国にして

<sup>117</sup> National Library of Vietnam、史料 Quoc dan doc ban (国民読本)、上編、NLVNPF-0897-01, RV 1753、  
<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1111/>

<sup>118</sup> National Library of Vietnam、史料 Quoc dan doc ban (国民読本)、上編、NLVNPF-0897-01, RV 1753、  
<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1111/>

はるかなる泰東に維新の声を雄叫びし

その日皇は比ぶるもなき英明の主<sup>119</sup>

という詩があったという。これには、日本にアジアの星としての希望を抱き、明治天皇を英明の主として賞賛する気持ちとともに、「同文の国」という表現のなかに、自分たちも同じことができるのではないかと期待するの気持ちがあると思われる。ベトナムの知識人は、日露戦争に勝った日本にアジア勃興の希望を見出し、その政治・制度などに強い関心を持ったが、具体的なことはほとんど知らず、それゆえに日本についてもっと詳しく学ぼうという気持ちが強くはたらく余地があったといえよう。それゆえに、ドンズー運動が登場したのであり、義塾運動において日本の詳細な情報が教科書を通して提供されて影響力を持つようになったのである。

---

<sup>119</sup> 阮章収（川本邦衛訳）「ヴェトナム近代における福澤諭吉と慶應義塾」（西川俊作・松崎欣一編『福澤諭吉論の百年』（慶応大学出版会、1999）pp.254-255

## 第二部 ドンズー運動 (1905－1909)

第二部では、ドンズー運動について検討する。日本におけるドンズー運動に関する先行研究としては、白石昌也やグエン・ティエン・ルックなどの研究がある。本稿では、日本におけるドンズー運動だけでなく、ベトナムにおいてドンズー運動がどのように展開したかも検討し、日本とベトナムのドンズー運動の関係について明らかにしたい。また、ベトナムでドンズー運動に参加した青年たちの特徴を地域に分けて分析し、ベトナムにおけるドンズー運動の検討に新たな視点を加えたい。

### 第一章 ドンズー運動の目的

#### 第一節 維新会の成立

ドンズー運動を推進したのは、ファン・ボイ・チャウが作った維新会である。ドンズー運動の目的を明らかにするためには、この会がどのような目的で作られたかを明らかにする必要があるので、本節ではこの会の成立を具体的に検討したい。

ファン・ボイ・チャウの回顧録である『年表』には以下のようにある。

その時、私は革命運動の計画の実現を始めた。まず、私の同志グ・ハイ (Ngu Hai) と討論し、3つの活動の計画を定めた。1つ、旧勤王の残党や緑林の青年と結び、義兵を集める、手段は暴動を第一とする。2つ、皇族の中から盟主を立て、密かに各地の有力者と結び、支援を求める、さらに南北の忠義の士を糾合し、同時の大挙を図る。3つ、以上の2つの計画を行うために、外国の援助を必要とする。外援が必要な時期には、出国して求援のことを起こす。

この計画の目的はベトナムの独立を回復し、独立政府を立てることであり、それ以外には主義はなかったのである。<sup>120</sup>

このグ・ハイと討議して決めた計画が維新会の政綱の基礎になった。

この計画を実現するために、ファン・ボイ・チャウと同志たちは様々な活動を行った。1902年、ファン・ボイ・チャウはトンキンを視察した。ファン・ボイ・チャウはイエンテェ (Yen The) でホアン・ホア・タムを訪問し、もしファン・ボイ・チャウが蜂起すれば提携するという約束を得た。1903年春、ファン・ボイ・チャウはフエのグオックテウジャン (国学監 : Quoc Tu Giam) に入学した<sup>121</sup>。

フエにおけるファン・ボイ・チャウの実際の目的はフエ官界に人脈を作ることであった。この時期にファン・ボイ・チャウは『琉球血涙新書』を書き、フエ官界の人々はこの本を読んだ。また、彼はファン・チャウ・チン、チャン・クイウ・カップ、ヒュウ・テック・カンなどと親交を持つようになった。同年に彼とテウ・ジョアン (Tu Doan) はコーチシナへ巡遊し、勤王残党の消息を尋ねた。この時期にチャウはコーチシナで運動し、彼らはの

<sup>120</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.120

<sup>121</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.122

ちにドンズー運動を支援する重要人物となるグエン・タン・ヒエンと接触した<sup>122</sup>。

1904 年 1 月、ファン・ボイ・チャウはフエに帰り、4 月にクアンナム省に戻った。ここで彼は同志 20 人ぐらいを集め、維新会という秘密組織を結成した。皇族のであるクオン・デを会主に推戴することに決まったが、すべての仕事は、ファン・ボイ・チャウ、グエン・ハム、タン・バット・ホーなどがとりしきっていた<sup>123</sup>。

維新会の中心的な計画は以下の 3 点である。第 1 に、会の拡大を図り、会員より出来るだけ早く会費を徴収すること。第 2 に、暴動を継続するために必要な各種資材の品目を出来るだけ早く決定、これを集めること。第 3 に、外国からの援助を求める方針を定め、その手段を直ちに決定すること。第 1 項と第 2 項については、会議に参加した党员一同が協力して実現することを議決したが、第 3 項については、グエン・ハムとファン・ボイ・チャウの両人がその折衝に当たり、各会員は、候補者が出国した後でなければ、この問題には触れないという固い約束をした<sup>124</sup>。

維新会を設立するうえでクオン・デが盟主になる意義はどのようなものであったのか。『獄中記』によれば

わが国民の知識習慣は決して欧州と同一には出来ないから、われらが今天下に号令して義軍を集めんには、まず君主を推戴してその名によってしなければ、名家豪族はこれに和するを肯じまい。(中略) 咸宜帝は流竄されて以来、すでに久しくその消息を聞かぬ。成泰帝は今賊の掌中にある。われらの今左右し得るは、実に本朝高皇帝の嫡嗣東宮の子孫が今になお存する。われら事を挙ぐるには、まずこれを助けて一党の主となさば、名義順にして号令も一途に帰しよう。風に順って叫べば、響きも遠くに達する。<sup>125</sup>

とされている。グエン・ティエン・ルックはこの史料をもとに、「皇族を盟主に推戴したのは、ファンたちがグエン朝の回復を期待したからではなく、それを否定して、「正統」な皇帝を対置することを意図したからである。彼ら自身が忠君思想を保守していたからではなく、その目的はあくまでも人集め、金集めのための「手段」であったというのである。ファンたちの行為は一見 19 世紀勤王運動世代と類似しているように見えながらも、その君主の位置づけは、全く異なった文脈の中でなされたことになる」<sup>126</sup>と述べている。従うべき理解であろう。

以上、この節で書いてきたことをまとめると、ドンズー運動を推進した維新会は、もともとベトナムの独立を回復する目的でつくられたもので、最初から義兵を集めて武力で革

<sup>122</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, , NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.125

<sup>123</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, , NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.127

<sup>124</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, , NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, pp. 127 – 128

<sup>125</sup> 南十字星訳「獄中記」、潘佩珠著；長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、pp. 107- 108

<sup>126</sup> グエン・ティエン・ルック「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」、p.69



命を起し、皇族を盟主にして南北の忠義の士を糾合し、そのために外国からの援助を受けることを計画していた。維新会ができると、計画は、会を拡大してできるだけ会費を徴収すること、暴動継続のために必要な資材を集めること、外国からの援助を得ることになり、前の二者は元の計画を具体化する形で変化したものだが、三つ目の外国から援助を得るという計画は変わっておらず、具体化もしていなかった。このあと、維新会では、グエン・ハムとダン・タイ・タン（Dang Thai Than）が国内の仕事を担当し、まだ具体化できていなかった国外に出て援助を求める仕事は、ファン・ボイ・チャウが担当することとなり、1905 年、彼は、タン・バット・ホー、ダン・テウ・キンを伴って国を脱し、国外で援助を求める計画を実行することとなった。

## 第二節 日本に対する武器援助要請計画

この節では2つの問題を検討したい。1つはなぜファン・ボイ・チャウは武器援助の要請先として日本を選んだのか。2つ目はなぜ援助計画は、ドンズー運動に変化したのか、である。

### (1) なぜファン・ボイ・チャウは日本を選んだのか

ファン・ボイ・チャウがなぜ支援先として日本を選んだのについては、グエン・ティエン・ルックにすぐれた考察がある。以下、その検討の道筋を要約し、その妥当性を確認する。

グエン・ティエン・ルックは、まず、ファン・ボイ・チャウが一番近い中国をどう見ていたかを検討し、中国が既にフランスにベトナムを割譲し、今や衰えているので、援助を期待すべき存在ではないと見ていたことを明らかにする。その上で、彼はファン・ボイ・チャウらの日本認識について確認していく。

まず、第一部で述べたように、「新書」を通じてファン・ボイ・チャウと同志たちは明治維新についての認識を得ており、日本の富国強兵、日清戦争での勝利の情報も把握していた。しかしそれより大きかったのは、1904-1905年に日露戦争で日本が勝利したことである。この情報はファン・ボイ・チャウの精神に影響した。『獄中記』によれば、彼は「日露戦役は実に私達の頭脳に、一新世界を開かしめたものということが出来ます」<sup>127</sup>と当時を振り返っている。『獄中書』には、1904年10月の維新会の諸領袖が集まって議論し、「今日の計としては日本新たに強く、彼もまたアジアの黄色人種である。今ロシアと戦ってこれに勝ったについては、あるいは全アジア振興の志もあろうし、かたがたわが国が欧州一国の勢力を削るは彼においても利である。われらがここに赴いてこれに同情を求むれば、軍器を借り、もしくはこれを購うこと必ずしも困難ではあるまい」<sup>128</sup>という認識で一致したとあり、このことがファン・ボイ・チャウが前述のように回顧した理由である。また、この

<sup>127</sup>南十字星訳「獄中記」、潘佩珠著；長岡新次郎，川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、p.116

<sup>128</sup>南十字星訳「獄中記」、潘佩珠著；長岡新次郎，川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、p.117

ことは『年表』にはグエン・ハムの意見として次のように記述されている。

ただ日本のみ、黄色人種でありながら維新をなした国であって、ロシアと戦って勝ち、野心まさに漲っている。今そこに住んで、利害を持って動かせば、きっとわが国を助けんと望むであろう。日本の出兵を求めることは難しいが、武器を売ったり、資を借りることについては必ずや容易に力となってくれるであろう。<sup>129</sup>

『年表』に従えば、この提案をしたのはグエン・ハムかもしれないが、最終的に皆意見一致したのだから、ファン・ボイ・チャウほか維新会の同志一同の認識だったといつてよからう。ともかくも、このようにファン・ボイ・チャウらは日露戦争に勝利した日本ならば容易に武器が手に入ると判断したのである。

一方で、彼らは 20 世紀初頭の日本が帝国になり、他国を侵略したという認識も持っていた。ファン・ボイ・チャウは日本に渡る前の 1903 年 5、6 月頃、高官に賛同者を得るために『琉球血涙新書』を著わしている。その内容は、『獄中記』によると「社稷滅亡の惨状と、降伏の国王が奴僕となるの奇辱とを述べ」<sup>130</sup>たものだという。ここからファン・ボイ・チャウが日本の帝国主義の本質を認識していたことはほぼ間違いないと見られているが、にもかかわらず、日本を支援者として選んだことについて、ベトナムの研究者は「ファン・ボイ・チャウは日本の帝国主義の本質（他国への侵略行為）を無視した」<sup>131</sup>と指摘し、また、「ファン・ボイ・チャウは日本同文同種同洲の説を過信した」<sup>132</sup>と述べていた。グエン・ティエン・ルックは、こうしたファン・ボイ・チャウが日本の帝国主義的あり方を無視したり、日本を過信したりしたという説に疑問を呈している。そして日本の研究者の見解を次のように追いながら、自分の見解を示している<sup>133</sup>。

日本では 70 年代に酒井いづみと川本邦衛がファン・ボイ・チャウの認識を評価し、酒井いづみは「ファン・ボイ・チャウの初期の対日認識は、必ずしも帝国主義の認識へと深まってはいない」<sup>134</sup>と指摘した。これに対し、川本邦衛は日本には侵略者になったというイメージと、近代化成功の国だというイメージの 2 つが存在していたと論じ、「日本に援助を求める緊急の意志の前に、琉球を「侵略」した日本の影を抹殺したのである」<sup>135</sup>と述べた。90 年代に酒井・川本の見解を批判的に検討した白石昌也は「社会ダーウィニズム説」によってこの問題を解明した。つまり、20 世紀初頭にベトナムでは知識人の間に中国から「新書」が伝播して、社会ダーウィニズム説の影響を受けた。ファン・ボイ・チャウは著作の中で「世界競争」、「自救自強」、「弱肉強食」などの概念について述べているが、彼は、フランス人は人種的に生来優れており、ベトナム人は生来劣っているという、必然的で不可抗力的な人

<sup>129</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.129

<sup>130</sup> 南十字星訳「獄中記」、潘佩珠著；長岡新次郎、川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、p.112

<sup>131</sup> Nguyen Khanh Toan, *Lich su Viet Nam*, tap 2, NXB Khoa hoc xa hoi, Ha Noi, 1971, p. 118

<sup>132</sup> Nguyen Khanh Toan, *Lich su Viet Nam*, tap 2, NXB Khoa hoc xa hoi, Ha Noi, 1971, p.118

<sup>133</sup> グエン・ティエン・ルック「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」、pp.71-73

<sup>134</sup> 酒井いづみ「ベトナムにおける 20 世紀初頭の抗仏闘争—Phan Boi Chau の思想と活動—」『月刊アジア・アフリカ研究』、134 号、p.23

<sup>135</sup> 川本邦衛「ファン・ボイ・チャウの日本観」『歴史学研究』391 号、1972、p.44

種決定論を採用することはなかった。また、彼は「自救自強」の必要性を強調している。近代において、日本は「自強」に成功したので、ロシアに勝って、アジアの強国として世界の舞台に立ったのであるとしている。結局、白石は、むしろ日本が同文同種の中国を打ち破り、琉球・台湾を併合した事実を知っていたからこそ、日本に惹かれたとの見解を示したのである<sup>136</sup>。

こうした白石の見解に対してグエン・ティエン・ルックは、ファン・ボイ・チャウが「社会ダーウィニズム論」の影響を受けたのは渡日後であることを指摘し、この見解を否定する。そして、ファン・ボイ・チャウが日本を選んだのはフランス植民地支配体制を倒しベトナム独立を回復するという目的を達成するために、可能な限りの手段を利用しようとしたからであるとの見解を示す。その根拠としてファン・ボイ・チャウ自身が「目的を達成するために、どんな手段でも利用した」と述べていることを挙げている。そのため、ファン・ボイ・チャウたちは、20世紀初頭に日本帝国主義の本質を知っていたにもかかわらず、「当時のアジア国際関係の中で日本は強国であり、ベトナムと「同文同種同洲」の国であり、フランスの同盟国であるロシアの敵国であり、アジアの「覇主」となる意欲を持っていた国であるから、ベトナムは日本に武器援助を求めることができると判断し、日本に来ることを決意したと考えるべきであろう」<sup>137</sup>と述べている。

グエン・ティエン・ルックはベトナムや日本の研究者の見解を丁寧に精査しており、従ってよい見解と思われる。

## (2) なぜ援助計画は変化したのか

こうして武器援助を得る目的で日本に来たファン・ボイ・チャウは、日本滞在中にこの援助を得る計画を放棄して、ドンズー運動を行うことになるのだが、ではなぜ彼はその目的と計画を渡日後に変更したのであろうか。渡日の経緯と渡日後の行動を追いながら、それを検討してみたい。

維新会を設立した後、ファン・ボイ・チャウの関心は出国の問題にあった。『年表』によれば、ファン・ボイ・チャウはグエン・ハムに向かって、出国に関する問題点として、「出国に関して切に求めているのは、一つは経費の捻出であり、一つは外交の任に当たる人物の選考であり、一つは道案内の指名である。」<sup>138</sup>を挙げている。これに対して、グエン・ハムは、ファン・ボイ・チャウに向かって

経費いっさいは私と山叟兄<sup>139</sup>とで全責任を持つから安心していてもらいたい。今外交担当の人材の選考が難しく、人材がなかったので、兄は必ず行かなければならない。

<sup>136</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動との日本・アジア―ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書、1993、pp.383-390

<sup>137</sup> グエン・ティエン・ルック「ベトナム・日本関係史の研究―明治維新から太平洋戦争まで―」、p.73

<sup>138</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 129

<sup>139</sup> 山叟はド・ダン・テウイエン (Do Dang Tuyen) の別号

道案内の選考については、私に意中の人物がいる。<sup>140</sup>

と答えたという。このように、経費はグエン・ハムとその兄（ド・ダン・テウイエン）が、外交の任はファン・ボイ・チャウが担当し、道案内はタン・バット・ホーが担当した<sup>141</sup>。

1905年2月頃、ファンはタン・バット・ホー<sup>142</sup>、ダン・トウ・キン<sup>143</sup>とともに出国した。彼らはこの年の2月上旬に、船で香港へ到着した。途中でベトナム人船員リ・トウエ（Ly Tue）<sup>144</sup>と知り合っている。彼はその後、中越間の連絡や密出国の世話などの面で、ドンズー運動にとって不可欠な存在となる。

その後、香港から上海に向かい、当地より4月頃日本船で、まず神戸に到着し、次いで横浜に到着した。ファン・ボイ・チャウは日本に来る前からその著作を読んでいた梁啓超が横浜に住んでいることを知っていて、梁館（梁啓超の住宅）<sup>145</sup>を確かめた後、梁啓超に面会を求めて以下のような手紙を送った。

落地一声哭

即己相知

読書十年眼

遂成通家<sup>146</sup>

梁啓超はこの手紙を読んで、深く感動して、ファン・ボイ・チャウの学識を高く評価し、自宅に彼を招いた。会談は、最初タン・バット・ホーの通訳で話を始めたが、タン・バット・ホーでは充分通訳ができなかったので、肝心のところは、すべて筆談となった。

初対面の会談の後、2回目の会談が横浜中華街のある建物で行われた。その会談の内容はベトナム亡国についての説明が中心であり、さらにファン・ボイ・チャウの活動方針についての議論が中心であった。3・4時間の筆談のなかで、彼がファン・ボイ・チャウに向かって述べたこととして、『年表』には

貴国に独立の日の来ないなぞと心配する必要はありません。問題は一つに貴国にそれだけの実力がありや否やにかかっていると私は思う。<sup>147</sup>

<sup>140</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 129

<sup>141</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 129

<sup>142</sup> タン・バット・ホー（曾拔虎）1858－1906、ビンデイン（Binh Dinh）省の出身。彼は勤皇運動に参加した。Dang Doan Bang, Phan Thi Han, *Viet Nam nghia liet su*, NXB Van hoc, Ha Noi, 1972, pp. 25-30

<sup>143</sup> ダン・テウ・キンは（1875－1928）、Nghe An（ゲアン）省の出身。彼はドンズー運動の重要人物である。Dang Doan Bang, Phan Thi Han, *Viet Nam nghia liet su*, NXB Van hoc, Ha Noi, 1972, pp.

<sup>144</sup> リ・トウエ（Ly Tue）、実名はグエン・ヒュウ・テウエ（Nguyen Huu Tue）（1871－1938）、Hai Phong（ハイフォン）省の出身。So Van Hoa Thong Tin Hai Phong, Thu vien Hai Phong, *Nhan vat Lich Su Hai Phong*, NXB Hai Phong, 1998, p. 193

<sup>145</sup> 福永英夫氏によれば「ファン・ボイ・チャウは、横浜に着くと早速、山下町で『新民叢報』を発行していた中国の亡命者梁啓超を訪れた。」という。（福永英夫『日本とヴェトナム—その歴史のかかわり』近代文芸社、1995、p.130

<sup>146</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.143

<sup>147</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.143

とある。また、梁はその時、ベトナムの国権回復に必要な三条件をあげた。一つ目はベトナムの国内の実力、二つ目は両広（広東・広西）の援助、三つ目は日本の声援、である<sup>148</sup>。その上で梁啓超は、国に実力がなければあとの二つは国にとって良いことにはならないとし、そのことにさらに説明を加え、

貴国の實力というのとは民智、民氣、人材である。両広の援助とは両広の兵と軍糧・武器の援助である。日本の声援とは、日本外交上の援助であり、アジアの強国にヴェトナムの独立をまっ先に承認してもらうことである。<sup>149</sup>

と述べている。つまり、梁啓超は外国から援助を獲得する以前の問題として、まず自分自身の国の實力、いいかえると「民智」「民氣」「人材」を培養することが先決であると主張したのである。

また、ファン・ボイ・チャウの日本から武器援助を受ける計画に対しても、梁は言下に、それは禍を後に残す恐れが充分あるから止めておいた方がよくはないかと私は思う。万一日本がヴェトナムに兵を出してくれたと仮定してご覧なさい。駐屯の必要がなくなつて撤退してもらいたいと申し出た時、先方がおいそれとすぐ軍隊を引きあげてくれるかどうか。その時になつてみないと分からないではありませんか。結局、独立を図つて亡国を誘い込むような羽目に陥らないと誰が保証しますか。<sup>150</sup>

と答えたという。

その後数日して、ファン・ボイ・チャウは梁に日本の政治家への紹介を求めた。その結果、1905年5月中旬<sup>151</sup>、彼は大隈重信、犬養毅に面会することができ、その場で彼は日本に武器援助を求めた。『年表』によれば、大隈たちは協議をしたうえで、

現在政党としては貴公の計画を援助できる。しかし、日本政府が兵力をもつて公然と君たちの運動を援助することについては、今はその時ではない。国際情勢は日本とフランスだけの問題ではなく、歐洲・アジアが勝利を競う問題なのである。もし日本が貴国を援助しようとするれば、必ずフランスと開戦することになり、仏日両国が開戦すれば、その戦争は2国の間だけではない、全世界の動乱にも発展しかねない。今日の日本の国力を以て全歐洲と争うにはなお力不足である。君達は耐え忍んで機会の至るを待たれよ。<sup>152</sup>

<sup>148</sup> Chuong Thau (ed), "Phan Boi Chau nien bieu", in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.143

<sup>149</sup> Chuong Thau (ed), "Phan Boi Chau nien bieu", in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.143

<sup>150</sup> 内海三八郎著、千島英一・櫻井良樹編『ヴェトナム独立運動家 潘佩珠伝—日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯』芙蓉書房、1999、p.57。この本は内海三八郎の「潘佩珠自判解説」を中核に編集されたものである。本書には「自判」本文が収録されている。この「自判」は一般に『潘佩珠年表』と呼ばれるもので、「潘佩珠自判解説」は内海が「自判」の内容に独自の解釈や調査を加えたものである。本書出版の経緯については、本書の「本書の成り立ちについて」(p.3) および「解説」(pp.319-330) に詳しい。

<sup>151</sup> Chuong Thau (ed), "Phan Boi Chau nien bieu", in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 144

<sup>152</sup> Chuong Thau (ed), "Phan Boi Chau nien bieu", in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 144

と述べた。さらにまた、大隈は

君が貴国の党員を連れて日本へ来れば、我が国はこれをことごとく収容することができる。或いは君達が我が国に居住したいというのであれば、私はしばらく君達のために住居を援助し、外国からの賓客の礼で優待し、生計についても心配させはしない。義侠心を尊び、愛国心を重視するというのが日本人の特性である。<sup>153</sup>

とも述べた。つまり、大隈らは武器援助計画を否定し、代わりに維新会の党員たちが日本へ来て勉強することを勧めたのである。

その後、ファン・ボイ・チャウは再び梁館を訪問した。会談の内容はベトナム革命運動の方法についてで、梁啓超が提案した計画は以下のようなものであった。

一、読む人の肺腑をえぐるような激烈な文字を使用、断末魔の苦しみを受けているヴェトナムの実情を詳しく描写し、あわせてフランス人のヴェトナム民族去勢、抹殺の毒謀を暴露して、広く世界の与論に訴えるという宣伝工作が一つ。

二、この暴露宣伝文が出来たら、貴公親らそれを携え帰国し、出来るだけ多くの青年の海外脱出運動を起こし、これによって一般国民を刺激してその覚醒をうながす<sup>154</sup>。

つまり、梁啓超は、著作を以て世界の世論に訴えるとともに、それを持って帰国して青年たちを外国に留学させ、国民の覚醒を促すのが良策だというのである。ファン・ボイ・チャウはこれに納得し、以後、その提案に沿って行動するのである。

ファン・ボイ・チャウ達の当初の目的は日本へ武器の援助を求めることであった。しかし、日本へ来て、梁啓超や日本の政治家と会談し、彼らは目的を変更したのである。そして、ファン・ボイ・チャウは「人材」を培養する必要があると考えた。1905年9月に彼は『勸国民資助遊学文（Khuyen quoc dan tu tro du hoc van）』を書いた。この中で彼は次のように述べる。

日本が維新の事業を成し遂げるを得たのは、民智を啓き、人材を培養するために、人を外国遊学に派遣することの必要性を、良く知っていたからである。ただしその日本にしても、初めはただ1人の吉田松陰しかいなかった。しかしその後、幾千幾万の吉田松陰が次々に現れた。ひるがえって我がベトナムを顧みるに、我が民の困難の原因には、2つの病根がある。愚昧と懦弱がそれである。<sup>155</sup>

そしてそれを正す方法は外国に出て留学するしかないと述べるのである。つまり、「人材」を培養するために、海外留学の運動を起こすべきだという主張が、この『勸国民資助遊学文』の内容なのであり、これを目的としてドンズー運動は始まるのである。

このようにファン・ボイ・チャウの渡日当初の目的は、ベトナム国内で革命運動を開始

<sup>153</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau Toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.145

<sup>154</sup> 内海三八郎著、千島英一・櫻井良樹編『ヴェトナム独立運動家 潘佩珠伝—日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯』芙蓉書房、1999、p.62

<sup>155</sup> Chuong Thau (ed), “Khuyen quoc dan tu tro du hoc van”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 2, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.255.

するのに必要な武器を調達することであった。しかし、日本に到着した後、彼らが接触を持った梁啓超や日本人政治家たちは、日本がベトナムの革命党に武器援助することではなく、当面は「人材」培養、「民智」啓発、「堅固な基礎」の構築のための運動に専念すべきことを説いた<sup>156</sup>。これを受けてファン・ボイ・チャウはその目的を変更し、ドンズー運動を起こしていったのである。

---

<sup>156</sup> 白石昌也「ベトナム青年の日本留学—明治期日本における東遊運動」『国立教育研究所紀要』121、1992、p.39

## 第二章 ベトナム青年の渡日留学とその活動

1905 年 4 月ごろ、ファン・ボイ・チャウは同志 2 名とともに、日本へ到着した。彼の渡日の最初の目的は、ベトナム国内の革命運動を展開するための武器を求めることであった。そこで、彼は梁啓超や大隈重信、犬養毅などの日本の政治家たちと接触したが、大隈らは日露戦争終結後の複雑な国際関係の中で、日本がベトナム革命党に軍事援助する状況になことを論じ、当面、ベトナム革命運動のために「人材」培養、「民知」啓発に努め、ベトナム国内に「堅固な基礎」を構築すべきことを意見した。「人材」培養は、ベトナム青年を日本で勉学させること、「民知」の啓発は、宣伝文書を執筆し、印刷しベトナムに搬入することを意味した。本章では、そうした動きを受けたベトナム青年の渡日とその活動を詳しく検討したい。

### 第一節 ベトナム青年たちの渡日学習状況

1905 年 6 月、ファン・ボイ・チャウは『越南亡国史』を書き、梁啓超に出版を頼んだ。1 週間後、印刷ができたので、ファン・ボイ・チャウは梁館を訪問し、帰国の決意を述べ『越南亡国史』50 部を持って帰った<sup>157</sup>。帰国の目的は、畿外侯クオン・デをフエから連れ出すことと、優秀な青年数名を日本へ連れ帰ること<sup>158</sup>の 2 つであった。

1905 年 7 月ごろ、ファン・ボイ・チャウはベトナムへ帰国して、国内の同志と接触し、革命計画の方法を説明し、ベトナム青年たちを日本に留学させることを提唱した。『年表』によれば、日本に行く青年たちの選考について次の 4 点に留意したという。

- 一、留学生は好学聡明にして、いかなる苦難にも耐える、途中絶対に挫けない堅い決心の持ち主であること
- 二、留学生の経費は激烈派<sup>159</sup>と和平派<sup>160</sup>とが協力して捻出すること
- 三、留学生引率の責任者は、充分信用のおける同志の中より厳選すること
- 四、一切の書類、報告書は特別の符号で書き、できれば明礬の水書きを用いること<sup>161</sup>。

こうしてドンズー運動は始まった。

#### (1) ベトナム青年留学生の数

同年 9 月、ファン・ボイ・チャウは、選考された青年 3 名と横浜へ戻ってきた。3 名はグエン・テウック・カン (Nguyen Thuc Canh)<sup>162</sup> (別称はチャン・チョン・カック (Tran Trong

<sup>157</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.147

<sup>158</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.147

<sup>159</sup> 激烈派は、『年表』によると、軍隊に運動し、武装を整備し、革命を実行しようとする者たちである。

<sup>160</sup> 和平派は、『年表』によると、学堂・演説・宣伝に力を注ぐ者たち。のことである

<sup>161</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.148

<sup>162</sup> グエン・テウック・カンはファン・ボイ・チャウの恩師の息子。彼はドンチュウ村 (Dong Chu) (ゲアン省) の出身。



Khac))、カオディン (Cao Dien) 村のグエン・ディエン (Nguyen Dien, Nguyen Diem)、タンホオア (Thanh Hoa) のレ・キエット (Le Khiet) であった<sup>163</sup>。それとほぼ同時にトンキンから5名の少年と1名の青年が日本へ到着した。そのうちルオン・ラップ・ニャム (Luong Lap Nham)、ルオン・ギ・カン (Luong Nghi Khanh) 兄弟<sup>164</sup>、グエン・ハイ・タン (Nguyen Hai Than) が先に到着し、残った3人のうち1人はハドン省出身のグエン・ディエン (阮典: Nguyen Dien) で、2人は名前が確認できなかった<sup>165</sup>。そして1906年3月はじめには、ファン・ボイ・チャウたちの盟主である青年クオン・デが日本に到着した。

その後、ファン・ボイ・チャウの書いた『勸国民資助遊学文』が国内に搬入されると、北部のトンキン、中部のアンナンの青年たちはこの著作を読んで、出洋し始めるようになる。トンキン・アンナンの青年たちは紳豪階層 (農村の知識人・有力者) の子弟であった<sup>166</sup>。また、1907年以降、ファン・ボイ・チャウたちは南部に対する働きかけを強化し、南部のコーチシナの青年たちも日本遊学を開始した。コーチシナの青年の大半は地主階層と都市富裕階層の子弟であった<sup>167</sup>。

では、ここで、1905年から1909年まで日本に滞在したベトナム青年たちの数について検討したい。

ファン・ボイ・チャウの『年表』では、ドンズー運動が最高潮に達したのは1907年10月から1908年6月にかけてで、留学生の数は200人に上ったとされる<sup>168</sup>。また、グエン・テック・カンの回想録によれば、

1907年夏までに渡日ベトナム青年は約100人に達した。しかし、振武軍事学校はすべてのベトナムの青年を収容できなかったのも、サオナム (ファン・ボイ・チャウ) は同亜同文会にベトナム青年を無制限に入学させることを求めた。これに対して、細川は我が国の学生のために、特別教室を設立することに同意した。それ以降、学生団の解散した時点、つまり1908年にかけて日本に滞在する学生の全数は約200名に達した。東京はベトナム革命党の楽園となった。<sup>169</sup>

とあり、1908年までの総数をやはり約200人としている。

一方、日本側資料を見ると、

明治四十年から明治四十一年にかけては東京に於ける安南留学生の数はかれこれ一百名に達し、その大部分は目白の東京同文書院に入学したのであったが、当時同書院に

<sup>163</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.148

<sup>164</sup> 北部地方の有名な知識人ルオン・ヴァン・カン (Luong Van Can) の息子。1907年、ルオン・ヴァン・カンはハノイで民族主義的私立学校ドンキン義塾の塾長を務めた。

<sup>165</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.150

<sup>166</sup> 本論文第二部第三章第一節・第二節参照

<sup>167</sup> 本論文第二部第三章第三節参照

<sup>168</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.181

<sup>169</sup> Tran Trong Khac *Nam muoi bon nam hai ngoai*, Sai Gon, 1971, p. 29

は中国留学生が多く、一見して中国留学生と安南留学生との区別が付かなかった<sup>170</sup>。とされている。また、デビッド・G・マー (David G. Marr) が『ベトナム反植民地主義 1885-1925』の中でフランスの資料を用いて、ベトナム留学生の数は約 300 人<sup>171</sup>と述べている。

以上の資料を参考にすると、日本に滞在したベトナム青年留学生の数が約 100 名、200 名、300 名と見解が異なる。日本側のものはその史料の性格上、東亜同文書院に入学した者にしか目が行っておらず、振武軍事学校の入学者まできちんと把握できていなかった結果と思われるし、フランスの資料は彼らが探索した結果なので、脅威に感じていた分、人数を多く見積もったものと思われる。ベトナムの資料は、実際にドンズー運動を指導していたファン・ボイ・チャウの見解であるから、より確からしいと考えられるので、おそらく留学生の人数は約 200 名に達したと思われる。

## (2) ベトナム青年留学生の生活

1905 年 9 月末に横浜に到着したファン・ボイ・チャウ達の生活は、当初かなり困難であった。彼は青年 3 名と梁館<sup>172</sup>を訪問した。梁はファン・ボイ・チャウに留学生のことを聞いた。これに対してファンは

私は国内の同志と協力し、留学生の勧誘に努めたのですが、一番の困難は経費です。

貧家の子弟は、海外遊学を希望しても金がなく、裕福な子弟は親の方で許さず、3 ヶ月、

私が全力を尽くして得たものはこの 3 名だけでありました。<sup>173</sup>

と答えた。

ファン・ボイ・チャウは初めて横浜に到着した時に、小さな日本家屋を借り受けていた。そこは彼とダン・テウ・キン (Dang Tu Kinh)、タン・バット・ホーの 3 名がようやく足腰をのばし得るだけの狭い裏店であった。そこへファン・ボイ・チャウが連れてきた 3 人、次にトンキンからの 6 人が増えて 12 人にもなったのだから、足の踏み場もなく、おまけに本国から送金を受けなかったので大きな借家を探すことも出来ず、「人満金空」の状況であった。そのため、タン・バット・ホーは近くの広東商店へ行き、白米、薪炭を掛けで買って来た。彼らの生活は、おかずなしの粗飯 1 日 2 回、台所の食器棚の上にあるものといえは塩 1 合と番茶数杯分、狭い部屋で 9 人が暮らすというものであった<sup>174</sup>。また、タン・バット・ホーはリュ・ヴィン・フック (Luu Vinh Phuc) に金を借りた。このようにファン・ボイ・チャウと留学生の状況は貧窮していた。そこで彼は、ベトナムの国内から金銭的な援助を受けたいと考え、ファンは「勸国民資助遊学文」<sup>175</sup>を書いた。1905 年 9 月、タン・

<sup>170</sup> 黒龍会『東亜先覚志士紀伝』(中巻)、原書房出版社、1966、pp. 819-820。これはもともとは黒龍会出版部によって、1933 年に出版されたもので、原書房はそれを復刻したのである。

<sup>171</sup> David G. Marr, *Vietnam Anti colonialism 1885-1925*, University of California Press, 1971, p. 143

<sup>172</sup> 梁啓超の邸宅は横浜中華街にある。

<sup>173</sup> Chuong Thau (ed), "Phan Boi Chau nien bieu", in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa - Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.150

<sup>174</sup> Chuong Thau (ed), "Phan Boi Chau nien bieu", in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa - Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p. 151

<sup>175</sup> Chuong Thau (ed), "Khuyen Quoc dan tu tro du hoc van", in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 2, NXB Thuan Hoa -

バット・ホーとダン・テウ・キンはベトナムへ「勸国民資助遊学文」を持って帰った。

内海三八郎のファン・ボイ・チャウの伝記には、次のような逸話が載っている。

ルオン・ラップ・ニャム (Luong Lap Nham) は「こんな時に笛を吹かずして、何時の日か復之を吹かんや」と言ったかと思うと、そのまま飛び出し、東海道を歩いて東京へ向かい、途中親切な百姓家で握り飯、お茶を恵んでもらい、その夜遅く東京に着いた。彼は日本警察に会った時、日本語が話せなかったのも、紙と筆で説明した。ルオンは「私は安南から来た留学生、今朝早く横浜を立ち歩いて来た」と漢字で書いて見せた。彼は警察からお金をもらったが、横浜へは帰らなかった。東京周辺を見て回り、運良く民報会館を探し当てた。同会館は当時日本にあった中国革命党<sup>176</sup>の報道機関で、章太炎 (チュオン・タイ・ヴィエン : Chuong Thai Viem) が主筆、張継 (チュオン・ケ : Truong Ke) が管理者であった。ルオンから悲惨な実情を聞いた両者は大いに同情し、「それは実に気の毒な話だ。君は3等書記として、わが社で使ってやろう。なおそんなに困っているのなら、別に3、4人はここで何とか面倒を見てやってもよいから、一度横浜へ帰って先生とよく相談の上、君の仲間を連れて来なさい」と親切に言ってくれた。翌日彼は同郷の少年2人を連れて上京、民報会館に寄宿、仕事の合間には一生懸命日本語を勉強した。3人を減らした横浜本部の残り6名は、毎日日本の子供のように「あ、い、う、え、お、か、き、く、け、こ」を何度も何度も繰り返して日本語を勉強した<sup>177</sup>。

このことが契機になったのか、このころからファン・ボイ・チャウは章太炎・張継らと接触するようになり、その交際は朝鮮・インド・フィリピンなどの留学生へと広がり、「東亜同盟会」を組織するようになったという<sup>178</sup>。

その後、1907年6月に、ベトナム青年たち16人は、小石川区関口町にある青龍館という下宿に入り、翌月3日、同区高田老松町の玉名館に転居するとともに、つれてきた留学生全員を同文書院の寄宿舎に入れた。この16人は、旧内務省の資料によれば、漢世美、阮田之、阮祖之、陳有章、潘至宝、卿高吾、黄有文、潘美雪、陳致君、朱少郎、丁興兼、阮赤心、卿田天、武王佐、阮正気、訓啓聖の16名である<sup>179</sup>。また、ベトナム人青年たちは日本の政治家からの援助を受けた。たとえば柏原文太郎は数名の年少学生を自宅に引き取って、自分の子のようにいつくしんだ。ベトナム人青年らは、柏原夫妻を「お父さん」「お母さん」と呼んだという<sup>180</sup>。

---

Trung Tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, pp. 253- 259

ファン・ボイ・チャウは日本で「勸国民資助遊学文」を書き、印刷した。

<sup>176</sup> 中国革命党については、原資料 (自判) に中国革命党と記載されているので、そのまま使用した。正しくは中国同盟会。

<sup>177</sup> この段落は、内海三八郎著、千島英・櫻井良樹編：『ヴェトナム独立運動家潘佩珠 伝ー日本・中国を駆ける抜けた革命家の生涯』芙蓉書房出版、1999、pp.70-72を参照して執筆した。

<sup>178</sup> 南十字星訳「獄中記」、潘佩珠著；長岡新次郎、川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、p.146

<sup>179</sup> 長岡新次郎「日本におけるヴェトナムの人々」、長岡新次郎、川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、p.260・262

<sup>180</sup> 長岡新次郎「日本におけるヴェトナムの人々」、長岡新次郎、川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』、平凡社、1966、p.260

以上のように、当初ベトナム青年たちは日本語が話せず、送金にも限りがあったため、生活が困難であった。その後、中国革命家との接触で少し改善され、日本の政治家たちの援助をえることができるとさらに改善されたのである。

### (3) ベトナム青年留学生の勉学

ファン・ボイ・チャウの『年表』によると、1906 年初めに、彼はベトナム青年の入学先の斡旋について犬養毅に協力を依頼した。相談を受けた犬養は、彼を東京同文書院長の細川護成、東亜同文幹事長の根津一、陸軍参謀本部次長兼振武学校校長の福島安正、東京同文書院長の柏原文太郎などに紹介した。相談した結果、振武学校に、グエン・テック・カン、ルオン・ラップ・ニャム、グエン・ディエンの計 3 名、東京同文書院にルオン・ギ・カン 1 名が入学することになった。他のベトナム青年たちは横浜の「丙午軒」(ビンゴヒエン : Binh Ngo Hien)<sup>181</sup>に残って日本語の勉強を続けた。また、遅れて日本へ来たクオン・デは、福島安正が振武学校に入学させた。

このように、ベトナム青年留学生たちは主に振武学校と東京同文書院で勉学した。ただし、振武学校に入学したのは最初の 3 名とクオン・デの合計 4 名で、あとの大半は東京同文書院である。

まず、振武学校における学習の状況から詳しく分析しておきたい。

振武学校は 1903 年 8 月、日本政府と清国公使の間の協定によって、陸軍参謀本部の管轄下で牛込河田町に設立された。清国からの武学生に、日本語と予備軍事教育や一般教科を施すための学校であった。振武学校の修学年限は当初 1 年 3 ヶ月であったが、1905 年 10 月入学者より 1 年 6 ヶ月とされた。卒業生は日本各地の軍隊に入って訓練を受け、しかる後に陸軍士官学校に進むことになっていた<sup>182</sup>。

日本外務省外交資料館に保管されている 1909 年 10 月 18 日付け及び 23 日付け警視庁報告書に、明治 39 年 (1906 年) 6 月クオン・デが清国広西省太平府人グエン・チュン・ヒュン (院中興 : Nguyen Trung Hung) と変名して、同国人チャン・フウ・コン (陳有功 : Tran Huu Cong)、グエン・ディエン (阮典 : Nguyen Dien)、ルオン・ラップ・ニャム (梁立巖 : Luong Lap Nham) と共に振武学校に入学したとの記述がある<sup>183</sup>。

振武学校におけるベトナム青年達の勉学状況については、ファン・ボイ・チャウの回想録や日本側の史料には記述が存在しない。ただ、チャン・チョン・カックは回想録の中で以下のように述べている。

同級の清国武学生たちは、当初自分たちの存在を奇異に感じていた。しかし、たまたまその中に広西省出身でベトナム語に通じる学生がおり、彼を通じてベトナムの革命党員であるという素性を聞き出すと、彼らの奇異の念は親愛の情に変わっていった。

<sup>181</sup> 橋本和孝「ベトナム東遊運動と横浜中華街」(社会学部教員コラム vol.58/2013.06.28)。これは関東学院大学社会学部のサイトに掲載されたもの。URL は <http://shakai.kanto-gakuin.ac.jp/column/column-324/>

<sup>182</sup> 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』、福村出版社、1990、pp. 94-95

<sup>183</sup> 外交資料館「安南王族本邦亡命関係」(A 6, 7, 0. 1-1-1-1) 所収

とりわけ広東・広西・雲南各省出身者と親密な交流を持ち。将来軍事面で華越間の反仏連合を樹立することを話し合う程であった。またベトナム 3 学生（クオン・デを除く）の成績は常に優秀であり、卒業に至るまで毎年 3 度の試験において 4 位を下回ることなく、日本人教官たち全員の賞賛するところとなった。<sup>184</sup>

一方、振武学校におけるクオン・デの勉学成績は芳しくなかった。彼の回想録によれば、日本語の進歩も早く、新聞や本を読めた。しかし、彼は専ら明治維新や日露戦争関係の文献を読むことに時間を使い、学校の教科書などを勉強することに熱心でなかったから、学校の成績は常にあまり良くなかった。さらに、1908 年正月病気になる、順天堂病院に 2 ヶ月間入院し、退院後退学した。そして、同年 4 月リ・カイン・タイン（Ly Canh Thanh）と改名して、早稲田大学に入学した<sup>185</sup>。

ファン・ボイ・チャウが彼らを振武学校に入学させたのは、彼の考える青年の勉学が一般的な普通教育を勉強することではなく、将来の革命幹部として必要な軍事的教育を受けることであったからである。特に日本に到着したベトナム維新会の盟主クオン・デを振武学校に入学させたのは、彼が革命組織の軍事指導者に育ってくれることを期待したからであった。

1907 年、ベトナム青年留学生の数は増加した。ファン・ボイ・チャウは福島安正を訪問し、「振武学校へも何人か入れていただけませんか」とお願いした。これに対して福島は、

私と諸君との交流は、あくまで私的なものであり、私はその範囲で、今までできるだけのことはしたつもりである。しかし、私は今、参謀本部の長官という重い公職を持っているので、それはできない。一帝国の政府は顯然と他の革命党と連帯することができない。（中略）。私が以前に振武学校に 4 人のベトナム留学生を入学させたのは、まったく破格の取り扱いで、人数としても最大限度であった。したがって、学校を入学させたいというのは無理な話である。というのは、振武学校は我が政府が設立したもので、ベトナム革命党の学生を受け入れるとなれば、必ずフランス政府から目をつけられ、そうすれば、貴国の留学生を全部、東亜同文書院に收容してもらうことになる。<sup>186</sup>

と答えた。結局、振武学校への入学に福島は同意しなかった。

以上に述べたような状況からファン・ボイ・チャウは渡日ベトナム青年の増加に対応するためには東京同文書院に頼る以外に道はなくなった。

そこで以下に、東京同文書院におけるベトナム留学生の勉学状況を分析しておきたい。

東京同文書院については、白石昌也の次の説明がわかりやすいので、それを引用する。

東京同文書院は東亜同文会の経営する清国留学生のための予備学校、すなわち高等専

<sup>184</sup> Tran Trong Khac, *Nam muoi bon nam Cach mang hai ngoai*, Sai Gon, 1971, pp. 27-29

<sup>185</sup> Cuong De, *Cuoc doi cach mang cua Cuong De*, Sai Gon, 1957, pp. 24-25

<sup>186</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p. 177

門学校に進学するのに必要な予備的科目と日本語を教えるための学校であった。東京同文書院は1899年10月に牛込山吹町で創立された。その後、この学校は1904年2月に小石川目白台に、1905年11月に豊多摩郡合村に移転した。東京同文書院の学年限は2年間である。<sup>187</sup>

こうした東京同文書院に対し、ファン・ボイ・チャウは、日本語や一般学科の教育のみではなく、その軍事教育にも期待していた。

『年表』によれば、東京同文書院では午前中には、日本語の他、「普通の学識」すなわち算術、地理、歴史、化学、物理学、修身などの各課の授業を行い、午後には「軍事の学識」を勉強した<sup>188</sup>。また、チャン・チョン・カックの回想録によれば「ファンは同文書院にベトナム青年を無制限に收容することを求めた。これに対して、細川は我が国の学生のために、特別教室を設立することに同意した」<sup>189</sup>と述べている。そして、『年表』の記述によれば、「1907年9月中旬諸少年が悉く入学し、遅れて渡日した者も次々と学院「同文書院」に送られた。このため同学院には『特別日語班』が設けられ、丹波少佐は毎週数日学生たちを野外に引率して、『戦事之体操』を指導した」<sup>190</sup>という。

日本側史料に東亜同文書院におけるベトナム青年達の勉学状況に言及したものがある。それは、日本外交史料館が所蔵する『安南王族本邦亡命関係』のなかの「安南学生教育顛末」という文書の次の一節である。

安南人潘是漢なる者が、明治四十年（筆者注：1907年）広東人の紹介を通じて、学生留学につきその收容・監督方を依頼してきた。安南読書人は元来漢文に習熟し、かつ彼らの勉学を希望する主旨の平穩なるを以て、まず四人の学生を東京同文書院に收容し、清国留学生と同様、書院内の寄宿舎に起居せしめ、日本語及び中等普通学の教育を受けることとした。四人の学生は皆、資性温順、行動平静にして、専心学業に従事した結果、明治四十一年（筆者注：1908年）二月至って成績良好、概して清国学生の上位にあった。安南よりの留学生が漸次増大した。その言動は真摯にして穏和、妄りに政治などに関心を有したり憤慨したりする様子はいささかもないことに鑑み、彼らを順次同文書院に転托。同年五月に至ってその数六十余名に達した。そのうち九名の少年者は、これを小石川礪川小学校に通学させた。<sup>191</sup>

ここでいう潘是漢（ファン・テイ・ハン）はファン・ボイ・チャウの別号である。

もう1つの日本側史料に黒龍会『東亜先覚志士紀伝』中巻の記事がある。これにはドン

<sup>187</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書店、1993、p.342

<sup>188</sup> Chuong Thau (ed), “Phan boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.179

<sup>189</sup> Tran Trong Khac, *Nam muoi bon nam Cach mang hai ngoai*, Sai Gon, 1971, p.29

<sup>190</sup> Chuong Thau (ed), “Phan boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.179.

白石昌也「ベトナム青年の日本留学—明治期日本における東遊運動」『国立教育研究所紀要』121、1992、p.47

<sup>191</sup> 柏原文太郎「安南学生教育顛末」1909年1月25日付（日本外交史料館蔵「安南王族本邦亡命関係」（請求番号：A 6, 7, 0. 1-1-1-1）所収

ズー運動で来日したベトナム人留学生のことと、同文書院における彼らに対する教育についての次のような記述がある。

安南独立運動の首領たる潘是漢が、明治三十八年（筆者注：1905 年）四月来日し、横浜の梁啓超を介して柏原文太郎と接触、柏原と通じてさらに大隈重信や犬養毅、そして軍事方面との接触を待った。その結果潘是漢は、日本への留学運動を組織することを決意し、国内同志の説得のため一旦安南に帰国した。そして彼が再び渡日した同年十月頃から、ひそかに安南を脱出して来日する者は相次いだ。彼らは福島安正の斡旋によって振武学校に入学したり、柏原文太郎が副院長をしていた東京同文書院に入学したりして、表面上支那留学の姿を偽装しつつ修学した。明治四十年（筆者注：1907 年）から明治四十一年（筆者注：1908 年）にかけて、東京の安南留学生の数は百名に達し、その大部分は目白の東京同文書院に入学した。当時同文書院には支那留学生が多く、一見してそれとの区別がつかなかったから、世間の注意を引くこともなかった。

（中略）。安南学生は、国家回復の雄志に燃えて、軍事の教練に最も熱心であったので、難波田老少佐が、日曜日にも高田の根生院の上の空き地で、彼らの軍事教練を指導した。同文書院中の安南学生を中心人物は、ファン・バ・ゴック（潘伯子宝：Phan Ba Ngoc）、ダン・クック・キ（譚国器：Dam Quoc Khi）、ダン・テウ・マン（鄧子敏：Dang Tu Man）などの志気壮烈の青年たちであった。同志たちの起居動作などすべての規律を厳にし、一人として浮華柔弱の風を滞る者もなく、いずれも新知識を求むるに汲々たる有る様は、教官の任に当たる書院職員をして、はなはだ頼もしく感ぜしめた。<sup>192</sup>

以上の回想録と史料を見ると、ベトナム青年達の東京同文書院入学は 1906 年に開始されたが、当初はまだ少なく、1907 年に大幅に増加した。同文書院においてベトナム留学生はベトナム留学生のための「特別日語班」で勉強した。学生たちは日本語や一般教科の学習をし、他に軍事教練の指導を受けていた。同文書院は、ドンズー運動にとって最も重要な教育機関となったのである。

## 第二節 越南公憲会の設立と活動

第一節では、ベトナム青年たちが振武学校と東京同文書院で勉学したことを述べた。最も多くの学生を受け入れた東京同文書院では午前と午後の授業があった。午後はもっぱら軍事教育と野外教練にあて、学内における学生の風紀取り締まりは書院の規定に従い、学外の取り締まりは自分たちの規定を作って遵奉することにした。このためファン・ボイ・チャウは「越南維新会」とは別に、「越南公憲会」（Viet Nam Cong Hien Hoi）という在日ベトナム青年留学生のための新しい会を作った<sup>193</sup>。グエン・ティエン・ルックによれば、この会を設立した理由は次の 3 つであるという。

第 1 は、1907 年にベトナム青年留学生の数が増加したために、様々な問題が生じるよう

<sup>192</sup> 黒龍会編『東亜先覚志士記伝』中巻、原書房、1966、pp. 819- 821

<sup>193</sup> Chuong Thau (ed), “Phan boi Chau nien bieu”, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.179

になったことである。留学生たちはベトナムの各地方の出身（北部、中部、南部）で、習慣や気風が異なっていた。こういう会を設立すれば、ベトナム青年留学生は互いの習慣や気風を知る機会を得られ、それによって団結・統合が進むと考えたものと思われる。

第2は、ファン・ボイ・チャウの『年表』に、「その中にそれぞれ皆優秀な分子がいるし、衆流を混合した分子もいる」<sup>194</sup>とあることである。ここで彼が言わんとしていることは、政治的志向性に欠ける留学生が一部にいるということである。だから、そうした学生を覚醒させるために在日学生組織が必要と考えたと考えられるのである。

第3は、当時の日本におけるベトナム青年留学生の生活、勉学のために現金の受け入れ、支払いを管理する必要があったということである<sup>195</sup>。

会の組織に関しては、『年表』に次のように述べられている。

会の中には経済、紀律、交際、文書の4部を設け、会長はクオン・デ、総理兼監督はファン・ボイ・チャウであり、各部には北、中、南部を代表する1名ずつの委員をおき、計12人の委員を選ぶ。経済部委員はダン・テウ・マン（Dang Tu Man）、ダン・ビン・ティン（Dang Binh Thanh）、ファム・チャン・イエム（Pham Chan Yem）で、財政の収入・支出及び蓄えを担当する。紀律部委員はダム・キ・シン（Dam Ky Sinh）、ファン・バ・ゴック（Phan Ba Ngoc）、ホアン・クアン・ティン（Hoang Quang Thanh）で、学生の功罪を取り調べて賞罰を提議することを担当する。交際部委員はファン・テ・ミ（Phan The My）、グエン・タイ・バット（Nguyen Thai Bat）、ラム・クアン・チュン（Lam Quang Trung）で、外国人との交流・我が国の人々の送迎を担当する。文書部委員はホアン・チョン・マウ（Hoang Trong Mau）、ダン・ゴ・ラン（Dang Ngo Lan）、ホアン・フン（Hoang Hung）であり、応答往来の文書及び一切の文書の署名・発行のことを担当する。それ以外に、我々は各委員が職にかなった仕事をしているかどうかを調査するために「稽查局」を設け、ルオン・ラップ・ニャン、グエン・ディエン、チャン・フウ・コンをこれに充てた。この時にベトナムから送って来た資金はコーチシナは最も多く、アンナンはそれにつぎ、トンキン是最も少なかった。総金額12,000ドンは、学生への給付費、一般党员来訪者の滞在費、臨時公費予備金の三目に分けた。また会員の生活費は月給制度で、会長は毎月36元、総理・監督員は毎月24ドン、学生の学費は毎月18ドンと定めた。各部委員は学費のほかに特別手当での支給はなかった。<sup>196</sup>

会の組織を見ると会長クオン・デ、総理兼監督ファン・ボイ・チャウを別格として、あとは地域別に代表を出す形になっていて、留学生たちには3つの地域ごとのまとまりがあり、それを前提としつつ、それらを一つの統合体にしていこうという意志をそこに読み取

<sup>194</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.181.

<sup>195</sup> グエン・ディエン・ルック, 「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」, 博士論文, p.89

<sup>196</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, pp. 179 – 180



ることができるように思われる。

『年表』によれば、越南公憲会の活動は「毎週日曜日に会場（東京同文書院のことであろう）を借りて、会員全体の集会を開催した。まず会長・総理が訓示し、次いで会員がおのおの自由に演説してお互いの感情を通じあい、そのことによって団体を堅固にした」<sup>197</sup>という。こうした全体での集会のあり方からも、越南公憲会が地域を超えた留学生の団結を目指した組織だったといえよう。

このように、越南公憲会は青年留学生を団結させるうえで重要な役割を果たしたものと考えられる。

### 第三節 小結

本章で述べてきたことをまとめると次のようになる。

まず本章では 1905～1909 年に行われたドンズー運動で来日した留学生の数を検討し、約 200 人という数字が妥当であることを確認した。次に、彼らの生活の様子を明らかにし、当初は援助がなくて非常に厳しい生活を送っていたが、章太炎ら中国の革命家たちと関係を持ったり、1907 年以降に東京に移って日本の政治家たちの援助が受けられるようになってから改善されたことを確認した。ついで、彼らの勉学の状況を検討し、当初は振武学校と東京同文書院の両方に入学させていたが、前者からはさらなる受け入れを断られ、1906 年からは東京同文書院に頼らざるを得なくなった。しかし、そこが次々とベトナムの留学生を受け入れてくれたことで、1907 年のベトナム人留学生の大幅増につながったことを確認し、ドンズー運動における東京同文書院の重要性を明確にした。さらに、この増えた留学生たちの問題に対応するために作られた「越南公憲会」の具体的な姿を検討し、そこが、トンキン・アンナン・コーチシナと出身地が異なるベトナムの留学生たちを一つに団結させる役割を果たしていたことを確認した。

こうしてドンズー運動は次第にうまくいくかに思われたが、この動きを警戒したフランス側の要請を受け入れた日本政府は彼らを弾圧し、1909 年になると彼らは日本から追い出されてしまうのである。彼らの在日期间は短かったが、「越南公憲会」の経験などを通して、革命のための運動方法や組織づくりの方法などを身に付けることができたことの意味は大きい。

---

<sup>197</sup> グエン・ティエン・ルック、「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」、博士論文、p.89

### 第三章 ベトナム各地におけるドンズー運動支援

ドンズー運動が成功するためには、日本において留学生が勉強するだけでは不十分で、ドンズー運動に青年たちを送り出し、資金を集め、援助するベトナムにおける後方支援の活動が不可欠であった。当時のベトナムの中は 3 地域に分かれていたので、まとまった活動ではなく、地域ごとの活動になったが、それぞれの地域ごとに運動及び支援活動には特徴があった。この章でトンキン、アンナン、コーチシナのドンズー運動と支援活動とを一つずつ検討して、それらの特徴を明らかにしていきたい。

#### 第一節 トンキンにおける支援運動

##### (1) 19 世紀後半から 20 世紀初頭までのトンキンの状況

トンキンにおけるドンズー運動の特色を述べる前に、その背景となるトンキンの政治・経済・社会などの状況を概観しておきたい。

まず、トンキンがフランスの植民地になるまでの経緯を簡単に確認する。

1873 年、フランスのコーチシナ総督は、フランス人商人ジャン・デュビュエ (Jean Dupuis) とベトナム官憲との紅河通航をめぐる紛争を契機に、フランシス・ガルニエ (Francis Garnier) の率いる部隊をトンキンに派遣し、紅河通航権の獲得を目指した。フランシス・ガルニエは強硬に紅河の開放を要求したが、ベトナム官憲の拒否に遭い、軍事行動に出てハノイを攻略した。トンキン地域は資源が豊富で人口も多く、中国と接して紅河ルートによる交易も盛んであって、フランスにとって垂涎の的だったのである。しかし、フランシス・ガルニエはベトナムに帰順していた劉永福の黒旗軍に攻撃されて敗死し、フランスは兵をトンキンから引き揚げざるを得なかった。翌年、フランスは、第 2 次サイゴン条約 (フィラストル条約) をグエン朝と結び、紅河通航権を獲得するが、中国との境界地域には黒旗軍が居て、中国との交易は自由には行えなかった。

1882 年、アンリ・リヴィエール (Henri Riviere) 率いるフランス軍が再びトンキンに侵攻した。アンリ・リヴィエールは黒旗軍に敗れて戦死するが、フランス軍の大規模増派を呼び起こした。テウデック帝の死により混乱していたフエ (順化: Thuan Hoa) のグエン朝の宮廷は、1883 年 8 月、癸未条約 (第 1 次フエ条約、アルマン条約) を締結させられ、グエン朝はフランスに降伏してその保護国となり、トンキン地方を事実上フランスの支配下に置くことを認めさせられた。さらに、1884 年 6 月の甲申条約 (第 2 次フエ条約、パトノートル条約) によって癸未条約が確認され、トンキンは正式にフランスの保護領となった。トンキン地方にはフエのグエン朝から経略が派遣されて行政に当たったが、これは形式に過ぎず、フランスがハノイに置いた理事長官がベトナム人の役人を監視する体制をとられ、トンキンの各省にもフランス人理事官 1 人が配置され、同様の体制がとられることとなった。

ただし、この間もトンキンではフランスと黒旗軍及びその背後にある中国清朝との戦闘が継続しており、それは 1884 年の清仏戦争に発展する。また、1885 年にハムギ帝の蜂起が

おこると、それに呼応するトンキンの紳豪も多くいた。これに対してフランスは村落の自律性と紳豪の権力を認める協同政策を採ることとし、紳豪らを懐柔して 1887 年までには紅河デルタ地帯の蜂起を終息させることに成功した。そして清仏戦争の結果、清朝はベトナムへの宗主権を放棄してフランスの保護権を承認することとなり、1887 年にコーチシナ等の直轄植民地、アンナン・カンボジアの両保護国、トンキン保護領からなるフランス領インドシナが成立する。なお、トンキン保護領では、1897 年にベトナム人経略を廃止してその権限をフランス人理事長官に移譲することが行われ、トンキン各省の官人機構は名目的にはフエのグエン朝に帰属しつつも、実質的にはフランス人理事長官に隷属することになった。

こうして生まれたフランス領インドシナ時代のトンキン保護領には 26 の省と 35 の代理、さらにハノイとハイフォン（海防：Hai Phong）の 2 市が存在した。ハノイにはフランス領インドシナ全体を統括する総督府がおかれることとなったが、これはフランスがトンキンを重視していたことの表れと言ってよい。また、そのことは、ハノイなどのトンキンの都市部が、フランス総督府を通してヨーロッパの近代的な考え方や情報がもっとも入って来やすい場所となったということでもある。フランス領インドシナ時代初期のトンキンは、フランス植民地政府が紳豪の権力を認めたことで村落の社会構造には大きな変化が起らなかった一方、都市部ではさまざまな変化が起こっていった。

フランス領インドシナ時代初期のトンキン社会の変化を生み出した重要な要素のひとつは、植民地政府の徴税による搾取であった。もともとのグエン朝の租税は寛大なものであったが、1895 年にポール・ドゥメールがインドシナ総督となると、連邦財政制度の整備が行われ、植民地政府は各種の税を再編して直接税と間接税に大別し、増税政策を採っていく。直接税は人頭税と田税の 2 種類で、州の財源となるものであったが、トンキンの人びとに対する人頭税は当初 5 ハオであったのに、1897 年以降は 5 倍の 25 ハオに増額された<sup>198</sup>。消耗品にかけられた間接税は総督府の財源になるもので、塩税（Thue muoi）、アルコール税（Thue ruou）、アヘン税（Thue thuoc phien）の 3 つがあった。フランス植民地政府はその税収を伸ばすべく、飲酒を奨励し、村落の酒の最低消費量を決め、ノルマを達成できなかった村落には罰が与えられた<sup>199</sup>。

フランスがトンキン進出に乗り出した 1 つの要素が、そこにある炭鉱であった。ドンチュウ（Dong Trieu）、タイグエン（Thai Nguyen）などの炭鉱が開発されたが、それらはインドシナ銀行系のフランス資本によって独占された。また、トンキンにおける米の輸出入もフランスが独占した。フランス植民地政府の経済政策は非経済的な略奪色が強いといわれており、フランス植民地政府とトンキン人の間には、搾取—被搾取の関係ができて階級的な矛盾が発生していたと考えられる。

19 世紀末のトンキン社会には農民と地主という 2 つの主な階層があったが、20 世紀初に

<sup>198</sup> Tran Van Giau, *Su phat trien cua tu tuong Viet Nam tu the ki XIX den Cach mang thang Tam*, tap 2, NXB Khoa hoc Xa hoi, Ha Noi, 1975, p 18

<sup>199</sup> 谷川栄彦『東南アジア民族解放運動史—太平洋戦争まで—』勁草書房、1969、p 23

なると、都市部に商人・資産家などの新たな階層が誕生し、トンキンの社会構造は変化していった。背景には、フランス統治による近代化があり、フランスは本国と競争しない陶器・セメントなどの工業の進展は抑圧しなかったし、フランス人自らが生活する都市の需要のために交通運輸、電気、水道などの事業も進めていた。また、トンキン地方にはもともとたくさんの知識人がいて、フランスの侵略に激しく抵抗したこともあって、彼らに愛国的な感情が培われていたことも注意しておくべきことである。

## (2) ドンズー運動に参加したトンキン青年とその支援者

以上のような状況を踏まえて、トンキンにおけるドンズー運動の具体的に様相を明らかにしていこうと思う。

ファン・ボイ・チャウの渡日当初の目的は国内で革命運動を実行するために必要な武器の入手にあった。しかし、渡日直後に接触した梁啓超や大隈重信・犬養毅ら日本の政客たちとの接触により、ファン・ボイ・チャウはその目的が不可能であることを悟らざるを得なかった。そして、彼らからの助言や忠告、および日本の実情を観察したことにより、彼の主張は変化した。彼は自らが行うべき運動の方針を、「人才」の育成、「民智」の啓発、そして「堅固な基礎」の構築に置くことにして活動を開始した。その基本的な内容は、第1に、ベトナム青年たちを日本に呼び寄せて勉強させることであり、第2に、宣伝文書を執筆して国内に配布し、革命の意義を説いて、その精神を鼓舞することであり、第3に、ベトナム及び日本における運動組織の整備を図ることであった<sup>200</sup>。

1905 年末、ファン・ボイ・チャウは、日本で印刷した「勸国民資助遊学文」を帰国する同志に託して、ベトナムに持ち込んだ。そしてこの文書を読んで共鳴したトンキン・アンナンの青年たちが、渡日し始めるようになる。ファン・ボイ・チャウが晩年に自ら書いた『年表』によれば、1907 年 10 月から 1908 年 6 月にかけて、学生は東京同文書院に次々に入学したという。そして、「今私は正確な人数を記憶していないが、大体約 200 名だった。その中でコーチシナ出身の学生は約 100 名、アンナン出身の学生は約 50 名、トンキン出身の学生は約 40 名だった」<sup>201</sup>と述べている。また、チャン・チョン・カックも回想録でベトナム留学生の数は約は 200 名だった、と述べている<sup>202</sup>。このような史料によってベトナム人留学生の数は 1905 年から 1909 年までの間に約 200 名近くに達していたと思われる<sup>203</sup>。

第一章で紹介した多くの研究によって、ドンズー運動に参加して日本に留学したベトナム人青年の名前がかなり分かっている。そのなかから、現時点で判明しているドンズー運動に参加したトンキン青年の一覧表を作成した。それが表 3 である。

また、日本へ留学する道を選んだ青年以外に、トンキンで運動に賛同して献金したり、

<sup>200</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』、巖南堂書店、1993、pp.307-322

<sup>201</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 189

<sup>202</sup> Tran Trong Khac, *Nam muoi bon nam hai ngoai*, Saigon, Saigon, 1971.

<sup>203</sup> 本論文第二部第二章第一節 (1) 参照

青年たちを集めたりした人たちがいた。そのような支援者で名前が分かっている者を整理して、一覧表を作成した。それが表4である。この表によれば、トンキンにおける支援者が、多彩な階層にわたっていることや男性・女性を問わず存在していることがわかり、それは運動の広がりを考えるうえで注目してよいことである。

表3：ドンズー運動に参加したトンキン青年のリスト

No.	名前	出身地	階層・職業	生没年、その他
1	ルオン・ラップ・ニャム (Luong Lap Nham、Luong Ngoc Quyen)	ハノイ	儒学者の子弟	1885-1917 1905年10月に来日。表4の1の次男；表4の9の夫
2	ルオン・ギ・カン (Luong Nghi Khanh (Luong Ngoc Nhiem)	ハノイ	儒学者の子弟	1889-1917 1905年10月に来日。表4の1の三男
3	ダン・テウ・マン (Dang Tu Man)	ナムディン	儒学者の子弟	?-1926 1906年10月に来日。
4	ダン・ヒュウ・バン (Dang Huu Bang)	ナムディン	儒学者の子弟	1885-1925 表4の24の子供
5	ダン・クオック・キュウ (Dang Quoc Kieu)	ナムディン	儒学者の子弟	14歳で来日。表4の26の子供
6	グエン・スアン・テック (Nguyen Xuan Thuc)	ナムディン	儒学者の子弟	表4の27の子供
7	ダム・キ・シン (Dam Ki Sinh, Dam Quoc Khi)	ハドン	按察使の息子	?-1910 1907年に来日
8	グエン・ディエン(Nguyen Dien)	ハドン		1905年に来日。表4の1の生徒
9	ホアン・ディン・チュアン (Hoang Dinh Tuan、Nguyen Ke Chi)	ハノイ		?-1923 14歳で来日。
10	カオ・テュック・ハイ (Cao Truc Hai)	ハノイ	医者	1881-1907 1907年に来日。
11	ダン・ヴァン・ジャ (Dang Van Gia、Dang Vu Gia)	ナムディン	儒学者の子弟	1908年に来日。表4の28の子供
12	グエン・カム・ジャン (Nguyen Cam Giang)	ハドン	儒学者	1877 - ? 1906年に来日。
13	グエン・ハイ・テアン (Nguyen Hai Than、Vu Hai Thu)	ハノイ	儒学者	1878-1959 表4の1の生徒

14	ファム・チャン・イエム (Pham Chan Yem)	ハノイ	トンキン 理事長官 府勤務	1885-1910 1908 年に来日。
15	レ・ヴァン・テアプ(Le Van Tap)	タイビイン		来日時期不明
16	ホオン・チエン(Hoang Chuyen)	タイビイン		来日時期不明
17	ファン・テュウン(Phan Thuong)	タイビイン		来日時期不明
18	グエン・ファック( Nguyen Phac)	タイビイン		来日時期不明
19	グエン・デ( Nguyen De)	タイビイン		来日時期不明
20	ファム・テウ・テ (Pham Tu Te)	タイビイン	儒学者の 息子	来日時期不明
21	ダアム・カン(Dam Khanh)			1907 年 2 月に来日。
22	グオ・クァン・ドゥアン (Ngo Quang Doan)	タイビイン	儒学者	1872-1945 1905-1906 年 Cuong De と一 緒に来日。
23	リ・ヴァン・ソン (Ly Van Son)	バックニン (Bac Ninh)		1907 年に来日

**参考：** Chuong Thau (ed), *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong tay, Ha Noi, 2001 ; Phan Thi Han, Dang Doan Bang 著, Ton Quang Phiet 訳, *Viet Nam nghia liet su*, (越南義烈史 抗仏独立運動の死の記録), NXB Van hoc, 1972; 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』、巖南堂書店、1993。

**表 4：トンキンにおけるドンズー運動支援者のリスト**

No.	名前	出身地	生没年	性	階層・職業	支援内容
1	ルオン・ヴァン・カン ( Luong Van Can)	ハノイ	1854-1827	男	ドンキン義塾学 長、儒学者	献金
2	クオン・ディン・チャック ( Khong Dinh Trach)	ナムディン		男	儒学者	連絡
3	グエン・ヒュウ・クウオン ( Nguyen Huu Cuong)	タイビイン	1855-1912	男	儒学者、表 3 の 1 の岳父	献金・募集
4	グエン・グオック・リエン ( Nguyen Ngoc Lien)	ナムディン	1852-1937	男	儒学者、博士	募集
5	ヴ・ヴァン・テウイ ( Vu Van Thuy)	ナムディン		男	儒学者	留学応募者

6	ドオン・テアム・ハイ (Doan Tham Hai、Tu Tuyet)			男	儒学者	留学応募者
7	ディン・チャオン・リエン (Dinh Trong Lien)			男	儒学者	留学応募者
8	ビウイ・チン・キエム (Bui Trinh Khiem)	ナムディン		男	教師	ドンズー運動の詩を作る
9	グエン・ティ・ホン・ディン (Nguyen Thi Hong Dinh)	タイビイン		女	表3の1の妻、 表4の3の娘	連絡
10	グエン・ティ・ファウン・ティウ (Nguyen Thi Phuong Triu)	タイビイン		女	表4の3の娘	連絡
11	グエン・コン・ジェウ (Nguyen Cong Dieu)	タイビイン		男		献金
12	ビュイ・シュアン・ファッタ (Bui Xuan Phat)	タイビイン		男	商人	献金
13	リ・テオア(Ly Thoa)	タイビイン		男	商人	献金
14	ジアオ・クウン(Giao Quynh)	タイビイン		男	儒学者	献金
15	コア・コイ(Khoa Coi)	タイビイン		男		献金
16	バッタ・ダッタ (Bat Dat)	タイビイン		男	儒学者	献金
17	ゴウ・ロン(Ngo Long)	タイビイン		男	儒学者	献金
18	デ・キエウ(De Kieu)	ヴィエンイエ ン		男	儒学者	献金
19	グエン・コン・チュク (Nguyen Cong Chuc)	タイビイン		男	儒学者	募集
20	ダン・シュアン・ムウ (Dang Xuan Mau)	ナムディン		男	儒学者	募集
21	グエン・ヒュウ・テウエ (Nguyen Huu Tue、Ly Tue)	ハイフォン	1871-1938	男	農民	連絡
22	リ・テウ( Ly Tu)	ハイフォン		男	農民	連絡
23	ファム・ティエン・ドゥク (Pham Tien Duc)	ハイジウオン		男		連絡
24	ダン・ヒウ・ジウン (Dang Huu Duong)	ナムディン	1860-1923	男	博士、表3の4 の父	献金

25	ダン・ジウ・ヒエウ (Dang Duy Hue、Tu Due)	ナムディン		男	表3の3の父	献金
26	ダン・ヴ・ドン (Dang Vu Dong、Kep Dong)	ナムディン		男	表3の5の父	献金
27	グエン・スアン・テエウ (Nguyen Xuan Tieu)	ナムディン		男	表3の6の父	献金
28	ダン・ヴウ・カイエム (Dang Vu Kiem、Xa Xuan)	ナムディン		男	表3の11の父	献金
29	ダン・グエン・ロアン (Dang Nguyen Roanh)	ナムディン	1878-?	男	表4の24の里子	連絡
30	ダン・キン・バン (Dang Kinh Bang)	ナムディン	1882-1936	男	儒学者	連絡
31	ダン・ゴック・テオアン (Dang Ngoc Toan)	ナムディン		男	教師	募集
32	ルウン・テュック・ダム (Luong Truc Dam)	ハノイ	1879-1908	男	表4の1の長男	連絡
33	グエン・テュウン・ヒエン (Nguyen Thuong Hien)	ハドン	1868-1925	男	ナムディンの督学官	募集。1908年に来日

参考：Quan he van hoa, giao duc Viet Nam – Nhat Ban va 100 nam phong trao Dong Du, NXB ĐHQG Hà Nội, Hà Nội, 2006; Dang Huu Thu, Lang Hanh Thien va cac nha nho Hanh Thien trieu Nguyen, Auteur, 1992

### (3) トンキンにおけるドンズー運動の特徴

さて、2つの表からわかるドンズー運動の特徴をあげると、次のとおりである。

まず、日本に留学したトンキン青年たちには、伝統的な儒学者もしくは紳豪層とみられる者の子弟が多いということである。表によれば、儒学者が3名、儒学者の子弟が7名、ほかに出身・職業が判明する3名もその職業から紳豪と判断してよいと思われる。これらの青年たちは漢学を勉強していたので、日本へ留学して日本語がわからなくても知識を受け入れるのが簡単だった。ハドン出身のグエン・カム・ザン (Nguyen Cam Giang) (表3の12) は、日本留学時期を回想して「日本語の学習は、アンナン人 (筆者注：ベトナム人) にとって漢字を共通にし、かつ発音も容易であったから、2年足らずのうちに非常に上達する」と述べている<sup>204</sup>。彼らにとって日本への留学は言葉の壁をあまり感じさせないものだったため、こうした階層の者が多いのであろう。

<sup>204</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジアファン・ボイ・チャウの革命想と対外認識』、巖南堂書店、1993、p. 316。なお、同書p. 321の注(27)によれば、この発言はフランス外務省資料館 NS-IC-2に収められた1908年9月23日付ハドン省理事官のトンキン理事長官宛報告書に載せられている。



第2に、運動の中心となっていた場所はトンキンの中でもハノイ、ハイフォン、ナムディン、タイビインといった、トンキン東南部、紅河デルタの都市部であったということである。この一帯は、伝統的な教育を受けた学者が多いところであり、先に見た儒学者・紳豪層の子弟とみられる者13名のうち10名までが上記4都市の出身である。もう少し具体的に見るならば、学者であり地域の有力者であった、ハノイのルオン (Luong) 家 (表3の1・2、表2の1)、タイビインのドントゥング村 (Dong Trung) のグエン (Nguyen) 家 (表3の18・19、表4の2・3・9・11)、ナムディンのハンティン村 (Hanh Thien) のダン (Dang) 家 (表3の3・4・5・11、表4の20) は積極的にドンズー運動に献金し、その子弟たちはこの運動に参加した。1906年10月ナムディンのハンティン村の青年は1000ドンを持って日本へ到着した。後にこの現金の一部はファン・ボー・チャウにわたり、ドンズー運動の生活費となり、一部は学費の支払いに使用された<sup>205</sup>。トンキンにおけるドンズー運動の特徴の1つは、地域の有力な家と関係していたことにあるといえる。

第3に、トンキンにおけるドンズー運動が、他の運動と関係していたとみられることである。関係していたのはトンキン義塾運動で、トンキン義塾は1907年にフランスの影響を受けたベトナムの知識人層がハノイに設立した、大衆啓蒙学校である。この運動が日本に留学生を送り出す1つの母体となったのではないかと思われるのである。たとえば、トンキン義塾学長のルオン・ヴァン・カン (Luong Van Can) (表4の1) の2人の息子ルオン・ラップ・ニャン (Luong Lap Nham) (表3の1)、ルオン・ギ・カン (Luong Nghi Khanh) (表3の2) が日本へ留学しているし、グエン・ディエン (表3の8) はルオン・ヴァン・カンの生徒である。このことは今まであまり注意されてこなかったことであり、今後、これについてさらに詳しく調査していく必要がある。

以上、留学者と留学支援者の整理を行って、トンキンにおけるドンズー運動の特徴を簡単に見てきたが、地域の運動の特徴を考えるうえで、いまだ少し検討をしなければならない課題がいくつかあるので、最後にそれを整理しておく。

まず、なぜトンキン青年の数がドンズー運動のなかでは他の2地域より少ないかである。ここで述べてきた特徴からすると、トンキン出身者は最も多くてもよいような気がするが、実際にはそうではない。考えられる理由としては、トンキンでは封建制度の自治の伝統が長く、村落が閉鎖的であったために都市部のみにしか運動が広がらなかった可能性や、トンキンにはインドシナ総督府が置かれていてトンキンにおける抗仏活動がしっかり管理されていたために、こっそりと留学することが難しかった可能性などがあり、これらを今後詰めていく必要がある。また、ドンズー運動と同時に、トンキンでは民衆の啓蒙を目指す義塾運動も発展しており、これとドンズー運動とがどのような影響関係にあったか、あるいは棲み分け関係にあったかも、今後明確にしていかなければならない課題である。

<sup>205</sup> Theo Dang Duc An, “Thanh nien Hanh Thien tham gia phong trao Dong Du, Dong Kinh nghĩa thực và Việt Nam Quang phục hội”, *Nghien cứu Lịch sử*, No 4 (281), 1995, p. 64

## 第二節 アンナンにおける支援運動

### (1) 20 世紀初頭におけるアンナンの状況

フランスの植民地支配下ではインドシナ連邦を構成する被保護国、即ちグエン朝支配下のベトナム中部に対してアンナン（安南：An Nam）<sup>206</sup>という呼称が採用された。

アンナンにおけるフランスの権力干渉の制度は他地方に比して薄く、フランスはほかにも各省に理事官を置いており。フランスは、アンナンにおいて朝廷の実権（財政自主権、政策決定権）を剥奪し、省・府・県の地方官人機構をフランス人のアンナン理事長官や各省理事官の実質的監督下に組み込む努力を怠らなかった。かくして、フエ朝廷の統治範囲はアンナンのみに限定され、アンナン政府のフエの統治については、国王が大臣の補佐を得て行っていた。大臣は吏部、戸部、兵部、刑部、礼部、工部の 6 つに各 1 名置かれた。しかもそこでの統治すら名目的なものとされていったのである。

各省には、監督（大省）、巡撫（小省）があつて一般施政を統括し、布政は税務を、按察は司法を司る。20 世紀初頭における地方行政では 14 省<sup>207</sup>が置かれた。省の下には府または県があり、その長官は知府、知県、知州が担い、さらにその下には総<sup>208</sup>（Tong）、社村がある。社（Xa）はフランス人から Commune と呼ばれ、村落社会の基本的単位であった。その日常的行政や、国家に対する責任（納税、兵役、治安維新など）は、村人の中から選ばれる里長や副里長など村役人が責任を負うことになっているが、最終的な決定権は、村落内有力者たち（フランス人からは Notables と呼ばれる）に握られていた。

精神文化は、詩文の試験によってあらゆる官職への道が開かれるベトナムの、もっとも美しい伝統のひとつである。フランスは、トンキン及びアンナンにおいては漢字教育を禁圧すること無く存続させる一方、フランス語とクオック・グを使用して教育する小学校を各省に開設し、ハノイとフエには高等小学校が設けられた。この高等小学校には、当時のアンナンにおける新知識を受容したベトナム知識人が集まった。

経済面では、フランスはアンナンの資源を採掘した。当時最も重要だったのは炭鉱で、クアンナム省のノンソン（Nong Son）、ボンミュウ（Bong Mieu）などにおいて開発された。

<sup>206</sup> ベトナムに対する外国人の呼称。またフランス領インドシナ時代の中部ベトナムを指す。現在はまったく用いられない。北部ベトナムは前 1 世紀以来、中国の植民地になっていたが、唐にいたってこの地に安南部護府が置かれた。安南の呼称はこの部護府の名に由来する。10 世紀のベトナム独立後も中国は 19 世紀にいたるまで安南国と呼びつづけ、周辺諸国もこれになった。16 世紀以降では絹と陶器の産地である北部ベトナムがアンナンとして、日本、ヨーロッパに知られた。19 世紀にいたってザロン帝が全土地を統一するや、王国全体がアンナン王国と呼ばれた。しかし、1862 年フランスは南部ベトナムを奪って直轄植民地とし、これをコーチシナとよび、また 1884 年北部を保護領としてトンキンと呼び、中部の保護王国のみがアンナンとよばれ、1902 年にはこの名が法定された。（石井米雄・高谷好・前田成交ほか監修『東南アジアを知る辞典』、平凡社、1999、pp. 15-16）

<sup>207</sup> タンホオア（清化：Thanh Hoa）、ゲアン（乂安：Nghe An）、ハティン（河静：Ha Tinh）、クアンビン（廣平：Quang Binh）、クアンチ（廣治：Quang Tri）、フエ（承天：Hue）、クアンナム（廣南：Quang Nam）、クアンガイ（廣義：Quang Ngai）、ビンディン（平定：Binh Dinh）、フウイエン（富安：Phu Yen）、カンホオア（慶和：Khanh Hoa）、ビンテウン（平順：Binh Thuan）、ファンラン（Phan Rang）、ダックラック（Dac Lac）

<sup>208</sup> 総は中間の行政単位。上位単位に府、県、下位単位に社村がある。チャントン（正総：Chanh Tong）、フォトン（副総：Pho Tong）がリチョウ（里長：Ly Truong）の中から選出された。

鉱山部門のほかに、アンナンにおけるフランス人の需要にこたえるために、電気、水道、セメント、繊維、タバコ、茶などの部門の軽工業が経営された。たとえば、ビンディン省のフフォン（Phu Phong）にデリグノン（Delignon）繊維会社があり、クウニャオン（Quy Nhon）にアブミン（abumin）会社があった。アンナンの工業の中心地はベンティウ（Ben Thuy）、ヴィン（Vinh）、ダナン（Da Nang）であった。民族ブルジョアジーによる企業も誕生し、タンホアにはフオンラウ会社（Cong ty Phuong Lau）、クアンナムにはクアンナム協商会（Quang Nam Hiep Thuong Hoi）、ファンティエットにはリエンタイン・ヌオックマム<sup>209</sup>会社（Nuoc mam Lien Thanh）などがあった。

## （2）ドンズー運動に参加したアンナン青年とその支援者

1904年1月、ファン・ボイ・チャウはフエに帰り、4月にクアンナム省に戻った。ここで彼は同志約20人を集め、維新会と名づけられる秘密組織を結成した。ファン・ボイ・チャウの思想と維新会の影響下で、アンナン青年たちは早期からドンズー運動に参加した。

ここでは、アンナンにおけるドンズー運動について、アンナンの青年たちが参加した理由、そのドンズー運動の過程、そしてそれを担った階層の3点を明らかにしたい。そのために、ドンズー運動に参加したアンナン青年のリストとドンズー運動を支援したアンナン人のリストを作成し、表5（64～66頁）・表6（67～70頁）とした。

### 1. アンナン青年たちがドンズー運動に参加した理由

アンナン青年たちがドンズー運動に参加した理由の一つは、その多くが儒学家庭の出身だったことがある。19世紀末の勤王運動を行った家族のメンバーが何人か参加している。例えば、ファン・バ・ゴック（表5 No.15）は反フランス運動の指導者であったファン・ディン・フン<sup>210</sup>（Phan Dinh Phung）の息子であり、グエン・テック・カン（表5 No.4）、グエン・テック・デウオン（表5 No.13）の父、ホアン・チョン・マウ（表5 No.16）の父は勤皇運動参加者である。

また、アンナンでも特にゲアン出身者が多いが、ゲアンはファン・ボイ・チャウの故郷であり、ファンの影響が強かったと考えられる。そのため、青年たちはファン・ボイ・チャウの革命運動に熱心に共鳴した。1905年9月にファン・ボイ・チャウが「勸国民資助遊学文」を書いたとき、彼はその文中で、求める留学生について「親族の中から聡明で忍耐強い子弟を選べ。さほど聡明でなくとも、意思の堅固な子弟でも宜しい。幼少であればあるほどよい」<sup>211</sup>と述べている。『年表』には、タン・バット・ホーとダン・テウ・キンが「勸国民資助遊学文」を持ってベトナムに帰国し、トンキンとアンナンで運動の計画をしたと

<sup>209</sup> ヌオックマムは、魚を発酵させてつくる液体調味料。日本でいえば醤油のようなもので、ベトナム人の日常の食生活に欠かすことができない。

<sup>210</sup> ファン・ディン・フン(1847–1896) は19世紀ベトナム反仏運動の指導者。中部ベトナムのハティン省に生れた

<sup>211</sup> Chuong Thau (ed) ,*Phan Boi Chau toan tap*, tap 2, NXB Thuan Hoa Trung Tam Van hoa Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.257

あり<sup>212</sup>、この文章はアンナン青年たちの目に触れたと考えられる。すなわち、アンナンの青年たちは、この文章に影響され、革命家としての志に燃えて渡日したと考えられるのである。

## 2. アンナン青年たちのドンズー運動の過程

1905 年にグエン・テック・カン、グエン・ディエン、レ・キエットが初めのアンナン留学生としてドンズー運動に参加した。1905 年から 1908 年まで 1 年ずつアンナン青年たちは日本で勉学した。1908 年までの日本におけるアンナン青年留学生の数は約 50 人であった<sup>213</sup>。アンナンにおけるドンズー運動について、以下の 2 つの面を指摘したい。

1 つ目は、ドンズー運動に参加したゲアン出身の青年留学生のほとんどが 1907 年に参加したということである。彼らの大半は東京同文書院で勉学した。たとえばチャン・ドン・フォン (Tran Dong Phong) (表 5No.5)、グエン・タイ・バット (Nguyen Thai Bat) (表 5No.8)、ファン・テウ・アク (Phan Thuat) (表 5No.6) が挙げられる。同年にはクアンナム省のリュウ・アム・シン (Luu Am Sinh) (表 5No.9)、クアンガイ省のラム・カン・チュウ (Lam Quang Trung, Vo Quan) (表 5No.10) も日本へ来た。1908 年にドンズー運動が大きく発展したので、それにともないアンナン青年たちの数が増加した。

2 つ目は、アンナンにおけるドンズー運動を支援する方法は穏健的なものと激烈なものに分かれたということである。激烈派は裕福な家庭から資金の援助を受け、武装した。和平派は留学生の家族などへの募金を行い、学会、商会、工芸会などを設立した。和平派の支援については、『越南義烈史』に記述が見え、クアンナム省の資産家チュ・テウ・ドン (表 6No.40) は、家産を売って得た 350 ドンをタン・バット・ホーに託し、フエ省出身者のディン夫人 (表 6 No.41) は、ダン・タイ・タンに文書・金銭の運搬役を申し出た。ゲアン省の資産家の息子チャン・ドン・フォン (表 5No.5) は、ファン・ボー・チャウに 300 ドンという大金を直接手渡ししている。またゲアン省では、元官吏の息子ホ・バ・キエン (Ho Ba Kien) (表 6No.15) が青年の出洋に協力している<sup>214</sup>。阮朝硃本の中に、ホ・バ・キエンがドンズー運動に現金を送ったので裁判になったという記録が残されている<sup>215</sup>。

## 3. ドンズー運動に参加したアンナン青年たちの階層

表 5 によれば、ドンズー運動に参加したアンナン青年留学生達の半分は儒学者及び儒学者の息子である。表 5 で確認すると、32 人中 17 人が儒学者及び儒学者の息子である。

<sup>212</sup> Chuong Thau (ed) ,*Phan Boi Chau toan tap*, tap 2, NXB Thuan Hoa Trung Tam Van hoa Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.150

<sup>213</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p. 181.

50 人の出身地はゲティン省 30 人、タンホア省 10 人、フエ 10 人、クアンナム省とクアンガイ省 10 人。

<sup>214</sup> Phan Thi Han, Dang Doan Bang ( Ton Quang Phiet 訳) , *Viet Nam nghia liet su*, NXB Van hoc, Ha Noi, 1952, pp. 41-43, 66-71, 78-80, 148-150, 204-205.

<sup>215</sup> 阮朝硃本 (Duy Tan 帝の時期)、史料記号：VB 01178625, National Archives of Viet Nam (Center 1), 18 Vu Pham Ham street, Ha Noi

もう一つ重要な特徴として、カトリック信者が留学者にも支援者にも多数いるということである。表 5 によれば留学者は 32 人中 6 人、表 6 によれば支援者は 44 人中 13 もいる。出身地にもかたよりがあり、留学者はゲアン省の出身者ばかりであり、支援者はゲアン省に 18 人いる他にハティン省に 17 人いる。ゲアン省、ハティン省ではカトリック活動家グエン・テアン・ドン (Nguyen Than Dong) (表 6 No.27)、グエン・ヴァン・テウウン (Nguyen Van Tuong) (表 6No.30) などが、独自にカトリック青年の日本派遣と資金援助を行っている。、パリ外国宣教会の史料には、カトリック活動家ダウ・カン・リン (表 6 No.34) が日本にカトリックの青年を送り出した際に、交通費、服、現金などを支援したことが記されている<sup>216</sup>。

これは、渡日したカトリック活動家マイ・ラオ・バン (Mai Lao Bang) (表 6No.13) の人脈に連なるものであった。『年表』によれば

1908 年 2 月、私はタイに行こうとして香港に着いたところ、たまたまマイ・ラオ・バンが出国してきたのに出会った。同行する者はレ・キン・タムが連れてきた青年学生 10 数人で、マイ・ラオ・バンはカトリック教会に委託されてやってきたのである。<sup>217</sup>とあり、マイ・ラオ・バンを中心とするカトリック活動家たちがドンズー運動に共鳴し、その結果として多数の留学者・支援者をカトリック教徒が占めることになったと考えられる。

表 5: ドンズー運動に参加したアンナン青年のリスト

No	名前	出身地	階層・職業	生没年、その他
1	ファン・ボイ・チャウ (Phan Boi Chau)	ゲアン (Nghe An)	儒学者	1867- 1940 ドンズー運動の指導者
2	ダン・テウ・キン (Dang Tu Kinh)	ゲアン	儒学者	1875-1928 1905 年 4 月に来日
3	タン・バット・ホ (Tang Bat Ho)	ビンディン	儒学者	1858-1906 1905 年 4 月に来日
4	グエン・テック・カン (Nguyen Thuc Canh, Tran Trong Khac, Tran Huu Cong)	ゲアン	儒学者の子弟、 表 5No13 の兄弟	1884-? 1905 年 10 月に来日。1906 年に振武学校に入学した。
5	チャン・ドン・フォン (Tran Dong Phong)	ゲアン	富豪者の子弟	1887-1908 1907 年に来日
6	ファン・テウアク (Phan Thuat)	ゲアン	儒学者	1907 年に来日
7	ファン・ライ・ルオン (Phan Lai Luong)	ゲアン	儒学者の子弟	1908 年に来日

<sup>216</sup> Vo Thanh Tam “Nguoi Cong giao Viet Nam huong ung phong trao Dong Du cua Phan Boi Chau”, in, *Phong trao Dong Du va Phan Boi Chau*, NXB Nghe An va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2005, p. 164

<sup>217</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 194

8	グエン・タイ・バット (Nguyen Thai Bat、Nguyen Sieu)	ゲアン		1907 年 4 月に来日
9	リュウ・アム・シン (Luu Am Sinh)	クアンナム (Quang Nam)		1907 年に来日
10	ラム・カン・チュウ (Lam Quang Trung、Vo Quan)	クアングアイ (Quang Ngai)	儒学者	1907 年に来日。東 亜同文書院に入学 した。
11	ファム・デュオン・ニャン (Pham Duong Nhan)	ハティ (Ha Tinh)	儒学者の子弟	1886-1916 1908 年に東京同文 書院に入学した。
12	ファン・ヴァン・ダオン (Phan Van Doan)	ハティン		1906 年に来日
13	グエン・テック・デュオン (Nguyen Thuc Duong、Tran Huu Luc)	ゲアン	儒学者の子弟	1906 年に来日。
14	グエン・クイン・ラム (Nguyen Quynh Lam)	ハティ	儒学者	1906 年に来日。東 京同文書院で勉学 した
15	ファン・バ・ゴック (Phan Ba Ngoc)	ゲアン	儒学者の子弟	1906 年に来日
16	ホアン・チョン・マウ (Hoang Trong Mau、Nguyen Duc Cong)	ゲアン	儒学者の子弟	1874-1916 1908 年に来日、東 京同文書院で勉学 した。
17	レ・キム・タン (Le Kim Thanh)	ゲアン	カトリック信者	1908 年に来日
18	ディン・ゾアン・テエ (Dinh Doan Te)	ゲアン (or ハ ティン)	儒学者	1908 年に来日。東 亜同文書院に入学 した。
19	ファム・ヴァン・ティ (Pham Van Tinh)	ハティン		1906 年に東京同文 書院で勉学した。
20	レ・ホン・チュン (Le Hong Chung)	ゲアン	カトリック信者	1908 年に来日
21	グエン・マウ・デオン (Nguyen Mau Don)	ゲアン	カトリック信者	1908 年に来日

22	リュウ・イエン・ダン (Luu Yen Dan, Ly Trong Ba、 Luu Song Tu)		カトリック信者	1909 年に来日．成 城学校で勉強し た。
23	ブイ・チン・ロウ (Bui Chinh Lo)	ゲアン		1905 年来日
24	レ・カウ・ティン (Le Cau Tinh)	ゲアン	儒学者	1882-？ 1908 年に来日。1 年間東京同文書院 で勉強した。
25	ホ・ホック・ラム (Ho Hoc Lam)	ゲアン	儒学者	1884-1943 1908 年に来日
26	レ・カアン (Le Khanh)	ゲアン	カトリック信者	1908 年に来日
27	ホアン・スアン・ハン (Hoang Xuan Hanh)	ゲアン	農民	1870-1942 来日時期不明
28	ブイ・スアン・ホアン (Bui Xuan Hoan)	ゲアン		来日時期不明
29	ブイ・ザン・ヴォ (Bui Danh Vo)	ゲアン		来日時期不明
30	リュウ・ヴァン・グウエ (Luu Van Que)	ゲアン	カトリック信者	1908 年に来日
31	レ・キエット (Le Khiet)	タンホオア (Thanh oa)	儒学者の息子	1905 年に来日
32	グエン・ディエン (Nguyen Dien、Nguyen Diem)	ゲアン	儒学者の息子	1905 年に来日

**参考**：Chuong Thau (ed), *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong tay, Ha Noi, 2001 ; Phan Thi Han, Dang Doan Bang 著, Ton Quang Phiet 訳, *Viet Nam nghia liet su*, (越南義烈史 抗仏独立運動の死の記録), NXB Van hoc, 1972; 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』、巖南堂書店、1993。

**表 6：ドンズー運動を支援したアンナン人のリスト**

No	名前	出身地	生没年	性	階層・職業	支援内容
1	レ・グウイエン (Le Quyen)	ハティン		男	儒学者	献金募集
2	ゴ・グオン (Ngo Quang)	ゲアン		男	儒学者・商人	献金募集

3	タン・グウイン (Tan Quynh)	ゲアン		男	儒学者	献金募集
4	レ・ヴォ (Le Vo)	ハティン	1874- ?	男	儒学者	献金募集
5	ダン・タイ・タン (Dang Thai Than)	ゲアン	1874 - 1910	男	儒学者	国内の運動 を準備した
6	チャン・ヴァン・ビン (Tran Van Binh)	ハティン		男	カトリック 信者	献金募集
7	ヴオン・テック・グィウ (Vuong Thuc Quy)	ゲアン	1862-1907	男	儒学者	留学生募集
8	チャン・ティ・ルウア (Tran Thi Lua)	ゲアン		女		献金募集
9	ファン・ティ・ヘット (Phan Thi Het)	ハティン		女		献金募集
10	レ・ホイウ・リエン (Le Huy Lien)	ハティン		男		献金募集
11	グエン・ディン・ケイン (Nguyen Dinh Kien)	ハティン		男	儒学者	献金募集
12	ファン・チョン (Phan Trong)	ハティン		男		献金募集
13	マイ・ラオ・バン (Mai Lao Bang)	ハティン	1866-1942	男	カトリック 活動家	1908 年に来 日
14	チャン・ヴァン・ルオン (Tran Van Luong)	ゲアン	1859-1909	男	儒学者、教師	献金募集、留 学生募集、文 詩宣伝
15	ホ・バ・キエン (Ho Ba Kien)	ゲアン	1862-1915	男	儒学者	献金援助 (350 ドン)
16	レ・ニャウン (Le Nhung)	ハティン		男	カトリック 信者	献金募集
17	グエン・ホ (Nguyen Ho)	ハティン		男	カトリック 信者	献金募集
18	ゴ・デック・ケ (Ngo Duc Ke)	ハティン	1878-1927	男	儒学者	1907 年チエ ウズウン商 館 (Trieu Duong Thuong Quan) を設立



						し、商品を売 買し、献金援 助した。
19	ダン・グエン・カン (Dang Nguyen Can)	ゲアン	1866-1923	男	儒学者	No.19 ととも にチュウズ ウン商館 を設立。
20	ダン・ヴァン・バ (Dang Van Ba)	ゲアン	1873-1931	男	儒学者	No.19 ととも にチュウズ ウン商館 を設立。
21	レ・ヴァン・ホウアン (Le Van Huan)	ハティン	1876- 1927	男	儒学者 表 6 の No 36 の兄弟	No.19 ととも にチュウズ オン商館 を設立。
22	グエン・ヴァン・ホ (Nguyen Van Ho)	ゲアン		男	カトリック 活動家	献金募集
23	ド・ダン・テウエン (Do Dang Tuyen)	クインナム	1856-1911	男	儒学者	献金募集
24	グエン・シュアン・ラン (Nguyen Xuan Lang)	ゲアン		男	カトリック 信者	献金援助
25	ハ・ヴァン・ティエン (Ha Van Thien)	ハティン		男	カトリック 信者	献金援助
26	グエン・ヴァン・ジュン (Nguyen Van Dung)	ハティン		男	カトリック 信者	献金援助
27	グエン・テアン・ドン (Nguyen Than Dong)	ゲアン	1866-1944	男	カトリック 活動家	献金募集
28	トン・クウイ (Thong Quy)			男	カトリック 活動家	献金募集
29	ダウ・カン・ダン (Dau Quang Dan)	ハティン		男	カトリック 活動家	献金援助
30	グエン・ヴァン・テウ ン (Nguyen Van Tuong)	ゲアン	1852-1917	男	カトリック 活動家	カトリック 信者に運動 した、募金支 援
31	グエン・ティ・タン	ゲアン	1884-1954	女	儒学者の娘	献金募集

	(Nguyen Thi Thanh)					
32	グエン・グック・テウイ (Nguyen Quoc Thuy)	クアンナム	1880-1916	男	儒学者 表 6 の No33 の兄弟	連絡者
33	グエン・デック・チ (Nguyen Duc Tri)	クアンナム		男	表 6 の No32 の兄弟	連絡者
34	ダウ・カン・リン (Dau Quang Linh)	ハティン	1867-1941	男	カトリック 活動家	留学生募集
35	グエン・ヴァン・コ (Nguyen Van Co)	ゲアン		男	カトリック 信者	献金援助
36	レ・フウ・タン (Le Phu Thanh)	ハティン		男	儒学者	献金援助
37	ダン・ゴォ・シン (Dang Ngo Sinh、Dang Thuc Hua)	ゲアン	1870-1931	男	儒学者	連絡者
38	グエン・ハム (Nguyen Ham、Nguyen Thanh )	クアンナム	1863-1911	男	儒学者	連絡の役割
39	レ・ティ・ダン (Au Trieu Le Thi Dan)	フエ	? -1910	女	儒学者の娘	連絡
40	チュ・テウ・ドン (Chu Thu Dong)	クアンナム		男	クアンナム 議会の志士	献金援助
41	ディン夫人 (Dinh Phu Nhan)	フエ		女	儒学者の娘	献金援助、連絡者
42	グエン・テック・テウ (Nguyen Thuc Tu)	ゲアン	1841-1923	男	教師、表 5 の No4・13 の 父、表 5 の No1・16 の教師	文詩宣伝
43	チャン・キ・フォン (Tran Ky Phong)	ビンディン (Binh Dinh)	1872-1941	男	儒学者	留学生募集
44	グ・シ・ルオン (Cu Sy Luong)	ゲアン		男	儒学者	留学生募集

**参考** : Chuong Thau (ed), *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong tay, Ha Noi, 2001 ; Phan Thi Han, Dang Doan Bang 著, Ton Quang Phiet 訳, *Viet Nam nghia liet su*, (越南義烈史 抗仏独立運動の死の記録), NXB Van hoc, 1972; 白

石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボー・チャウの革命思想と対外認識』、巖南堂書店、1993。

### 第三節 コーチシナにおけるドンズー運動

#### (1) 19 世紀後半から 20 世紀初頭までのコーチシナの状況

コーチシナはフランス領インドシナ連邦のうちの、ベトナム南部の直轄植民地の名称である。ベトナム植民地における分割支配政策は、様々な方法でおこなわれたが、コーチシナは 3 地域の中で、最も経済開発の進んだ重要なところであったので、そこでは植民地制度がとられ、フランス人官吏の直接統治が行われた。当時、コーチシナにおけるグエン朝とその官人機構は次第に権限を削減されていき、やがて伝統的な官人機構が廃止され、各省にフランス人行政官を任命する体制が整えられることとなった。まずはこの過程を確認する。

コーチシナは 1862 年 6 月 5 日のサイゴン条約によって南部 3 省がフランスに割譲されたことによって誕生した。フランスはコーチシナにおいて直轄行政制度を施行した。この制度を考えるうえで、社村及び総行政は重要である。社村は国家行政の基礎であって、フランス人によって *Conseil de notables* と呼ばれた有力者会（キムク：Ki muc）によって庶政が行われていた。この会は 11 名の会員からなり、会員は土地所有者と最も裕福な住民中より人民の選挙によって選ばれる。主なる会員はヒュオンカ（卿該：Huong Ca）、ヒュオンチュ（卿主：Huong Chuc）、ヒュオンスウ（卿師：Huong Su）、ヒュオンチュオン（卿長）（以上は町村事務の最高指揮権を有し、町村の財産を管理し、予算を編成し、収支を監督する）、ヒュオンタン（卿神：Huong than）、シャチュオン（社長：Xa Truong）或いはトンチュオン（村長：Thon Truong）及びヒュオンハオ（卿豪：Huong Hao）（以上 3 者は執行機関で、秩序を維持し税金を徴収し行政官僚及び有力者会の決議を実行する）より成る<sup>218</sup>。町村は合して総となり、総はカイトン（Cai Tong）と称するものによって治められる。カイトンは、一定の資格ある総内の選挙人より成る選定諮問会が指名した 3 人の有力者中から、コーチシナ知事が選定する。省及び市の行政、フランスが領有した当時あった府（Phu）と県（Huyen）とはその後廃され、且つベトナム人の地方官吏はフランス人官吏を以て代えられた。フランス人官吏は初めは土民事務監督官と称されたが、後に行政事務官（Administrateurs）と改名された。総は合して支庁（délégations）又は出張所管轄区域（Postes Administrateurs）を成し、これにはベトナム人を採用してその長たらしめることになった。支庁は合して省<sup>219</sup>と

<sup>218</sup> 1904 年 8 月 27 日インドシナ監督は「コーチシナ社村監督組織議定」を通達した。（参考 State records management and archives department of Vietnam、<http://www.archives.gov.vn/Pages/Tin%20chi%20ti%E1%BA%BFt.aspx?itemid=302&listId=c2d480fb-e285-4961-b9cd-b018b58b22d0&ws=conte>、閲覧日 2016 年 2 月 21 日）

<sup>219</sup> コーチシナの各省はタイニン（Tay Ninh）、テウジュウモット（Thu Dau Mot）、ビエンホア（Bien Hoa）、バリア（Ba Ria）、ジュアデイ（Gia Dinh）、チョロン（Cho Lon）、タンアン（Tan An）、ゴコン（Go Cong）、ハティエン（Ha Tien）、ロンシュエン（Long Xuyen）、ミイト（Mi Tho）、カント（Can Tho）、ラクジア（Rach Gia）、サデク（Sa Dec）、チャヴィン（Tra Vinh）、バックリエウ（Bac Lieu）、チャウドック（Chau Doc）、ソックチャン（Soc Trang）、ヴィンロン（Vinh Long）。

なりその長官を行政事務官と称し、その下にフランス人（副行政事務官、収税官など）及びベトナム人（書記）などの若干の官吏が置かれている。更に行政事務官は総内の有力者によって選ばれたベトナム人から成る省議会（*Conseils de Province*）によって補佐される。省議会は省の予算を審議する。また行政事務官は省内の各種の官吏（たとえば教育、土木、衛生、税金の官吏）を監督する<sup>220</sup>。

フランスは、コーチシナにおける軍事的必要性や原料・商品などの運送のために交通路を建設し、鉄道や石で舗装された道路を完成させた。サイゴンのビンロイ（*Binh Loi*）橋などのような大きな橋が架けられ、ミト（*Mi Tho*）ーヴィンロン（*Vinh Long*）ーカント（*Can Tho*）間の鉄道の長さは 93km に及んだ。また、コーチシナでは水路が優先的に整備された。船や汽船が往来できるようにと若干の河の浚渫を行い、サイゴンの海港も拡張された。1893 年にフランス政権当局は運河を開き、補修した。たとえばヴィンテ（*Vinh Te*）運河、ヴィンアン（*Vinh An*）運河、カマウ（*Ca Mau*）運河、バックリエウ（*Bac Lieu*）運河などである。1914 年時点でコーチシナ全域の水路は 1745km で、これらの水路を汽船が運航した<sup>221</sup>。

また、フランスはコーチシナに資本主義的な企業を出現させた。たとえばサイゴン、チョロンには 9 精米企業、2 石鹼企業、1 電気企業があった。サイゴンやチョロンでは特に精米企業が多く、19 世紀末には華僑が多く担っていたが、20 世紀に入ると民族資本もこれに参入した。

このように精米業が発展した背景には、コーチシナの経済が、米作を中心とする農業によって発展したことがある。米の作付面積は 1870 年に 522000 ヘクタール、1890 年に 854000 ヘクタール、1900 年 1174000 ヘクタールと、この 30 年間で 50 パーセント以上増加し、その後 1910 年には 1524000 ヘクタールとおよそ 30 パーセント増加した<sup>222</sup>。一方で、新たにゴム、コーヒーなど輸出作物の栽培もプランテーションで行われるようになった。プランテーションでは伝統的な耕作方法が維持され、農民たちは大地主に土地を借りる代わりに収穫の大部分を収めた。一部のプランテーションでは機械が使われた。

次にコーチシナの教育について述べる。20 世紀初頭のフランス植民地の統治方法は「同化主義」であった。この主義は植民地を本国の延長とみなし、植民地に本国の文化、生活様式、言語などを強制し、最終的には植民地現地民をして政治的に本国民に同化せしめるものである。また、植民地政府の利益と現地民の民力向上の両方を追求するべきであるという発想が生まれ、それは「協力主義」と呼ばれた。ドゥメールの後任のインドシナ総督としてポール・ボーが着任し、植民地の実情と伝統に根ざした、現地住民のための公教育の普及をめざす審議会を設置し、「フランス現地人学校」（仏越学校）という体系を作りだした。当初の仏越学校は、伝統的な儒教教育との接合を図っており、クオック・グをもって実学系の科目を、漢字で儒教道徳を教える方式をとり、初等教育から中等教育までを視

<sup>220</sup> この段落は、楊広成『安南史』、第二十九講交趾支那の行政組織、東亜研究所、1942、pp.134-135 を参考に執筆した。

<sup>221</sup> Vien Su hoc, *Lich su Viet Nam 1897 – 1918*, NXB Khoa hoc xa hoi, Ha Noi, 1999, p. 50

<sup>222</sup> Pierre Gourou, *L'utilisation du sol en Indochine francaise*, Paris, 1939, p. 265

野に入れていた。また、1902年に高等教育機関として医薬学校が設立された。

コーチシナではフランス当局から教育に関する様々な議定を通達された。例えば1874年「教育規制」が実施された<sup>223</sup>。規制に従い、6カ所（サイゴン、ミト、チョロン、ヴィンロン、ベンチェ、ソックチャン）で小学校が設立された。この学校での勉学の内容は音読、書写、漢字、フランス語、数学であった。小学校の卒業試験に生徒は筆記試験、面接を受けた。また中学校はサイゴンのみに設置され、勉学の内容はフランス語、クオック・グ、数学、地域、歴史（フランス史のみ）であった。しかし、1874年の「教育規制」は効果がなかったため、この規制は撤回され、1879年3月、ラフォント（Lafont）（在任：1877 - 1879）は新たな教育規制を発した。規制の内容は、農村部では3年制の初級学校、都市部では6年制の初等学校に入学した。初等学校には初級段階（1-3学年）と初等段階（4-6学年）の両方が含まれており、中等教育を行う高等小学校へ進学することができたが、農村の初級学校はそこから先に進むことがむずかしかった。

この時期のコーチシナとトンキン、アナンを比べると、よりコーチシナの方が経済・教育などが発展していたといえる。コーチシナの社会構造は変化し、新しい階級が出現した。たとえば民族資本家が登場し、彼らは精米業に参画し、彼らの経済的役割は重要になっていた。

## （2）コーチシナにおけるドンズー運動の過程

コーチシナの青年留学生がドンズー運動に参加した過程を確認する。

1907年以前、コーチシナの青年はまだドンズー運動に参加していなかった。そこで、ファン・ボイ・チャウはドンズー運動をコーチシナ方面に拡大することを計画した。『年表』によれば、「この時コーチシナに着目した理由は、そこには資産家が多く、資金源として有望であったこと、彼らの間にグエン朝始祖ザ・ロンとその長子カイン（Canh）に対する思慕の念が強く、「思旧恋君の人心を利用」できたことにあった」とされる<sup>224</sup>。要するに、カインの直系の子孫たるグエン朝貴族クオン・デを、コーチシナに対する宣伝活動のシンボルとして活用し、資金集めを図ったのである。具体的には、クオン・デ名義の宣伝文書「哀告南祈父老文」（Ai Cao Nam Ky Phu Lao Van）を印刷してコーチシナに流布したのであった<sup>225</sup>。また、『越南義烈史』の阮公誠憲（グエン・タイン・ヒエン）の伝には「丁未戊申の年（一九〇七-〇八）、波うちたかまる新潮が南圻をおおった。会主畿外侯の「六省ニ勧告スルノ文」（筆者注：「哀告南祈父老文」のこと）が、日本から海を越えて南圻に飛来したのである。これを読んで公は欣喜雀躍、光復こそがわが任務、と決めた。このとき、中圻北圻では、日本に遊学の若者は日に日に衆く、南圻にも遊学の組織づくりをと、立ちあがった。

<sup>223</sup> 参考 Institute for Education Research – Ho Chi Minh University of Pedagogy.

<http://www.ier.edu.vn/content/view/523/174/>、閲覧日 2016年2月27日

<sup>224</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, pp. 159

<sup>225</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, pp. 159 – 160

丁未の年の冬から、南圻の子弟が続々と出洋して日本に渡ったのは、公の尽力による」と書かれており、「哀告南圻父老文」がコーチシナでいかに大きな影響力を持ったかがわかる<sup>226</sup>。

また、1907 年 4 月、ファン・ボイ・チャウとダム・キ・シンと一緒に香港に着いた時、同地のカトリック教会の高等小学校にコーチシナ出身のチャン・ヴァン・テウイエト (Tran Van Tuyet) という少年が在籍しているということを知り込み、また彼の父チャン・ヴァン・チュウ (Tran Van Chieu, Tran Chanh Chieu) がサイゴン府知事であることまで確かめた。ファン・ボイ・チャウは毎日少年の寄宿舎を訪ね、愛国、復讐の思想を鼓吹し、少年の勧誘活動に取りかかった。少年から、ファン・ボイ・チャウのこれまでに書いた文書をサイゴンにいる彼の父親のところに送らせ、一度香港へ見物かたがた出て来るように勧めさせた。チャン・ヴァン・チュウが香港に出て来たのは、それから数週間後であった。

またその後数か月経って、ブイ・チ・ニュアン (Bui Chi Nuan) (表 7 No.1) が支援者のチャン・ヴァン・ディン (Tran Van Dinh) (表 8No.6) と共に香港を経由し、日本へ渡船して来た。『越南義烈史』の陳公福定 (チャン・フック・ディン) の伝には「阮誠憲公その他南圻の父老二十余人と出洋団を組織して、裴之潤 (ブイ・チ・ニュアン)、黄有志 (ホアン・ヒュ・チ) を出洋の第一陣、黄興 (ホアン・フン)、劉猶興 (ル・ゾ・フン)、鄧秉誠 (ダン・ビン・タン) は第二陣、とした。公は出洋運動の拡張に専念した。第一は東遊運動の人材を選び増やすこと、第二に学費の募集と送金。これは救国の基礎づくり、新しい学問知識の輸入だと動きつつ、その揚句、自分が率先出洋せねば諸人を策励 (はげま) すことにならぬ、と念い至った」<sup>227</sup>とあり、支援者である彼が出洋した事情が書かれている。こうしてコーチシナ人の日本留学は、この時期から急に増えて行った。ファン・ボイ・チャウが 1906 年後半に、コーチシナへの宣伝活動に着手した結果、1907 年以降、極めて多くのコーチシナ青年が出洋し、東遊学生 of 過半数達するまでになったのである。『年表』の中でファン・ボイ・チャウは、1907 年から 1908 年まで運動最盛期における留学生数を 200 人前後、そのうちコーチシナからは 100 人ぐらい、アンナンからは 50 人、トンキンからは 40 人であったと記している<sup>228</sup>。

これほどまでに短期間でコーチシナ出身者が増えたことについて、白石は次の 4 点を指摘する。

第 1 に、チャン・チャイン・チュウ (Tran Chanh Chieu)<sup>229</sup>、グエン・タン・ヒエンなどコーチシナ各地の有力者 (「南圻父老」) が、ファン・ボイ・チャウの主張に共鳴して宣伝運動に当たったため、その影響が早く広範囲に渡っていた。しかも彼らの留学生を募集し、送り

<sup>226</sup> 鄧搏鵬著；後藤均平訳『越南義烈史—抗仏独立運動の死の記録—』刀水書房、1993、p.85

<sup>227</sup> 鄧搏鵬著；後藤均平訳『越南義烈史—抗仏独立運動の死の記録—』刀水書房、1993、p.88

<sup>228</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap (Tu truyen)* , tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p. 181

<sup>229</sup> チャン・チャイン・チュウ (Tran Chanh Chieu) はフランス国籍を持った名士であって、フランス人は彼をジルベール・シエウ (Gilbert Chieu) と呼んだ。彼はサイゴンとミトなどの都市にホテルなどを経営し、また合法的な新聞の編集者を兼ねていた。

出す体制が、極めて効率的に組織されたということである。

第 2 に、ドンズー運動に呼応した「南析父老」は、地主階層、都市富裕層であって、多く資金を有しており、多くの子弟や縁者を留学させる能力を持っていたことである。

第 3 に、フランスの直轄植民地となったコーチシナでは、早くより科举制度が廃止され、それに伴って伝統的な漢字教育が地盤沈下した。他方、西洋教育制度の受容は、アンナン、トンキンに比べれば早かったが、その初期において教師、教材の質は劣悪であり、その目的は、フランス人行政機構における書記、通訳者を養成することにあつた。このため、コーチシナの都市、農村の富裕層の一部では、機会があれば子弟を留学させたいという潜在意識が存在した。

第 4 に、コーチシナにおける米の輸出港であつたサイゴンは、華僑の交通、連絡を媒介し、伝統的に華南との結び付きが強く、サイゴン—広東—香港ルートの延長上に位置する日本に関心を向けることに大きな困難を生じなかつた<sup>230</sup>。

この白石の指摘はおおむね妥当なものと思われるが、次の節でドンズー運動の特徴を確認するなかでそのいくつかの妥当性を再確認してみたい。

### (3) コーチシナにおけるドンズー運動の特徴

トンキン、アンナンと同じように、現時点で判明しているコーチシナからドンズー運動に参加した青年の一覧表を作成した。それが表 7 である。また、支援者について名前が分かっている者を整理して、一覧表を作成したのが表 8 である。

表 7：ドンズー運動に参加したコーチシナ青年のリスト

No	名前	出身地	階層・職業	生没年、その他
1	ブイ・チ・ニュアン (Bui Chi Nhuan、Bui Mong Vu)	タンアン (Tan An)	紳豪層	1907 年来日。献金募集
2	グエン・チュエン (Nguyen Truyen)	ヴィンロン (Vinh Long)	官吏の息子	来日時期不明
3	リ・リエウ (Ly Lieu, Ly Joseph, Ly Phung Xuan)	ヴィンロン	官吏の息子	1892-1936 1907 年来日
4	ホアン・フン (Hoang Hung、Hoang Van Nghi)	ヴィンロン	紳豪層	振武学校に入学した。文書部の委員。

<sup>230</sup> 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジアファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書店、1993、pp. 335-336

5	チャン・ヴァン・アン (Tran Van An, Tran Phuc An)	ヴィンロン	地主の息子	1897-1941 10歳で来日。日本の小学校で勉強した。
6	チャン・ヴァン・トウ (Tran Van Thu)	ヴィンロン	地主の息子	1894-1917 1907年に来日、日本の小学校で勉強した。
7	ホアン・ヴィ・ヒュン (Hoang Vy Hung, Hoang Van Ky)	ヴィンロン	義士の息子、表8のNo 45の息子	1907年に来日 日本の小学校で勉強した。
8	チャン・ヴァン・ヒュアン (Tran Van Huan)		紳豪層	1908年に来日
9	リュウ・クアン・バット (Luu Quang Bat)	ドンタップ (Dong Thap)	儒学者の息子	1889-1958、 1907年に来日 東京同文書院で勉強した。
10	レ・ヴァン・サオ (Le Van Sao)	ドンタップ	儒学者の息子、 表7の24の息子	1890-? 1907年来日、東京同文書院で勉強した。
11	チャン・ヴァン・テウエット (Tran Van Tuyet)	キエンザン (Kien Giang)	地主の息子	チャン・チャン・チエウ（表8No.1）の息子
12	グエン・ハオ・ヴィエン (Nguyen Hao Vinh)	ロンシウエン (Long Xuyen)	儒学者の息子	1893-1941 表8No15の息子
13	グエン・ニユ・ビック (Nguyen Nhu Bich)	ハティエン (Ha Tien)	官吏の息子	表8No 2の息子
14	グエン・マン・チ (Nguyen Manh Chi)	ヴィンロン	紳豪層	1907年来日
15	ダン・ビン・タン (Dang Binh Thanh)		紳豪層	1907年来日、経済部の委員
16	リュウ・ド・フン (Luu Do Hung)	ヴィンロン	紳豪層	1908年来日、東京同文書院で勉強した。
17	ホアン・ヒュウ・チ	ヴィンロン	紳豪層	1907年来日、東



	(Hoang Huu Chi)			京同文書院で勉強した。
18	リ・テウ・アン (Ly Tu An、Ly Tu Yen)	ドンタップ	紳豪層	来日時期不明
19	ホアン・クアン・タン (Hoang Quang Thanh)		紳豪層	紀律部委員
20	ホアン・シ・ヒュン (Hoang Si Hung)		紳豪層	来日時期不明
21	ラム・カン (Lam Can)	ヴィンロン	富裕層の息子 表 7 の No 22 兄弟、表 8 の No 25 の息子	1907 年来日
22	ラム・チィ (Lam Ty)	ヴィンロン	富裕層の息子、 表 7 の No 21 の兄弟、表 8 の No 25 の息子	1907 年来日
23	グエン・ディエン・チ (Nguyen Dien Chi)	不詳		1907 年来日
24	レ・チャン・ダン (Le Chanh Dang)	ドンタップ	儒学者、表 7 の 10 の父	1907 年来日
25	カオ・ハイ (Cao Hai)	ジャディン (Gia Dinh)		1907 年来日
26	グエン・チン・キィ (Nguyen Chinh Khi)	不詳		1907 年来日
27	ディン・ヒュウ・キエム (Dinh Hung Khiem)	不詳		1907 年来日
28	チャウ・ティエウ・ラン (Chau Thieu Lang)	不詳		1907 年来日
29	イ・ロン (Y Long)	チャヴィン (Tra Vinh)		1909 年来日
30	レ・ヴァン・ミ (Le Van Mi)	ドンタップ		1907 年来日
31	チャン・ゴ (Tran Ngo)	ヴィンロン		1907 年来日
32	チャン・チ・クアン (Tran Chi Quan)	ヴィンロン		1907 年来日
33	ヴ・ヴオン・タ (Vu Vuong Ta)	不詳		1907 年来日
34	グエン・シク・タム	不詳		1907 年来日

	(Nguyen Xich Tam)			
35	チャウ・ヴァン・クユ (Chau Van Quy)	カント		1908 年来日
36	ファン・ゴック・テウット (Phan Ngoc Tuyet, Phan My Tuyet)	ジャディン	富裕層の息子	1907 年来日
37	ホアン・ヒュウ・ヴァン (Hoang Huu Van)	ヴィンロン	富裕層の息子	1908 年来日
38	ド・ヴァン・イ (Do Van Y)	ドンタップ		1892-1968 1907 年来日

**参考：** Chuong Thau (ed), *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon Ngu Dong tay, Ha Noi, 2001 ; Phan Thi Han, Dang Doan Bang 著, Ton Quang Phiet 訳, *Viet Nam nghia liet su*, (越南義烈史 抗仏独立運動の死の記録), NXB Van hoc, 1972; 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』、巖南堂書店、1993、Tap chi *Xua va Nay* No 318 ( 10/ 2008 ) , 320 (11/2008), 322 (12/2008), 329(4/ 2009), 330 (4/ 2009), 331(5/ 2009)

**表 8：ドンズー運動に支援したコーチシナ人のリスト**

No	名前	出身地	生没年	性	階層・職業	支援内容
1	チャン・チャン・チエウ (Tran Chanh Chieu)	キエンザン (Kien Giang)	1867-1919	男	大地主	Minh Tan Cong nghe xa を設立した。
2	グエン・タン・ヒエン (Nguyen Than Hien)	ハティエン (Ha Tien)	1856-1914	男	官吏	20000 ドンを援助する。コーチシナ勸学会が設立した。
3	グエン・クアン・ジエウ (Nguyen Quang Dieu)	ドンタップ (Dong Thap)	1880-1936	男	儒学者	連絡、鼓舞、宣伝

4	グエン・アン・クオン (Nguyen An Khuong)	ジャディン (Gia Dinh)	1860 -1931	男	儒学者	連絡、支援、Chieu Nam Lau ホテルを経営し、ドンズー運動に金を支援した。
5	グエン・ティ・シイエン (Nguyen Thi Xuyen)	ジャディン	1880 -1931	女	儒学者の娘	連絡、支援
6	チャン・ヴァン・ディン (Tran Van Dinh, Tran Phuc Dinh)	ヴィンロン (Vinh Long)		男	大地主	1908 年に彼は日本へ子供 (3 人) を送り出した。
7	ダン・テック・リエン (Dang Thuc Lieng)	ジャディン	1867-1945	男	儒学者	農賈茗談 (Nong Co Min dam) の記者
8	ヒュン・ディン・ディエン (Huynh Dinh Dien)	ゴコン (Go Cong)		男	富裕層	Minh Tan ホテルを管理した
9	チャン・バ・レ (Tran Ba Le)	ドンタップ		男	官吏	献金支援
10	レ・クアン・ヒエン (Le Quang Hien)	ドンタップ		男	官吏	献金支援
11	レ・ティ・フック (Le Thi Phuoc)	ドンタップ		女	富裕層	献金支援 (2000 ドン)
12	リュウ・ディン・ギヤアン (Luu Dinh Ngoan)	ヴィンロン		男	富裕層	献金支援
13	ファン・ヴァン・トン (Phan Van Tong 、 Nguyen Van Duong)	ベンチェ (Ben Tre)	1881-1945	男	官吏の息子	ヴィンヒュエップ会社を開く、財政運

						動に参加した。
14	グエン・テ・ヒエン (Nguyen The Hien)	ベンチェ (Ben Tre)		男	官吏、地主の息子	献金支援
15	グエン・ハオ・ヴァン (Nguyen Hao Van)	ロンシウ エン (Long Xuyen)		男	儒学者	コーチシナ勸学会を設立した。
16	グエン・ビュ・タイ (Nguyen Buu Tai)	ベンチェ (Ben Tre)	1882-1958	男	儒学者の息子、教師	家産を売って得た、金でドンズー運動を援助した。
17	ホ・フン・ニュオン (Ho Hung Nhuong)			男	儒学者	コーチシナ勸学会
18	ヴォヴァン・テオン (Vo Van Thom)			男	儒学者	コーチシナ勸学会
19	ホアン・コン・ダン (Hoang Cong Dan)	ヴィンロン		男	儒学者	1908年に日本に子孫を送り出した。
20	チュオン・ジュ・トアン (Truong Duy Toan)	ヴィンロン	1885-1957	男	書記者	詩文鼓舞
21	グエン・ミン・チエット (Nguyen Minh Triet, 号名 Ca Tran )	ミトー	1860-1933	男	儒学者	ファン・ボーイ・チャウの詩文を宣伝した。
22	ティエウ・チュン (Thieu Trung )	ヴィンロン		女	表7のNo4の妻	献金募集

23	ファム・ヴァン・タム (Pham Van Tam)			男		献金募集、 青年を集 合し、送り 出す
24	ルオン・カック・ニン (Luong Khac Ninh)	ヴィンロ ン	1862-1943	男	儒学者 の息 子、 通訳者	農賈茗談 (Nong Co min dam) の主筆
25	ラム・ビン (Lam Binh)	ヴェンロ ン		男	富裕層	2000 ドン を支援し た。
26	グエン・ヴァン・ヴァン (Nguyen Van Vang)	チャヴィ ン (Tra Vinh)		男		献金募集
27	グエン・ヴィエン・カイエウ (Nguyen Vien Kieu)	チャヴィ ン (Tra Vinh)		男	富裕層	献金支援, Minh Tan Cong nghe xa を参加 した。
28	チュオン・ミン・タン (Truong Minh Tanh)	ビエンホ オア (Bien Hoa)		男	富裕層	献金支援
29	グエン・テウ・カン (Nguyen Tu Cang)	ミトー		男	富裕層	献金支援
30	グエン・ジュック・グエン (Nguyen Giac Nguyen)	カント (Can Tho)		男	修道者	Nam Nha 寺でファ ン、グオ ン・デーを 泊った。
31	サ・チン (Xa Trinh, Nguyen Nguon Hanh)	ヴィンロ ン		男	富裕層	献金支援

32	グエン・バ・ダック (Nguyen Ba Dac)	ジャック ジャ (Rach Gia)		男	富裕層	献金支援
33	グエン・ジョアン・クン (Nguyen Doan Cung)	カント		男	富裕層	献金支援
34	ファム・ミン・ダット (Pham Minh Dat)	カント		男	富裕層	献金支援
35	ファン・ヴァン・グウ (Phan Van Cu)	ドンタッ プ (Dong Thap)	1881-1917	男	富裕層	献金支援
36	ホアン・ヴァン・カット (Hoang Van Cat, Hoang Van Chat)	ヴィンロ ン		男	表 7 の No 7 の父	献金募集
37	ブイ・モン (Bui Mong)	ヴィンロ ン		男	儒学者	献金募集

参考 : Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung Tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001; Son Nam, *Phong trao Duy Tan o Bac Trung Nam- Mien Nam dau the ki XX – Thien dia Hoi va Cuoc Minh Tan*, NXB Tre, TPHCM, 2009; Nguyen Van Hau, *Chi si Nguyen Quang Dieu, mot lanh tu trong yeu cua phong trao Dong Du o mien Nam*, NXB Tre va Tap chi Xua – Nay, TPHCM, 2002; Tap chi Xua va Nay No 318 ( 10/ 2008) , 320 (11/2008), 322 (12/2008), 329(4/ 2009), 330 (4/ 2009), 331(5/ 2009)

さて、2つの表からわかるコーチシナのドンズー運動の特徴をあげると、次のとおりである。

まず、1つ目の特徴として、留学生と支援者の階層が挙げられる。まず留学生は、地主の子弟と紳豪層が多く、支援者の階層は地主、官吏、富裕層が多い。表 8 によれば支援者 37 人中、地主が 2 人、官吏及び官吏の息子が 6 人、儒学者が 11 人、富裕層が 12 人である。

次に 2 つ目の特徴は、運動が展開した地域である。運動の中心となっていた場所はベン

チェ、ヴィンロン、ドンタップである。表 7 によれば、留学者 38 人中、ヴィンロン省出身者は 14 人、ドンタップ省出身者は 6 人であり、表 8 によれば、支援者 37 人中、ジャディン省出身者が 3 人、ベンチェ省出身者が 3 人、ヴィンロン出身者が 7 人、ドンタップ省出身者が 5 人、カント出身者が 3 人である。

表からは以上の特徴がわかるが、コーチシナにおけるドンズー運動にはもう 1 つ大きな特徴がある。それは、ドンズー運動を援助するためのほかの活動が活発に行われていたということである。たとえば、表 8No.1 のチャン・チャン・チエウはナムキミンタンコンゲサ (Nam ki Minh Tan Cong nghe xa)<sup>231</sup>を経営し、表 8No.2 のグエン・タン・ヒエン (Nguyen Than Hien) 20000 ドンを援助し、コーチシナ勸学会を設立した。表 8No.4 のグエン・アン・クオンはチエウナムラウ (Chieu Nam Lau) ホテルを運営した。彼らはこのような活動で得た資金をドンズー運動に支援したのである。

#### 第四節 小結

以上、ベトナムの 3 地域におけるドンズー運動支援の特徴を検討した。その検討結果をまとめると次のとおりである。

まず、支援者の階層や職業を見ると、トンキンとアンナンでは儒学者が多いのに対し、コーチシナでは官吏・富裕層が多いという特徴がある。次に運動開始の時期を見ると、トンキン・アンナンは早くからドンズー運動に参加したが、コーチシナでは遅く、1907 年からドンズー運動に参加した。それなのに、留学した青年たちの数が一番多く、コーチシナでは短期間に非常な盛り上がりを経て運動が行われたことがわかる

また、ドンズー運動を支援する方法もいろいろあり、たとえば、家産を売り、商會を經營してその資金を送金したり、日本から送られてきた詩文を宣伝したり、学会を作って送りだしの体制を作ったりなど、さまざまであった。地域的には、コーチシナにおいて企業經營の資金をつぎ込む例が見られるように、ここからはかなり大きな資金が献金されたようである。

さらに、ドンズー運動が広がった範囲は、トンキンではハノイ、ナムディン、タイビンなど、アンナンではゲアン、ハティン、クアンナムなど、コーチシナではヴィンロン、ベンチェ、カントなどかなり広いが、各地域の一部であって地域全域に拡大してはいない点は注意しなければならない。

もう一つ、支援活動などを見ていて気が付くのは、ドンズー運動においてベトナムと日本の途中にある香港が支援者とファン・ボイ・チャウをつなぐ中継地として大切な場所だったことである。ここで、ファン・ボイ・チャウは志士と会い、献金支援をもらい、留学生を迎えたのである。香港での彼らの活動も今後解明すべき課題になると思われる。

---

<sup>231</sup> ナムキミンタンコンゲサというのは株式会社で、石鹼を製造・販売した。

### 第三部 ベトナムの義塾運動と慶応義塾

第三部では、ドンキン義塾が慶応義塾を模倣して作られた学校であるかどうかを明らかにすることを軸に、ドンキン義塾に関する諸問題とその具体的な活動を明らかにしていきたい。第三部は3章構成で、まず第一章で、20世紀初頭の近代日本教育に対するベトナム知識人の認識について確認し、ベトナム知識人たちが日本の影響を受けていたと言えるのかを検討する。第二章で明治期における慶應義塾史を概観し、これらを踏まえ、第三章では、福沢諭吉や慶応義塾の影響を考えながら、ベトナムにおけるトンキン（東京）義塾の設立と義塾運動の発展について検討する。

#### 第一章 20世紀初頭近代日本教育に対するベトナム知識人の認識

##### 第一節 近代日本教育に対するベトナム知識人の認識

まず、20世紀初頭にベトナム知識人が近代日本教育をどのように認識していたか検討しておきたい。

19世紀半ばから20世紀初頭にかけてベトナムや日本などの東アジアの国々は、欧米の文明を急速に取り入れて近代化への道を開いた。日本は徳川期を通じ長崎からオランダを通して西洋の学問を輸入し、19世紀にはそれが全国に普及したこともあって、欧米文明への理解は東洋諸国中であって群をぬいていた。そして、明治維新以降、急速に近代化が進められ、ベトナムの知識人たちは日露戦争での日本の勝利によって明治維新の情報に強い関心を示すようになった。その具体的な例は、第一部第四章で提示したので、ここでは省略する。

ベトナムの知識人たちの日本への関心は強かったものの、その知識はさほど具体的ではなかった。そうしたなかで具体的な日本像をベトナムの知識人に紹介したのが、1907年にドンキン義塾が発行した教科書である『国民読本』である。その一部は第一部第四章で紹介したが、改めて日本の教育について述べた部分を見てみたい。

まず、『国民読本』上編の34番目の項目「教育」に、教育の普及のことが具体的に述べられている。つまり、「全国に文明を進める方法は、普及教育だけである（小学校が普及教育である一原注）。普及教育とは、国中を通して教育を受けない者はいないという意味である」<sup>232</sup>と普及教育の解説をした後、「今日文明各国は普及教育を緊要急務とみなし、公私の各学校を国中にあまねく置き、各々の小学校は官立である。最も盛んなのはイギリス・アメリカの諸国である。日本全国にはわずか43県しかないのに、小学校は26824校もある」<sup>233</sup>とその普及ぶりを具体的に述べている。

『国民読本』上編の36番目の項目は「日本学校」である。既に第一部第四章で文章を引

<sup>232</sup> National Library of Vietnam、史料 Quoc dan doc ban（国民読本）、NLVNPF-0897-01、RV 1753、<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1111/>、閲覧日 2016 年 2 月 29 日

<sup>233</sup> National Library of Vietnam、史料 Quoc dan doc ban（国民読本）、NLVNPF-0897-01、RV 1753、<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1111/>、閲覧日 2016 年 2 月 29 日



用したので、ここでは簡単にだけ述べると、文部省の管轄下にある学校として、帝国大学、高等学校、中学校、小学校、師範学校、実業学校、高等女学校を挙げ、これについて年数や教育内容などを具体的に紹介している。

このように見てくると、20 世紀初頭のベトナムの知識人は、当初、日本の教育や学校についての知識をほとんど持っていなかったが、ドンキン義塾ができて 1907 年に『国民読本』が刊行され、それを知るようになったといえる。その意味でもドンキン義塾の果たした役割は重要である。そして、それを読んだベトナムの知識人たちは、日本の教育や学校などをモデルとして学び、ベトナム民族運動を進め、愛国心を高めることを奨励していくことになる。

## 第二節 福沢諭吉の実学観とベトナム知識人の実学観

### (1) 福沢諭吉の実学観

近代日本の偉大な思想家として、福沢諭吉<sup>234</sup>の歴史的地位は重要なものである。ここでは、ベトナムに影響した可能性のある彼の实学思想の内容を検討しておきたい。

まず、福沢諭吉は学問について、

学問とは広き言葉にして、無形の学問もあり、有形もあり。心学、神学、理学等は形なき学問なり。天文、地理、窮理、化学等は形ある学問なり。何れにても皆知識見聞の領分を広くして、物事の道理を弁え、人たる者の職分を知ることなり。知識見聞を開くためには、或いは人の言を聞き、或いは自ら工夫を運らし、或いは書物をも読まざるべからず。故に学問には文字を知ること必用なれども、古来世の人の思う如く、ただ文字を読むのみをもって学問とするは大なる心得違いなり。<sup>235</sup>

と述べている。つまり、福沢は「有形の学」という表現で、学問のなかに西洋的な実学が含まれると言っているのである。

また、福沢は文明の要件として「一身独立して一国独立すること」<sup>236</sup>と説明し、従来の卑屈な気風から脱却する途を、「人間普通日用に近き実学」に求めた。これは、「譬えば、いろは四十七文字を習い、手紙の文言、帳合の仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等を心得」<sup>237</sup>ることなどを指し、これに加えてさらに多くの物事を学ぶべきだと述べている。彼にとって「学問の要は活用に在るのみ、活用なき学問は無学に等し」<sup>238</sup>だったし、また「学問の本趣意は読書のみに非ずして精神の働に在り、この働を活用して実地に施すには様々の工夫なかる可らず」<sup>239</sup>であった。

<sup>234</sup> 福沢諭吉は、中津奥平家の家臣福沢百助の次男で、天保 5 年 12 月 12 日大阪堂島 5 丁目玉江橋北詰中津藩蔵屋敷内の長屋に生まれ、明治 34 年（1901）2 月 3 日東京三田の慶應義塾構内の自邸で死去した。幕末から明治にわたり新思想の先駆者指導者として日本文化の発展のために最も大きな功績のあった 1 人であることは、広く人の知るところである。

<sup>235</sup> 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995、p.19

<sup>236</sup> 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995、p.29

<sup>237</sup> 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995、pp.12-13

<sup>238</sup> 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995、p.106

<sup>239</sup> 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995、p.107

また、福沢諭吉は彼が実学とみなす諸学科の意味について、『学問のすすめ』の中で、「地理学とは日本国中はもちろん世界万国の風土道案内なり。究理学とは天地万物の性質を見て、その働きを知る学問なり。歴史とは年代記のくわしきものにて万物古今の有様を詮索する書物なり。経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。修身学とは身の行ないを修め、人に交わり、この世を渡るべき天然の道理を述べたものなり」と述べている<sup>240</sup>。そして、そうした学科を勉強するためには、西洋の書物を読まなければならないとして、次のように述べる。

これらの学問をするに、いずれも西洋の翻訳書を取調べ、大抵の事は日本の仮名にて用を便じ、或いは年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ、一科一学も実事を押え、その事に就きその物に従い、近く物事の道理を求めて今日の用を達すべきなり。右は人間普通の実学にて、人たる者は貴賤上下の区別なく皆悉くたしなむべき心得なれば、この心得ありて後に士農工商各々その分を尽し銘々の家業を営み、身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり。<sup>241</sup>

つまり、西洋の書物を読んで得られる「人間普通の実学」は身分に関係なく誰もが学ぶべきものである。

このように、福沢諭吉にとって、実学とは、上記引用の内容を要約すると、徳川時代の朱子学のような古典を読んで知識を得るような机上の学問ではなく、実際に活用されて役立つものでなければならず、その範囲は日常生活的なものから地理学・究理学・歴史学等の天下国家を論ずるうえで有用な世界観に関わる西洋的な学問までの広い範囲を含み、それは身分に関係なく国民誰もが学ぶべきものである。そして、慶応義塾は福沢諭吉のこうした実学観に基づいて教育が行われたのである。（第三部第二章参照）

## （2）ベトナム知識人の実学観

19世紀末から20世紀初頭にかけて、東アジア、特に中国と日本は重大な諸変化をこうむりつつあった。中国は本来、東アジアにおける大きな封建国家であったが、19世紀半以降イギリス、フランス、ドイツなどの西洋列強によって軍事的紛争を引き起された。20世紀初頭になると、中国は諸帝国主義の半植民地国になってしまった。こうした情勢を挽回するために、梁啓超ら中国の変法派は、維新運動を起し、資本主義諸国を模範とした諸改革を実現するように朝廷に要求した。一方、日本では、明治維新が成功し、日清戦争に勝って東アジアの覇者になった。1905年になると、日本はロシア帝国を負かしアジアに大きな影響を与えると同時に、中国におけるロシア帝国の利権を奪うことにも成功した。中国と日本の維新運動は、当時の愛国的なベトナム知識人の思想に強い作用を及ぼした。彼らは「維新」をしなければならない、つまり西洋文明を学び、政治、経済から軍事、文化、教育などを改革しなければならないと考えた。ベトナム知識人たちが「新書」に接触した

<sup>240</sup> 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995、p.13

<sup>241</sup> 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995、p.13

時の衝撃は大きなものであった。

一方で、20 世紀初頭におけるベトナムの社会は、フランス植民地政策のもとで多くの重要な変化をとげていた。地主、農民などの古い諸階級はなお存在したが、急速な分化の途中にあり、新しく労働者、ブルジョアジー（民族資本、買弁資本）、都市小ブルジョアジーなどの諸階級が出現したのである。

このような状況のもとでベトナム知識人の認識は変化していった。彼らの実学観を具体的に説明したい。

ベトナムでは、実学は文明の学問であるとされた。『国民読本』<sup>242</sup>には、

地球各国は必ず野蛮から開化して文明になる。これは一つの定まったものである。すでに文明化したといっても、その進歩の遅い速いや程度の優劣といったものについては、定まったものはない<sup>243</sup>。

とあり、文明化を世界史的に必然的なもの、法則的なものと位置付けたうえで、その速度や程度には場所による違いがあると述べている。そして、

大抵文明を進める道具は二つある。1 つは足るを知らざることである。人の天性はみな足るを知らない。すでに美しいものは更に美しさを求め、すでに巧みなものは更に巧みであることを求め、すでに優れているものはさらに優れることを求める。昨日を是としたものも、今日には非とし、それを非としたら改良するのである。そうすれば進歩する。（中略）1 つは模倣することができることである。人の天から与えられた才能はみな模倣による。万国が交わると、見識はますます広がる。自ずからすでに美しい、すでに巧みであると思うものも、自分よりも美しいもの、自分よりも巧みなものを見れば、必ず奮起してこれを模倣し、我が足るを知らざるの心を満たすのである<sup>244</sup>。

と述べ、文明化を進めるのは足るを知らないという人間の性格と模倣する人間の才能であるという。そして、『国民読本』は、非を知って改良する例として、竹簡・木簡などがあつたにもかかわらず紙筆がつくられたこと、麻や生糸があつたにもかかわらず綿布が作られたことを挙げ、また、より良い物を見て模倣し足るを知らざる心を満たした例として、昔は火打石であつたものが大柴に変わり、昔の航船が汽船に変わった例を挙げている。この具体例からすると、『国民読本』がイメージする文明化は実業・工業の革新にあると考えられる。

また、『国民読本』同様にドンキン義塾の教科書として刊行された『文明新学策』<sup>245</sup>は、ベトナムで学ばれている学問が中国の古典に過ぎないことを「試験にでる教材は、古典の

<sup>242</sup> 『国民読本』（上編は写本、下編は活字本。は、現在ベトナムの第一国家公文書館に保管されている。ベトナム国家図書館のウェブサイトで見ることが出来る。

<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1111/>（上編）

<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1112/>（下編）

<sup>243</sup> 「文明無止境説」上編にある。

<sup>244</sup> 「文明無止境説」下編にある

<sup>245</sup> 『文明新学策』は、著者も発行年も不明で、原文は漢文である。この文献は民智啓蒙、新学奨励を提唱するものである。

解釈であり、五言、四字句、六字句の詩である。それが教育において、我々を他国の人々から区別する材料である」<sup>246</sup>と述べ、古色蒼然たるものとして否定的に扱っている。一方で同書は、民衆の文化と知識を開発する 6 つの方法の 1 つとして工芸の発展を挙げる。まず、自分たちの技術が発展していないのは、それを改善する方法を知らないからであるとする。そして、工芸は国家にとって最も本質的な要素なので、立派な教師を採用し、モデルとして立派な製品を購入し、手先が器用で理解が早いものを選んで学校に行かせるべきとする。要するに、技術教育という実学のすすめである。さらに、全国で誰かが新製品を発明したら、欧州のようにお祝いの賞状を与え、名誉官吏の称号で評価し、報酬を与え、発明は特許で守られるべきであると述べるのである<sup>247</sup>。

さらに、トンキン義塾の塾長ルオン・ヴァン・カン「商業の盛衰は国民の盛衰と関係する」との考えから、ベトナムにおける初めての商学の本『商学方針』を執筆した。彼によるとベトナムの商業が発展していない原因は 10 点あるという。つまり、①商品がない、②商会がない、③信用がない、④我慢が足りない、⑤バイタリティーがない、⑥職業を重んじることを知らない、⑦商学がない、⑧交渉がない、⑨節約を知らない、⑩国産品を軽視する、の 10 点である。そして商学、商徳、商才を持つ必要があると説いている。儒学を重視したそれまでの時代とは一線を画する考え方といってよからう<sup>248</sup>。

以上からすると、ベトナム知識人における実学とは、西洋の科学技術を中心とした実業・工業の学問が中心だったと考えられる。

次に、ベトナム知識人たちが上記の実学観にしたがって、どのような実践活動を行ったかを見てみる。20 世紀初頭に様々な新しい形の学校がベトナム各地に設立された。トンキンには真っ先にドンキン義塾が作られ、そこでは文学、歴史、数学、自然科学などを教えた。（ドンキン義塾の具体的な活動については第三部第三章を参照。）アンナンでは様々な学会が設立された。学会とはタンホック（新学：Tan hoc）によって教育する学校組織のことである。タンホック＝新学とは、欧米の学術知識のことで、旧学に代わって新学を教育し、ローマ字表記化されたベトナム語（クオック・グ）及びフランス語による教育を主張し、新しい思想及び実学を教えることを主張するものであった。学会における具体的な教育としては、歴史、地理、クオック・グ、フランス語、数学、科学、美術、体操、音楽などがあった。教室において黒板を用い、教え方にも新たなスタイルが導入された<sup>249</sup>。

こうしたベトナムの実学教育を推進した中心人物であるファン・チャウ・チンと日本の福沢諭吉が作った慶応義塾との間には、接点があったと推定されている。1906 年初春にフ

<sup>246</sup> Chuong Thau, (ed), *Dong Kinh nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, tap 1, NXB Ha Noi, 2010, p. 180  
日本語訳は、橋本和孝「東遊運動から東京義塾へ—『文明新学策』を中心として」、p.123 を使用した。  
この論文の閲覧には以下のサイトを使用した。

<http://publications.nichibun.ac.jp/ja/item/symp/2015-03-31-1/pub>

<sup>247</sup> Chuong Thau (ed), *Dong Kinh nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, tap 1, NXB Ha Noi, 2010, p. 188  
前掲橋本論文、p.125 の日本語訳を参考に要約した。

<sup>248</sup> Luong Van Can, *Thuong hoc phuong cham*, Nha in Thu Ky, Ha Noi, 1928

<sup>249</sup> 白石昌也「ファン・チュ・チン—ベトナム近代教育の提唱者」、阿部洋編集『現代に生きる教育思想 第 8 巻 アジア』、ぎょうせい、1981、p. 295

アン・ボイ・チャウはファン・チャウ・チンを伴って、学校を参観、日本の学校教育を視察した<sup>250</sup>。この東京の学校の中に慶応義塾が含まれていたかどうかは定かではないが、少なくともファン・チャウ・チンの滞在中にそこを訪問したと考えるのは、彼がベトナムへ帰った後にドンキン義塾を開塾したという事実からして自然であると指摘されている<sup>251</sup>。この件は『年表』に、

4月上旬、僕（ファン・ボイ・チャウ）は入学許可を得た4名の少年を東京へ連れていき、そのうち3人は振武学校で軍備知識を勉強し、1人は同文書院に入学した。この時期に僕はファン・チャウ・チンを伴って、学校を参観、日本の学校教育を視察した。この視察の際、ファン・チャウ・チンは僕に、現在日本の国民のレベルはとても高く、ベトナムのレベルはとても低い。我々が奴隷にならない方法はあるのだろうか。日本の学校に入学した何人かの学生は、多大な達成を示してきた。<sup>252</sup>

と述べられている。この参観・視察した日本の学校のなかに慶応義塾が含まれると考えられているのである。

福沢諭吉の実学観とベトナム知識人の実学観を比較すると、多少重なる部分があるように思う。福沢諭吉もベトナム知識人も、日本、ベトナムが近代化するためには、欧州文明を学ぶ必要があると考え、それを象徴するものが実学であった。福沢諭吉もベトナム知識人も、実学というのは算数、歴史、自然科学などの欧州における普通の知識を勉強することであり、必ずしも今でいうすぐに役に立つという意味での実学ではなかった。さらに、20世紀初頭におけるベトナム知識人たちが提唱した実学は、義塾運動のなかで広められ、学校の知識を生活の場で運用していこうとするものであった。この点も慶応義塾の方法と類似している。また、彼らは実学をもとにした実業を重んじ、『国民読本』の中で「実業が発展すればするほど国が豊かになる」<sup>253</sup>と述べている。

このようにベトナムにおける実学は、日本の実学の影響を受けていると思われるが、そうした実学を教える日本の教育、特に福沢諭吉の慶応義塾をモデルにベトナムでも実学教育が行われたと見られている。その実態については、第三章で検討するが、その前に、第二章で当時の慶応義塾とはどのような学校であったかを検討する。

<sup>250</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap.*, Tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.158

<sup>251</sup> Vinh Sinh (ed), *Phan Chau Trinh and His political Writings*, Cornell Univeristy, New York, 2009, p. 18

<sup>252</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap.*, Tap 6, NXB Thuan Hoa va Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.158

<sup>253</sup> 「我国振宜興寔業」 <http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1112/page/26>（下編）

## 第二章 明治期における慶應義塾史概説

福沢諭吉の実学観は単なる思想にとどまるものではなく、この実学思想に基づいて慶應義塾が運営された。福沢諭吉の実学思想の有効性は明治期慶應義塾の運営をもって証明されたといえるので、具体的に慶應義塾のあり方をこの章で検討しておきたい。

### 第一節 草創期の慶應義塾

#### (1) 慶應義塾の起源

安政2年(1855)、福沢諭吉は大阪で緒方洪庵<sup>254</sup>の適塾に入り、約3年間、蘭学を学んだ。適塾は医学塾ではあったが、彼は医学よりもオランダ語の原書を読むのに熱心で、その記述をもとに化学実験・理科実験などを繰り返した。彼はその俊英ぶりが認められ、わずか22歳の若さで適塾の塾頭にまでなった。

安政5年(1858)の冬、福沢諭吉は江戸出府を命じられ、中津藩奥平家の江戸中屋敷内に開かれていた蘭学所の講師となる。これが慶應義塾の起源である。場所は江戸の築地鉄砲洲<sup>255</sup>にあった。開塾については、『福翁自伝』の中で、

同年江戸の奥平の邸から、「御用があるから来い」といって、私を呼びに来た。それは江戸の邸に岡見彦曹という蘭学好きの人があって、この人は立派な身分のある士族で、どうかして江戸の藩邸に蘭学の塾を開きたいというので、様々に周旋して、書生を集めて原書を読む世話をしていた。ところで奥平家が私をその教師に使うので、そのまえ、松木弘安、杉亨二というような学者を雇っていたようなわけで、私が大阪にいたということが分かったものだから、他国の者を雇うことはない、藩中にある福沢を呼べということになって、ソレで私を呼びに来たので、そのとき江戸詰めの家老には奥平壱岐が来ている。<sup>256</sup>

と述べている。福沢は、同窓のなかから同行を希望した岡本周吉（のち岡本節蔵・古川節蔵・古川正雄と改名）、原田磊蔵を伴い、3人で中屋敷に行った。まず、塾に藩の子弟が3

<sup>254</sup> 加藤三明「慶應義塾史跡めぐり（第29回）適塾と緒方洪庵」『三田評論』1117号、2008、pp.60-63。

この論文の閲覧には以下のサイトを使用した。

[https://www.keio-up.co.jp/mita/r-shiseki/s0811\\_1.html#story](https://www.keio-up.co.jp/mita/r-shiseki/s0811_1.html#story)

緒方洪庵は、文化7(1810)年、備中足守藩の下士の三男として足守植之町で生まれた。現在、岡山県岡山市足守の県指定史跡洪庵生誕地跡には、「洪庵緒方先生碑」「産湯の井」、そして生誕180周年記念として平成2年に建てられた「緒方洪庵先生之像」がある。昭和2年に建てられた「洪庵緒方先生碑」の下には、洪庵の臍の緒、元服の遺髪が埋められているという。文政8(1825)年、父の大阪蔵屋敷転勤に伴って上阪。体が弱く、武士に適さないと感じた洪庵は、万人を救済する道としての医を志し、蘭方医中天游の思々齋塾の門に入った。さらに江戸で坪井信道、宇田川玄真に師事、長崎留学を経た後、天保9(1838)年春、大阪の瓦町（現瓦町4丁目）で医業を開業すると共に、蘭学塾「適塾」を開く。開業の2年後、天保11年の大阪の医者番付で、早くも前頭4枚目になっているように、彼の名声は広がり、塾生も多数となったため、弘化2(1845)年12月、過書（かしよ）町（現中央区北浜3丁目）の商家を購入し、移転した。この時の建物が現存し、「旧緒方洪庵住宅」として重要文化財に指定され、大阪大学が管理している。

<sup>255</sup> 現在の東京都中央区明石町の一部で、いま聖路加国際病院のあるあたりがちょうどその位置にあたるといわれ、そこには昭和33年(1958)4月23日、義塾創立百年記念事業の1つとして、「慶應義塾発祥の地記念碑」が建てられた。

<sup>256</sup> 福沢諭吉『福翁自伝』講談社学術文庫、2010、p.104

人、5人と学びにくるようになり、また、他藩からも5人、6人来る者があった。それらの子弟に教授をして、この時期には岡本が塾長を担当した。ここに一小家塾の体裁を成したのである<sup>257</sup>。塾は最初は2階建長屋の1戸で、階下には6畳の部屋に、畳が3畳しかなくて、2畳を福沢が占めて机を置き、残りの1畳に門下の書生がおり、2階は15畳ばかりの広さで、そこに塾生が寝泊まりしていたという<sup>258</sup>。この塾では初め蘭学を教えていたが、のちに英書を講義するようになった。この塾には正式な名前がなく、福沢塾と呼ばれていた。福沢塾創設から慶応義塾と命名されるまでの10年間は、いわば慶応義塾の草創期である。

慶応3年に福沢塾は鉄砲洲から芝新銭座に移転した。移転前、鉄砲洲の塾は塾生が増加したために狭隘となったばかりではなく、外国人居留地の予定地になっていた。新銭座に移転して、その塾舎の規模を大にし、学塾の組織を新たにして、近代学塾としての基礎を置いたときの年号をとって「慶應義塾」と命名することになった<sup>259</sup>。『慶應義塾之記』には「吾党の士相与に謀て、私に彼の共立学校の制に倣ひ、一小区の学舎を設け、これを創立の年号を取て仮に慶應義塾と名く」<sup>260</sup>と述べられているが、これより今日まで「慶應義塾」の名が用いられている。

ここで「義塾」の意味を確認しておきたい。『慶応義塾百年史』上巻の慶應義塾の命名について説明した個所には、

「義塾」という語の中国における本来の語義は、公衆のため義捐の金をもって経営する学塾で、学費を収めないものをいう。(中略)ところが、福沢が「義塾」なる語に盛った内容、「彼の共立学校の制」とは、イギリスのパブリック・スクールの組織であろうと推定されるが(中略)要するに、中国伝来の「義塾」なる皮袋に、英国の近代私立学校という新しい酒を盛ったものである。<sup>261</sup>

と述べられている。つまり、彼はイギリスのパブリック・スクール(私立の中等教育学校で、エリート校)の訳語として義塾を採用したのである。それゆえ、塾には古い中国風の儒学的教育機関としての学塾、慶應義塾に始まる新しい近代的私立学校としての義塾の2種類があることになったのである。

なお、『慶應義塾豆百科』には、「日本国内にとどまらず外国にも設立されており、特にベトナムの3校(玉川義塾・ドキン(東京)義塾・マイラム(梅林)義塾)は注目される」<sup>262</sup>と述べられており、慶応義塾関係者は、ベトナムで「義塾」という名の学校が生まれたことに注目している。

<sup>257</sup> 慶応義塾『慶応義塾百年史』上巻、慶応義塾出版社、1958、p.22.

<sup>258</sup> 慶応義塾『図説・慶応義塾百年小史—1858-1958』慶応義塾、1958、p.3

<sup>259</sup> 慶応義塾『慶応義塾百年史』上巻、慶応義塾出版社、1958、pp.243-244

<sup>260</sup> 慶應義塾『慶應義塾豆百科』No.8「義塾」という名のおこり(閲覧日2016年3月14日)

<http://www.keio.ac.jp/ja/contents/mamehyakka/8.html>

<sup>261</sup> 慶応義塾『慶応義塾百年史』上巻、慶応義塾出版社、1958、p.245

<sup>262</sup> 慶應義塾『慶應義塾豆百科』No.8「義塾」という名のおこり(閲覧日2016年3月14日)

<http://www.keio.ac.jp/ja/contents/mamehyakka/8.html>

以上、慶應義塾の起原と校名の意味を確認した。次に慶應義塾が設立された目的を明らかにする。

## (2) 慶應義塾設立の目的

福沢諭吉は「慶應義塾の目的」という文章で、

慶應義塾は単に一所の学塾として自から甘んずるを得ず。その目的は、我が日本国中における気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、これを実際にしては、居家処世立国の本旨を明らかにして、これを口に言うのみにあらず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり。<sup>263</sup>

(塾は単に一時期身を置くだけの通過点ではない。その目的は日本にとって、気品の泉源、智恵や徳義の模範となることであると見定め、そのためには家庭や社会、あるいは国がどうあるべきかを具体的に明らかにしていきたい。そして議論するだけではなく、我々が身をもってその理想を実践することによって、全社会の先導者、すなわちリーダーを目指していくものである。)<sup>264</sup>

と述べている。また福沢は、『学問のすすめ』の中で「その期するところは全国の独立を維持するの一事に在り」<sup>265</sup>と述べている。福沢にとって独立の精神とは文明の精神でもあり、義塾社中はその先導者だと考えていたのである。この目的を達成するために、福沢諭吉は、明治期に西洋の教育の基本理念と考えられていた体育・智育・徳育に注目した。

体育については「人間の教育は知識一方のみに偏す可らず、身体を運動して筋骨を発達せしむることも亦甚だ大切なりとは、毎度時事新報に論述せし所」<sup>266</sup>と主張し、学校で体操の授業を行った。慶應義塾幼稚舎では、全学年、週に3時間体操の授業が行われた<sup>267</sup>。また、慶應義塾には多くのスポーツクラブがあった。中学校、商工学校の生徒はテニス、バスケットボールなどに参加した<sup>268</sup>。

智育と徳育については、

智恵と徳義とは恰も人の心を両断して各其一方を支配するものなれば、孰れを重しと為し孰れを軽しと為すの理なし。二者を兼備するに非ざれば之を十全の人類と云ふ可らず。<sup>269</sup>

<sup>263</sup> 慶應義塾普通部 学校案内 慶應義塾の目的 (閲覧日 2016 年 3 月 17 日)

<http://www.kf.keio.ac.jp/mokuteki.pdf>

この文章は、明治 29 (1896) 年 11 月 1 日に芝紅会館で開かれた慶應義塾旧友会での演説での結論である。

<sup>264</sup> この現代語訳は『慶應義塾大学ガイドブック 2015』p.12、による。なお、このガイドブックは慶應義塾大学のホームページでデジタル版を閲覧することができるが、2016 年 3 月時点で公開されているのは 2016 年版のみであり、同じ文章が確認できる。

<sup>265</sup> 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995、p.52

<sup>266</sup> 田中克佳「福沢諭吉の教育論考」『近代日本研究』2、1985、p.472

<sup>267</sup> 『慶應義塾之現況』慶應義塾、1911、p.18

<sup>268</sup> *The Keio Gijuku University A brief account of its History Aims and equipment*, The Keio University, Tokyo 1912, pp.47-48

<sup>269</sup> 福沢諭吉「文明論之概略」『福沢全集』巻3、時事新報社、1898。この文章の解釈は、田中克佳「福沢



智徳の両者は人間欠くべからざるものにて、智恵あり道德の心あらざる者は禽獸に齊く、之を人非人と云ふ。又徳義のみを脩めて智徳の働あらざる者は石の地藏に齊く、之れ亦人にして人にあらざる者なり。両者の其に欠くべからざるは右の如くなり。<sup>270</sup>と述べ、智育・徳育は、兼備しなければ人間ではないというほどに重視している。

福沢諭吉は慶応義塾を設立する時に、慶応義塾のスピリットを表し、それは今日まで存続している。その慶応義塾のスピリットとは「独立自尊、実学、半学半教」の3点をである。

まず、「独立自尊」とは、『修身要領』に「心身の独立を全うし、自らのその身を尊重して人たるの品位を辱めざるもの、之を独立自尊の人と云う」<sup>271</sup>とあるように、自他の尊厳を守り、何事も自分の判断・責任のもとに行うことを意味するもので、慶應義塾の基本精神である。

次に、ここでいう「実学」というのは日常の役に立つ学問ではなく、科学（福沢はサイヤンスと呼ぶ）を目指すものである。それは、単なる科学技術ではなく、社会で実践される学問、実証的に真理を解明し問題を解決していくものであるとされる。

また、「半学半教」というのは教える者と学ぶ者との師弟の分を定めず、教員も学生も互いに教え、学び続けなくてはならないとするものである<sup>272</sup>。

以上みてきたように、福沢の慶応義塾設立の目的は、西洋文明の精神を「実学」として教育する点にあり、それゆえに体育・智育・徳育が重視され、建学のスピリットにも明記されたのである。

## 第二節 明治期における慶應義塾の活動

### (1) 塾生と塾舎

慶応義塾は学校の場所を4回移転した。1858年初めに始まった義塾最初の塾舎は、江戸鉄砲洲の中津藩奥平家中屋敷の長屋の1軒である。この中屋敷は「天和元年（1681）7月9日に徳川家から下賜されたもので、その面積は川手東70間半、表門通り南北81間半、北東の角榊原邸に接する処南北52間2尺東西38間、表門通り道幅5間1尺6寸、元来表門通り北側道幅3間半、総坪数4162坪6合6勺である」（中津藩史）<sup>273</sup>。鉄砲洲初期の塾生については、『福翁自伝』の中で、

私が江戸に参て鉄砲洲の奥平中屋敷に住んで居ると云ふ中に、藩中の子弟が3人5人ずつ学びに来るようになり、また他から5、6人も来るものが出来たので、その子弟に教授していたが（後略）<sup>274</sup>

と述べられている。塾生の中で名前が明確なのは岡本周吉と足立寛だけだが、それ以外に

---

諭吉の教育論考『近代日本研究』2、1985、p.473を参考にした。

<sup>270</sup> 福沢諭吉「文明教育論」『福沢諭吉教育論集』、岩波文庫、1991、p.133

<sup>271</sup> 『慶應義塾大学ガイドブック2015』p.13

<sup>272</sup> この3点のスピリットの解釈は、『慶應義塾大学ガイドブック2015』p.13を参考にした。

<sup>273</sup> 『慶應義塾百年史』上巻、慶應義塾出版社、1958、p.202

<sup>274</sup> 福沢諭吉『福翁自伝』講談社学術文庫、2010、p.106

も藩士の子弟が次々と弟子になったのである。しかし、鉄砲洲時代の塾舎は狭いため、あまり多くの学生を収容し得なかったであろう。

文久元年（1861）、塾は芝新銭座（現在の東京都港区浜松町）へ移転した。『慶應義塾百年史』では移転の理由について「中津藩士福地宜一の談話によると、福沢が幕府に出仕することになったため、長屋住まいでは不都合だったので一家を借りたものであり、別段洋学者にたいする暗殺など身の危険のおそれがあったためではない。結婚の都合も多少あったであろうが、主因はやはり幕府出仕のために長屋住まいでは不都合だという点にある」<sup>275</sup>としている。文久3年（1863）、塾は奥平家中屋敷へ戻った。参勤交替制度の緩和による江戸詰め藩士の減少を機に、義塾の発展を意図して以前より広いスペースを確保した。慶応4年（1868）再び新銭座へ移転した。この年に幕府の政策によって、鉄砲洲一帯の海岸地が外国人居留地となったため、奥平家中屋敷を引き払わなければならなくなり、芝新銭座の有馬家中屋敷の一部（現在の東京都港区浜松町1丁目、神明小学校あたり）を買い取ることになった。幕末の騒然とした時代で、「八百八町只の一軒も普請する家」はなく、新塾舎も平時より安価で建築したという。とはいえ、福沢は私財を投げ打ち、かなりの金額を苦勞して集めたのも事実である。しかし、これによって財政的にも中津藩の家塾的性格を脱し、晴れて義塾は同志の結社たる近代私学として、新たに発足することとなるのである。

1863年から1870年まで、塾生の数は以下の表9のように増加した。

**表9：慶應義塾の塾生数の推移**

（出典：『慶應義塾百年史』、慶應義塾出版社、pp.218－230）

年・月	入塾生の数	累計
文久3年（1863）1月	0	0
文久3年（1863）2月	0	0
文久3年（1863）3月	1	1
文久3年（1863）4月	2	3
文久3年（1863）5月	0	3
文久3年（1863）6月	3	6
文久3年（1863）7月	0	6
文久3年（1863）8月	0	6
文久3年（1863）9月	0	6
文久3年（1863）10月	0	6
文久3年（1863）11月	2	8
文久3年（1863）12月	1	9

<sup>275</sup> 『慶應義塾百年史』上巻、慶應義塾出版社、1958、p.203

元治元年（1864）1 月	0	9
元治元年（1864）2 月	2	11
元治元年（1864）3 月	8	19
元治元年（1864）4 月	0	19
元治元年（1864）5 月	0	19
元治元年（1864）6 月	8	27
元治元年（1864）7 月	3	30
元治元年（1864）8 月	0	30
元治元年（1864）9 月	6	36
元治元年（1864）10 月	2	38
元治元年（1864）11 月	6	44
元治元年（1864）12 月	0	44
慶応元年（1865）1 月	3	47
慶応元年（1865）2 月	4	51
慶応元年（1865）3 月	4	55
慶応元年（1865）4 月	10	65
慶応元年（1865）5 月	6	71
慶応元年（1865）閏 5 月	4	75
慶応元年（1865）6 月	5	80
慶応元年（1865）7 月	3	83
慶応元年（1865）8 月	5	88
慶応元年（1865）9 月	4	92
慶応元年（1865）10 月	2	94
慶応元年（1865）11 月	7	101
慶応元年（1865）12 月	0	101
慶応 2 年（1866）1 月	4	105
慶応 2 年（1866）2 月	3	108
慶応 2 年（1866）3 月	4	112
慶応 2 年（1866）4 月	10	122
慶応 2 年（1866）5 月	2	124
慶応 2 年（1866）6 月	2	126
慶応 2 年（1866）7 月	3	129
慶応 2 年（1866）8 月	4	133
慶応 2 年（1866）9 月	6	139
慶応 2 年（1866）10 月	5	144

慶応2年(1866) 11月	20	164
慶応2年(1866) 12月	5	169
慶応3年(1867) 1月	6	175
慶応3年(1867) 2月	11	186
慶応3年(1867) 3月	10	196
慶応3年(1867) 4月	13	209
慶応3年(1867) 5月	7	216
慶応3年(1867) 6月	6	222
慶応3年(1867) 7月	6	228
慶応3年(1867) 8月	11	239
慶応3年(1867) 9月	5	244
慶応3年(1867) 10月	2	246
慶応3年(1867) 11月	4	250
慶応3年(1867) 12月	5	255
慶応4年(1868) 1月	3	258
慶応4年(1868) 2月	1	259

明治4年(1871))、塾は三田に移動した。明治7年(1874)には幼稚舎が設立され、明治23年(1890)には塾内に簡単な商工夜学校を付設、明治38年(1905)には商工学校を付設した。また、明治23年(1890)には大学部を新設した。この大学部は予科と本科を含むもので、当時の慶応は予科2年、本科3年の課程であり、本科は理財科、法律科、文学科で構成されていた。明治30年(1897)には政治科を加えて、学事系統を確定し、さらに明治31年(1898)の学内学制改革によって幼稚舎から大学部までの一貫教育制度が確立した。また、慶応義塾分校も設立された。明治6年(1873)、慶応義塾の大阪慶応義塾分校が設けられた。この分校は明治8年(1875)まで86名の入門者があったが、その中にはのちに明治文壇において名翻訳家として知られた森田思軒<sup>276</sup>がいた。明治8年(1875)7月、都合により四国の徳島<sup>277</sup>に移転した。また、明治7年(1874)、京都慶応義塾分校が設立された。

20世紀初頭、慶応義塾の塾生の数は増加し続けた。『慶應義塾百年史』に掲載されている『慶応義塾学事及会計報告』の記載によって作成したのが以下の表10である。

<sup>276</sup> 森田思軒(1861―1897)は本名・文蔵、岡山の生まれ。ヴェルヌの『十五少年』、『鉄世界』、『天外異譚』、『煙波の裏』などを日本語に翻訳した。

<sup>277</sup> 徳島慶応義塾分校の場所は、設立願の書類を見ると、「第三大学区名東県管下第一大区五小区名東郡富田浦三番地」と述べられている。富田浦は現在の徳島市の中心市街地の南部に当たる。1876年(明治9)11月でこの学校も閉鎖された。「慶応義塾設立分塾願」で、『慶應義塾百年史』上巻、p. 538

表10：慶応義塾の塾生数（1903－1912）

	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912
理財科	177	228	303	410	553	660	835	907	987	1034
法律科	38	53	59	56	45	44	67	81	82	81
文学科	—	4	9	10	11	17	17	19	20	14
政治科	34	38	45	34	45	46	50	45	49	48
予科	433	570	637	744	941	1065	1082	1157	1193	1223
大 学 部 計 (A)	682	893	1053	1254	1595	1832	2051	2209	2331	2400
学目他 (B)	2205	2426	2617	3029	3535	3891	4128	4235	4366	4691
A/B (%)	30,9	36,8	40,2	41.4	45.1	47.1	49.9	52.2	53.4	51.2

※学目他の塾生には普通科、幼稚舎、商業学校、商工学校の学生数も含む

この表を見ると、塾生数は理財科と予科で多く、理財科は10年間（1903年から1912年まで）で177人から1,034人（5.8倍）にも増加した。学目他の塾生数に占める大学部学生数の割合（A/B）も30.9%から51.2%へと増加し、大学部学生数の比重が高まっていったことがわかる。

## （2）慶応義塾のカリキュラム

明治期における慶応義塾の教育課程、教科書、学費などについて検討する。

まず、当時の慶応の教育課程は幼稚舎から大学部まで確立されていた。幼稚舎は普通小学科の程度により幼年子弟の心身を健全に発達させることを目的に、教育を与えるものである。その修業年限は6年間で、卒業者は無試験にて義塾普通部第1学年に入学する。この幼稚舎の授業科目と授業時間数を表11に示す。

表11を見ると、外国語（英語）の授業時間が1年から6年まで順次増加している。また、幼稚舎では6年を通して週3時間体操の授業が行われており、これには「慶応義塾の目的」が反映されている。

表 11：幼稚園の授業科目及び 1 週間の授業時間数一覧<sup>278</sup>

科目 学年	修身	国語	英語	算術	日本史 日本地理	理科	図工	唱歌	体操	合計
1	2	9	1	5	0	0	1	2	3	23
2	2	10	2	5	0	0	1	2	3	25
3	2	10	3	6	0	0	1	2	3	27
4	2	10	3	6	0	0	1	2	3	27
5	1	9	4	4	3	2	1	1	3	28
6	1	9	4	4	3	2	1	1	3	28

次の普通部は中学の課程にあたり、修業年限は 5 年間である。この普通部の授業科目と授業時間数を表 12 に示す。

表 12：普通部の授業科目及び 1 週間の授業時間数一覧<sup>279</sup>

科目 学年	修身	国文	漢文	英語	日本地理	外国地理	日本歴史	西洋史	東洋史	算術	代数	幾何	三角法	植物学	動物学	生理学	自然地理	物理学	化学	鉱物学	習字	図画	体操・軍事教練
1	1	4	2	3	2		2			4											1	1	3
2	1	4	2	8		2	2			4				2							1	1	3
3	1	4	2	9		1	2	2			3	3			2							1	3
4	1	2	2	9				2			3	2				2		2	2			1	3
5	1	2	1	9					2			2	3				2	3	3				3

次に入るのが大学部で、当時の大学部の修業年間は 5 年、最初の 2 年を予科で次の 3 年を本科で学んだ。まず予科の教育課程を、明治 36 年（1903）と大正 2 年（1913）を比較できるように記載したのが表 13 である。

この表で 1903 年と 1912 年の予科の授業科目と授業時間数を比較すると、週あたりの授業時間が、語学科目の時間増と「倫理」の設置により、1 年次合計で 2 時間、2 年次合計で 3 時間増加している。

<sup>278</sup> The Keio Gijuku University A brief account of its History Aims and equipment, The Keio University, Tokyo 1912, pp. 21 - 22

<sup>279</sup> The Keio Gijuku University A brief account of its History Aims and equipment, The Keio University, Tokyo 1912, pp. 23 - 24

表 13：予科の教育課程<sup>280</sup>

1 年時			2 年時		
	1903 年	1912 年		1903 年	1912 年
授業科目名	週時間数	週時間数	授業科目名	週時間数	週時間数
英語	10	10	英語	6	10
ドイツ語・フランス語	3	4	ドイツ語・フランス語	3	3
歴史	3	3	歴史	2	2
地理	2	2	心理倫理又は数学	2	2
論理	2	2	経済学原理	5	3
漢文	2	2	法学通論	3	3
数学	2	2	簿記	2	2
日本作文	—	—	日本作文	—	—
倫理	—	1	倫理	—	1
合計	24	26	合計	23	26

大学部の本科では様々な科目の授業が行われた。たとえば、本科文学科文学専攻では塾生は外国語・外国文学（英語、英文学、フランス語、フランス文学、ドイツ語、ドイツ文学を含む）、漢文、哲学などを学んだ。

表 14：本科文学科文学の授業科目及び 1 週間の授業時間数一覧<sup>281</sup>

科 目 学 年	英語、 英文学	仏語・仏文学 もしくは 独語・独文学	国 古 文、 国 文 学 史	漢 文、 漢 文 学 史	哲 学 概 論	芸 術 史	近 代 文 学 評 論	現 代 社 会 問 題	心 理 学	教 育 学 原 理	教 授 法、 教 授 演 習	卒 業 論 文	合 計
1	10	6	2	3		2			3				26
2	10	6	2	2	2		2			2			26
3	10	6		2			2	2			3		25

<sup>280</sup> The Keio Gijuku University A brief account of its History Aims and equipment, The Keio University, Tokyo 1912  
慶応義塾慶応義塾『慶応義塾百年史（中巻（前））』慶応義塾、1960

<sup>281</sup> The Keio Gijuku University A brief account of its History Aims and equipment, The Keio University, Tokyo 1912,  
pp. 35 – 36

このように、明治期慶應義塾の教育課程は幼稚舎から大学部まで段階的に発展するように組まれていた。慶應義塾では外国語と外国に関する知識を中心に教育が行われており、そのため、慶應の塾生は世界に関する知識を深めることができた。当時慶應義塾では様々な教科書が使用され、外国語の教科書も用いられた<sup>282</sup>。

また、慶應義塾は日本の塾で初めて授業料の制度を始めた。それまでは一般に入門の時に束脩を納め、その後はお盆に生徒の分に応じて品物か金子を先生に呈上する習慣であったが、人を教育することは正当な働きであるから、これに報酬を受けることは当然のことと考えたのである。このことについて、福沢は『福翁自伝』の中で、

塾が盛んになって生徒が多くなれば塾舎の取締りも必要になるからして、塾則のようなものを書いて、これも写本は手間が取れるというので版本にして、一冊ずつ生徒に渡し、ソレには色々箇条のある中に、生徒から毎月金を取るということも慶應義塾が創めた新案である。従前日本の私塾では支那風を真似たのか、生徒入学の時には束脩を納めて、授業する人を先生と仰ぎ奉り、入学の後も盆暮両度ぐらいに生徒銘々の分に応じて金子なり品物なり熨斗をつけて先生家に進上する習わしでありしが、私どもの考えに、とてもこんな事では活潑に働く者はない、教授もやはり人間の仕事だ、人間が人間の仕事をして金を取るに何の不都合がある、構うことはないから公然価をきめて取るがよいというので、授業料という名を作って、生徒一人から毎月金 2 分ずつ取り立て、その生徒には塾中の先進生が教えることにしました。<sup>283</sup>

と述べている。以下の表 15 は、20 世紀初頭の慶應義塾の各教育機関の授業料についてまとめたものである。

表 15：慶應義塾授業料<sup>284</sup>

	大学部生 年費	普通部（中学）生 年費	商工学校生 年費	商業晩学校生 月費	幼稚舎生 年費
授業料	48 円	36 円	36 円	1.6 円	36 円

このように、明治期の慶應義塾は日本の最も代表的な近代学校であった。これを踏まえ、次にドンキン義塾と義塾運動が、慶應義塾からどのような影響を受けたかを分析していきたい。

<sup>282</sup> 慶應義塾編『図説・慶應義塾百年小史：1858-1958』慶應義塾、1958

<sup>283</sup> 福沢諭吉『福翁自伝』講談社学術文庫、2010、p.218

<sup>284</sup> *The Keio Gijuku University A brief account of its History Aims and equipment*, The Keio University, Tokyo 1912, p.50



### 第三章 ベトナムにおけるドンキン（東京）義塾の設立と義塾運動の発展

この章では、ドンキン義塾と義塾運動の具体的な活動を明らかにし、そのなかでそれらと慶応義塾との関係を明らかにしていきたい。

#### 第一節 ドンキン（東京）義塾の活動

##### (1) 開塾目的

ドンキン義塾がどのように設立されたのかを資料から分析する。

まず、義塾の設立計画について検討したい。ファン・ボイ・チャウは『年表』の中で、4月上旬、僕（ファン・ボイ・チャウ）は入学許可を得た4名の少年を東京へ連れていき、そのうち3人は振武学校で軍備知識を勉強し、1人は同文書院に入学した。この時期に僕はファン・チャウ・チンを伴って、学校を参観、日本の学校教育を視察した。<sup>285</sup>と述べている。この東京で参観した学校の中に慶應義塾が含まれていたかどうかは定かではないが、先述したように、少なくともファン・チャウ・チン滞在中に慶応義塾を訪問したと考えるのは、後のドンキン義塾開塾という事実からして自然であるという指摘がされており、それはほぼ定説化している。そして、『年表』によれば、視察の際にファン・チャウ・チンはファン・ボイ・チャウに、

現在日本の国民のレベルはとても高く、ベトナムのレベルはとても低い。我々が奴隷にならない方法はあるのだろうか。日本の学校に入学した何人かの学生は、多大な達成を示してきた。<sup>286</sup>

と呼びかけたという。この件はファン・ボイ・チャウの『獄中記』の中でも、

私は国内の状況も知りたく、かつは会主を迎えようと思って、二月下旬香港に帰り、そこでまた国から来た潘周楨君にも会いました。潘君のこの行は、やはり日本国の状況視察を志したのであったので、すなわち私は会主達とともに東渡して横浜に来たのは、すでに四月下旬でありました。私は潘君を案内して東京の各学校や諸名所を巡覧し、名士にも会談し、すでに数旬であった時、同君がいうのに、「日本国の民智を見てこれをわが国民に比ぶれば、実に雛鶏と大鷹の違いがある。大兄は今ここにあって、どうぞ力を、蒙を啓き愚民を指導するの文字の著作に努められたい。国内にあって子弟を開導することは、自分がこれに当ろう。自分の舌が動く間、フランス人は、これを如何ともなし得ないであります」と。<sup>287</sup>

と述べられている。

また、1956年にドンキン義塾の最初の研究書として刊行されたグエン・ヒエン・レの『ド

<sup>285</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.158

<sup>286</sup> Chuong Thau (ed) , “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, p.158

<sup>287</sup> 南十字星訳「獄中記」、潘佩珠著；長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』平凡社、1966、pp.132-133

ンキン義塾』は、ドンキン義塾の設立計画について次のように言及する。

サオナム（ファン・ボイ・チャウ）はファン・チャウ・チンが日本から帰国すると『海外血書』を渡した。ファン・チャウ・チンはハノイに行き、ルオン・ヴァン・カン（Luong Van Can）を訪問した。チンは日本の現状について述べた。2人の相談の内容は、義塾を設立するにあたって慶應義塾を模倣する。義塾設立の目的は民智を開き、人材を培養することである。<sup>288</sup>

このグエン・ヒエン・レの記述からすると、ドンキン義塾の設立計画に、ファン・ボイ・チャウは関係していたように読めるが、はたしてそうなのであろうか。

1906年秋、ファン・ボイ・チャウは2度目の非合法的な再入国を果たしたが、その際、バクニン（Bac Ninh）省のノイズエ（Noi Due）で同志たちともった秘密の会合で、新しい形式の学校をベトナムに設けるという案について具体的に相談し、ドンズー運動を支援し、当時すでにアンナンやコーチナで起こっていた近代化運動ともいべき「維新運動」<sup>289</sup>に連帯することを決定した<sup>290</sup>。これについて記す『年表』の記事は次のとおりである。

僕（ファン・ボイ・チャウ）はダン・ヴァン・バ（Dang Van Ba）とともにバクニン省、ノイズエ社に住む同志の家を訪問した。中部と北部在住の同志（例えばグハイ（魚海：Ngu Hai）、ジャッタチュック（逸竹：Dat Truc）（中略）が集まり、革命進行の対策を協議、組織を和平派と激烈派の2つに分け、和平派は学校、演説、宣伝に集中する、資金を募集する、激烈派は軍隊運動、武装準備に注力するとした。和平派と激烈派の連絡は、北部はヴォ・ハイ・トウ（武海秋：Vo Hai Thu）、中部はダン・トウ・キンが分担、グハイが両派の間を周旋することを担当した。（中略）。1907年から1909年までの3年間に、まずハノイにドンキン義塾が設立され、続いて商会、学会がクアンナム、クインガイに続々誕生した。<sup>291</sup>

つまり、『年表』は、ファン・ボイ・チャウがトンキン・アンナンの同志のうちの和平派に、学校設立を託し、その結果としてドンキン義塾が生まれたと述べているのである。グエン・ヒエン・レの記述とは異なるけれども、ファン・ボイ・チャウはドンキン義塾の設立計画に関わったと見てよいであろう。

<sup>288</sup> Nguyen Hien Le, *Dong Kinh nghia thuc*, NXB Van hoa Thong tin, 2004, pp. 41 – 42

<sup>289</sup> ベトナムの啓蒙近代化運動は維新運動（Phong trao Duy Tan）と呼ばれた。この運動の最も代表的な人物であるファン・チャウ・チン、チャン・クイ・カップなどの進歩的な知識人たちがであった。運動の内容には、経済、文化、教育、社会などの多くの面が含まれており、単なる政治運動ではない。維新運動はアンナンを中心に展開をした。また、コーチナにおける啓蒙近代化運動も同じような運動であったが、これは明新運動（Phong trao Minh Tan）と呼ばれた。代表的な人物はチャン・チャン・チエウ、グエン・タン・ヒエンなどである。

<sup>290</sup> グエン・チュオン・トゥー著；川本邦衛訳「ヴェトナム近代における福沢諭吉と慶応義塾」、西川俊作・松崎欣一編『福沢諭吉論の百年』慶応義塾大学出版社、1999、pp. 261 – 262

なお、グエン・チュオン・トゥーは1907年としているが、『年表』の記述を検討したところ、1906年秋が正しい。

<sup>291</sup> Chuong Thau (ed), “Phan Boi Chau nien bieu”, in, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 6, NXB Thuan Hoa – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, 2001, Ha Noi, pp. 168 – 169.

また、ファン・ボイ・チャウは、1906 年の著作『海外血書』<sup>292</sup>（續編）の中で、しばしば福沢諭吉に言及し、最後は同朋のなかからベトナムの福沢諭吉の出現を期待する次の言葉で終わっている。

今より後は同胞よ誰か何処にルソーや

福沢諭吉たらんものの出現で努力より努力よや<sup>293</sup>

これが、ファン・ボイ・チャウが学校設立を同志に託したのと同じ年に書かれたことから考えると、彼の学校設立計画への関与はベトナムに福沢諭吉のような教育者・啓蒙家が出現することを期待してのことであつたと考えてよかろう。

次にドンキン義塾設立時の様子について、検討したい。

1907 年 3 月、ハノイのハンダオ道にドンキン義塾が開設された。創設のメンバーはルオン・ヴァン・カン (Luong Van Can)、グエン・クエン (Nguyen Quyen)、ダオ・グイエン・フオ (Dao Nguyen Pho)、グエン・ヴァン・ヴィン (Nguyen Van Vinh)、ファン・テウン・フォン (Phan Tuan Phong)、ズオン・バ・チャック (Duong Ba Trac)、ホアン・タン・ビ (Hoang Tang Bi)、レ・ダイ (Le Dai)、グエン・ヒュウ・カウウ (Nguyen Huu Cau) などであつた。このうちルオン・ヴァン・カンは校長、グエン・クエンは塾監として活動した。

ドンキン義塾と命名したことについては、チュオン・トゥーは「東京義塾の名がやはり「東京における Public school 一義のための学塾」を意味したのは間違いないが、慶應義塾が存在しなければ、少なくともその名すらなかったことはその創立宣言を見れば明らかである。そして多分直接に因んだわけでないであろうが、著しく社会と文化の発展した日本の首都の東京（とうきょう）とハノイの旧称東京（トンキン）が、同義の地名であることに幾許かの親近の情もあつて、東京義塾の命名があつたのではないかとわたくしは思う」<sup>294</sup>と述べている。また、ドンキン義塾の逸話を集めて 1937 年に刊行されたダオ・チン・ナット (Dao Trinh Nhat) の『ドンキン義塾』は、グエン・クエンの回想として、

最初に私（グエン・クエン）は学校をどのような名前にすれば良いかわからなかった。

ダオ・グエン・フオ（当時の『大越新報』<sup>295</sup>の主筆）とともに相談し、ドンキン義塾

(Dong Kinh nghĩa học) の名を勧めた。この名は福沢諭吉の慶應義塾を模倣したものである。この名は最良のものであつた。バッキは元の地名はトンキン (Dong Kinh) であり、義塾は授業料を徴収しない学校という意味である。<sup>296</sup>

という逸話を載せている。この記述が正しければ、命名者はグエン・クエンとダオ・グエ

<sup>292</sup> 漢文で書かれていた『海外血書』（初編）（続編）は、1908 年にレ・ダイによってベトナム語詩に訳された。ドンキン義塾では、原文とチュノム（字喃）とクオック・グで書かれたものを一冊にして印刷し、義塾の青年たちはこれを愛読した。

<sup>293</sup> Chuong Thau, *Phan Boi Chau toan tap*, tap 2, NXB Thuan Hoa – Trung tam van hoa ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2001, p.145

日本語翻訳は以下の著書を参考にした。川本邦衛『ベトナムの詩と歴史』文藝春秋社、1967、p.418

<sup>294</sup> グエン・チュオン・トゥー著；川本邦衛訳「ヴェトナム近代における福沢諭吉と慶應義塾」西川俊作・松崎欣一編『福沢諭吉論の百年』慶應義塾大学出版社、1999、pp. 264- 265.

<sup>295</sup> 新聞の名称。ベトナム語では Dai Viet Tan bao.

<sup>296</sup> Chuong Thau, Dao Duy Man (ed) “Dong Kinh Nghia học”, in, *Dao Trinh Nhat Tuyen tap tac pham*, NXB Lao Dong – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2011, pp. 548 – 549

ン・フォであり、慶応義塾の名前を模したことは明らかである。ただし、グエン・クエンは義塾がイギリスのパブリック・スクールの訳語であることを知らず、中国の古くからある義塾の意味で理解していたことになる。

ドンキン義塾は1907年3月に男女各1クラスずつ（学生数60–70人）で発足し、5月にはフランス当局からの正式認可を受けた。ドンキン義塾の開設に関して誰がフランス当局へ許可証を提出したのか。グエン・ヒエン・レは、グエン・ヴァン・ヴィン、ファム・ジユウ・テオン（Pham Duy Ton）の2名が総統府へ許可証を提出したとしている<sup>297</sup>。一方、ネイル・ジャミエソン（Neil Jamieson）はグエン・ヴァン・ヴィンが必要な書類を準備し、提出したとする<sup>298</sup>。

また、ドンキン義塾は具体的な目的を明確に提示していた。グエン・チュオン・トゥーによれば、次の3点であったという。

- 国民に愛国心と民族の矜持と進取の志を培うこと
- 新しい学術思想と近代化した文明の生活を喧伝すること
- 中圻と南圻における民族・民主運動に合力すること<sup>299</sup>

この目的に関係する史料として、ドンキン義塾の逸話を集めて1937年に刊行されたダオ・チン・ナットの『ドンキン義塾』に、「趣意教化」に関する6点の記述がある。「趣意教化」とは教育方針のことである。

1. フランス語、中国語、ベトナム語を一緒に教える、しかし、高校で新しい思想、普通知識を翻訳するために、国文（ベトナム語とベトナム文学）を中心とする。
2. 中学校と大学のみフランス語と中国語を学び、小学校以下の男女はクオック・グを学ぶ。目的は民衆の啓蒙にあり、旧習を排斥する。
3. 学校で学費を必要とせず、文具も支給される。教科書は千冊を印刷し、農村へ配る。
4. 普通科学、普通工芸を教える<sup>300</sup>
5. 1週間に1回演説をする。演説の内容は教育、科学の問題である。
6. 私たちはドンキン義塾を開く体験、ドンキン義塾の運営が成功したら、チュンキ・ナムキ・バッキで1つずつ大学堂を設立する。<sup>301</sup>

ドンキン義塾の目的は新時代の人材を養成することにあつたため、いわゆる新学と欧米からもたらされた科学を講義するとともに、これらの学問を伝統文化と民族の文化遺産の継承に結びつけて教育することを方針としていた。外国語を重視し、西洋の実学を基本とする点は慶応と同じだが、民族の伝統も重視する点、徳育や体育を教育しない点、学費を取らない点は慶応義塾と異なる。これらはおそらくベトナムが置かれた状況によると見る

<sup>297</sup> Nguyen Hien Le, *Dong Kinh nghia thuc*, NXB Van hoa Thong tin, Ha Noi, 2004, pp. 50-51

<sup>298</sup> Neil L. Jamieson, *Understanding Viet nam*, University of California Press, Berkeley, USA, 1993, p.67

<sup>299</sup> グエン・チュオン・トゥー著；川本邦衛訳「ヴェトナム近代における福沢諭吉と慶応義塾」西川俊作・松崎欣一編『福沢諭吉論の百年』慶応義塾大学出版社、1999、p.262

<sup>300</sup> 授業の内容は歴史、地理、自然科学、衛生、数学、倫理などの教科があつた。

<sup>301</sup> Chuong Thau, Dao Duy Man (ed), *Dao Trinh Nhat Tuyen tap tac pham*, NXB Lao Dong – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2011, pp.552- 553

べきであるが、授業料を取らない点は中国の義塾と同じなので、「義塾」がパブリック・スクールの訳語ではなく中国の義塾の意味と誤解されていたことと関係するかもしれない。

## (2) ドンキン義塾の活動

ドンキン義塾は当初ハノイの旧市街ハンダオ通り 4 番地のルオン・ヴァン・カンの家に設置され、後には拡大して 10 番地に移動した。ダオ・チン・ナットの著書によれば「学校はハンダオという大通りに面しており、背面はハンクワット (Hang Quat) 通りであった。学校のなかには庭があり、その周りには教室がいくつも並んでいた。」<sup>302</sup>という様子であった。

発足当初は二つのクラス (男のクラス、女のクラス) があった。学生数は全部で約 60 ～70 人で、学生たちは大体会員の子弟だった。女のクラスはルオン・ヴァン・カンの娘が担当した<sup>303</sup>。その後学生数は増えて、学生たちはいくつかのクラスに分かれて、昼間のクラスもあれば、夜間のクラスもあった。老若男女を問わず入学が許され、最も多い時で、500～700 人に増加した。学生たちは紙、学習具、教科書などを無料で支給され、貧しい少数の学生は、食糧も与えられ、学校の寄宿舎に住むこともできた<sup>304</sup>。

ドンキン義塾の組織は 4 班に分れていた。4 班とは、教育班、宣伝班、著作班、財政班である。

教育班では授業、学習、学生募集などを管理していた。班は 3 部 (クオック・グ、漢文、フランス文) に分かれていた。漢文を担当する人はグエン・クエン、ダオ・グイエン・フオ、ズオン・バ・チャック (Duong Ba Trac)、ホアン・タン・ビ、ホアン・ティック・フオウン (Hoang Tich Phung) などで、彼らは康有為、梁啓超の著作を教えた。次にグエン・ヴァン・ヴィン、ファム・ジュウ・トン (Pham Duy Ton)、グエン・バ・ホック (Nguyen Ba Hoc)、ブイ・ディン・タ (Bui Dinh Ta) などがフランス文とクオック・グを担当した。そして、チャン・ディン・デウック (Tran Dinh Duc)、ファン・ディン・デオイ (Phan Dinh Doi) は歴史、地理、算術などを教えた。この他に多くの学者が無給で教えに加わり、そのなかにフランス語、クオック・グを教える 2 名の女性がいた<sup>305</sup>。

宣伝班は、学校の影響力を民衆にまで広く宣伝することに注意を払った。この班は演説を行ったり、「評文」(ビンヴァン : Binh Van) と呼ばれた詩歌を吟唱したりなどして啓蒙運動を展開し、愛国心を鼓舞して悪習を打破しようとした。ドンキン義塾の有名な演説家はズオン・バ・チャック、ルオン・チック・ダム (Luong Truc Dam)、ホアン・タン・ビ (Hoang Tang Bi)、グエン・クエン、ファン・チャウ・チンなどグエン・クエンの演説には次のような言葉があったと記録されている。

<sup>302</sup> Chuong Thau, Dao Duy Man (ed), *Dao Trinh Nhat Tuyen tap tac pham*, NXB Lao Dong – Trung tam Van hoa Ngon ngu Dong Tay, Ha Noi, 2011, p.550

<sup>303</sup> Nguyen Hien Le, *Dong Kinh nghia thuc*, NXB Van hoa Thong tin, Ha Noi, 2004, p.54

<sup>304</sup> Dang co tung bao, No 799, 27/4/1907

<sup>305</sup> Dang Co Tung Bao, No 822, 17/10/1907。2名の教師はフランス語、漢文、女性の家事を教えたという。

アンナン人（筆者注：ベトナム人）は自ら奴隷の淵に沈んでいるではないか。農民も兵士も、役人も苦力もみな合力せずんばあらず。合力して独立を快復し、自由の道を熾んにせよ。日本を鑑として平等と実現し、いつの日にか富強の民族と肩を並べるべし。<sup>306</sup>

演説会は広範な民衆を引きつけた。毎月 1 日と 15 日に演説会が開催された。当時の演説会について述べた詩がある。

演説会には人々が祭のように大勢集まり

期評文には雨のように

多くの客がやって来る<sup>307</sup>

この他宣伝班では塾の機関誌として『ダンコテウンバオ』（登古叢報：Dang Co Tung Bao）、『ダイヴィエトタンバオ』（大越新報：Dai Viet Tan Bao）を発行して大いに革新的思想を鼓吹した。

著作班は、学生の教材と外部に広く宣伝するための資料集の作成を担った。この班は 2 部（編集と翻訳）に分れた。ルオン・ヴァン・カン、レ・ダイ、グエン・ヒュウ・カウウ、ファム・テウ・チュック（Pham Tu Truc）などが編集者として著作班に参加した。ドンキン義塾では様々な出版物を発行した。例えば『国民読本』、『文明新学策』、『倫理教科書』、『越南国史略』などの類で、これらは漢字もしくはクオック・グで書かれていた。また、ファン・ボー・チャウの『海外血書』、ファン・チャウ・チンの『潘周楨投法政府書』などは、漢文からクオック・グへの翻訳が行われている<sup>308</sup>。

財政班は学校の経費の捻出を担当した。この班は教員の給料や学生に支給する紙、文具、教科書などの費用を調達する資金係で、塾の財政は学外からの寄付によって賄われていた。学生の家族は 1 ヶ月ずつ 5 ドン（Dong）を寄付した。その他に学校に好意を寄せる人たちが寄付をした。学校の黒板には寄付をした人の氏名が書き出された。ルオン・ヴァン・カンは金銭の管理を行い、グエン・クエンは捻出書を管理した。

次に具体的な教育内容について述べる。ドンキン義塾では、クオック・グ、フランス語、漢字、文学、歴史、地理の講義が行われ、自然科学の分野では算術や生物などの講義が行われた。教科書は無料で配られた。教科書の内容は、古い無用な学習方法、後進的な封建社会の悪い習慣を批判し、クオック・グを学び、科学知識を学び、迷信や腐敗した習俗を排除し、商工業に従事たり、会社を興すよう呼びかけたりすることを目的としたものであった。講義の内容は愛国心を鼓舞し、維新精神、自強意志を強調するものであった<sup>309</sup>。

<sup>306</sup> Chuong Thau (ed), *Dong Kinh nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, tap 1, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010, p. 121

グエン・チュオン・トゥー著；川本邦衛訳「ヴェトナム近代における福沢諭吉と慶応義塾」西川俊作・松崎欣一編『福沢諭吉論の百年』慶応義塾大学出版社、1999、p.263

<sup>307</sup> 欠名、「Ve Dong Kinh nghia thuc」,in, Chuong Thau (ed), *Dong Kinh nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, tap 2, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010, p. 851

<sup>308</sup> Chuong Thau (ed), *Dong Kinh Nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, tap 1, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010, p. 96

<sup>309</sup> Chuong Thau (ed), *Dong Kinh Nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, tap 1, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010、

また、ドンキン義塾には『文明新学策』という重要な教科書があった。この教科書は、民衆の文化と知識を啓蒙する 6 つの方法を提唱した。つまり、(1)「自分の国の文字」すなわちクオック・グを用いること。これによって筆記法は日常語と一致し、またアルファベットを用いることによって誰もが字を覚えられることになる。(2) 教科書を改訂し、中国古典一辺倒をやめること。すなわちベトナムの地理、歴史を中心として、世界全体についてクオック・グを用いて分かりやすく記した教科書を編纂・印刷する。(3) 科挙の方法を改革すること。形式のみを重んずる従来の詩・賦・八股などの試験をやめ、論述問題やベトナム・中国・西洋の歴史、そして数学やクオック・グなどについての試験を採用すること。(4) 人材の育成を推進すること。すなわち新しい知識や学問を身につけた者に、仕官や実用の機会を開き、人々が旧学に固執しないようにする。(5) 工芸の奨励。すなわち工芸の学を奨励し、技術を有する者へ恩典を与える。(6) 新聞社の設立。すなわち新聞をクオック・グと漢文で発行し、新しい情報や知識を伝え、もって民智を啓く。以上の 6 点である。

実際、ドンキン義塾はこの 6 点を行った。たとえば、教科書や本を大量に印刷した。ドンキン義塾が印刷・発行した教科書・図書の一覧を下記に表にした。<sup>310</sup>

表 16 ドンキン義塾が印刷・発行した教科書・図書一覧

No	教科書名・書名	著者	内容	その他
1	文明新学策	不詳	ベトナムの文明の進化が欧州に劣っている原因と、その状態を変革するための 6 点の提唱。	漢文
2	国民読本	不詳	79 項目、世界の情報（日本、フランスなど）；文明の概念、普通の知識を述べた。	漢文、1907 年に印刷、2 冊
3	国史教科	不詳	上古から近代（1907 年）までのベトナム史、付録にはフィリ	漢文、1907 発行

pp. 64 – 65

<sup>310</sup> Chuong Thau (ed), *Dong Kinh Nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, tap 1, 2, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010、

			ッピンの歴史が書かれている。	
4	南国偉人伝	不詳	45名の人物の伝記。人物は国王・功臣・将軍など。	漢文、1907年発行
5	南国佳事	不詳	ベトナムの昔の物語	漢文、1907年発行
6	新訂倫理教科	挙人ファム・テウ・チュック (Pham Tu Truc)	倫理の必要性和重要性	漢文、1907年発行
7	南国地輿	ルオン・チュック・ダム (Luong Truc Dam)	自然地理、経済地理、行政地理	漢文、1907年発行
8	ベトナム亡国史	ファン・ボイ。チャウ	ベトナムが亡国に至る歴史	漢文、1905
9	海外血書	ファン・ボイ。チャウ (漢文) レ・ダイ (クオック・グ)		漢文。のちにレ・ダイによってクオック・グに翻訳された。
10	Toi tan Quoc van tap doc (国文習読)	不詳	クオック・グの学習書。迷信否定などの内容、	クオック・グ
11	Dai Viet dia du (大越地輿)	ルオン・ヴァン・カン	トンキン・アンナン・コーチシナの地理をクオック・グの詩で表現。詩形は六八体	クオック・グ、1907
12	Tinh hon quoc ca (醒国魂歌)	ファン・チャウ・チン (Phan Chau Trinh)	ベトナム人たちに新学、文明生活の学習を勧める	クオック・グ
13	Hop quan sinh doanh thuyet (合群營生説)	グエン・テュウン・ヒエン (Nguyen Thuong Hien)	人々は団結して経営することを勧める	クオック・グ



この他に近代技術を強調した新しいカリキュラムで教える学校を開設しようと考えた。究極的には、国内生産物と産業を発展されることでベトナム人の生活水準を改善し、生活条件を向上させることが目標であった。断髪も奨励したが、短髪は勇気と近代化と反抗の象徴となった<sup>311</sup>。

最後に財政について述べると、ドンキン義塾の活動は多大な資金を必要とした。先述のように、財政班がその多大な経費調達に責任を負った。財源は、在校生の家庭と学外後援者の寄付に求められ、多くの人々の支持を得た。さらに、義塾の設立者たちは会社、商会（Thuong Hoi）の経営を行い、さらに、義塾の設立者たちは会社、商会の経営を行い、国産米や漢方薬、国産の工芸品、絹織物、茶、仙花紙、真鍮製品や漆器を製造、販売した。これらの商店が国産品を扱ったのは、華僑商人に対抗して国内産業を奨励することを企図したためである。また、商会、会社に義塾の会員を集めるなど、連絡場所の確保という目的もあったのである<sup>312</sup>。ハノイにはドン・ロイ・テ（Dong Loi Te）、ホン・タン・ヒュウ（Hong Tan Hung）、クアン・ヒュン・ロン（Quang Hung Long）、ドン・タイン・シウオン（Dong Thanh Xuong）などの会社があった<sup>313</sup>。

## 第二節 義塾運動の発展

ハノイの中心部にドンキン義塾が設立すると、ハノイの周辺に、マイラム義塾（梅林義塾：Mai Lam Nghia Thuc）、ゴクスエン義塾（玉川義塾：Ngoc Xuyen Nghia Thuc）などが開校した。さらに、ドンキン義塾の影響は各地方に広がり、例えばハドン（Ha Dong）、ソントアイ（Son Tay）、バックニン（Bac Ninh）、ナムディン（Nam Dinh）などの諸省にまで義塾は拡大した。ハノイではドンキン義塾の分校も設立されていた。以下、これらを具体的に見ていきたい。

まず、マイラム義塾は当時のハノイ市郊外のホアンロン（Hoan Long）県、ホオアンマイ（Hoang Mai）総、ホオアンマイ（Hoang Mai）村に設立された<sup>314</sup>。『ベトナム歴史 1897－1914』は、

ハノイ市の周辺や進歩的分子のいる諸省における多くの村では、自主的に支部を作った後にハノイに連絡を取って講義のカリキュラムや宣伝の資料を要求したり、マイラム義塾（ホオアンマイ）、ゴクスエン義塾のようにドンキン義塾の方式に従って郷学を聞いたりした。<sup>315</sup>

<sup>311</sup> 橋本和孝「東遊運動から東京義塾へ『文明新学策』を中心として」、pp.121－122

<sup>312</sup> Chuong Thau (ed), *Dong Kinh Nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, tap 1, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010, pp. 78

<sup>313</sup> Nguyen Hien Le, *Dong Kinh nghia thuc*, NXB Van hoa Thong tin, Ha Noi, 2004, pp. 120－121

<sup>314</sup> 岡田建志「マイラム義塾—20世紀初頭のベトナムにおける—私塾の実態」『日本・東アジア文化研究』第1号、2002

<sup>315</sup> Tran Van Giau, Dinh Xuan Lam, Nguyen Van Su, *Lich su Viet Nam tu 1897 den 1914*, NXB Xay dung, Ha Noi, 1957, pp. 232－233

とあり、ハノイ郊外にあったマイラム義塾がハノイのドンキン義塾の影響を受けて開校したとの見解を示している。またトラン・ヒュイ・リウ編の『ハノイの歴史』は、

1907 年、(中略) ハノイではハノイの人民が自主的に立てた学校組織が多く出現した。

(中略) 学習活動が郊外の地域にも広がった。1907 年 3 月、ホアンマイの文紳(ヴァンタン: Van Than) たちは、60 人以上が誘い合って金銭を拠出し、村のディン<sup>316</sup>に学校を立て、「マイラム義塾」と名付けた。「マイラム義塾」の目的は、村内の子弟に教え、まず、クオック・グ、漢字、フランス語を普及し、その後には西洋の技芸、算法、地理、化学を学習させることである。<sup>317</sup>

と、そこで教えられていた科目を詳細に紹介している。この記述の原資料は、おそらく 1907 年 8 月 29 日付の『ダンコテウンバオ』(登古叢報: Dang Co Tung Bao) という新聞に載ったホアンマイ社のマイラム義塾設立についての記事である。それには、

今年の 3 月のある日、この村の文紳、豪目たち 60 人以上が誘い合わせて集まり、一同は、村のディンに学校を建てて学業を助け、「マイラム義塾」と名付けてお互いに教え、村内の年少の生徒たちに教えるために、家産を拠出することに賛成した。<sup>318</sup>

とある。また、同年 10 月 17 日のマイラム義塾の副理事長のスピーチによれば、

義塾を建てる目的は村内の子弟たちに教え、(中略) まず、クオック・グ、漢字、フランス字を普及し、その後には西洋の技芸、算法、地理、化学を学習させることである。

<sup>319</sup>

とある。これらの史料によって、『ハノイの歴史』の記述がほぼ正しいことが証明できる。

ハノイ郊外地区には、このほかにゴクスエン義塾が設立された。1907 年 10 月 17 日付の『ダンコテウンバオ』の記事では以下のように報じられている。

先の日曜日に、ホアンロン県、フックラム(Phuc Lam) 総、ゴクスエン(Ngoc Xuyen) 社のファム・チュオン・ヴィ(Pham Truong Vi) は民衆に学校を設立することを許した。

この学校は総の子弟にクオック・グと漢字を教えるもので、この人が自分で金銭を出し、紙、筆などを生徒に渡す。<sup>320</sup>

つまり、ゴクスエン義塾は、ファム・チュオン・ヴィという個人が私財を投げ出して、ドンキン義塾開校から 7 か月後に作った義塾なのである。

ハドンでは 4 つのドンキン義塾分校が設立された。1 つ目の分校はホオアデック(Hoai Duc) 府トンカン(Thon Canh) 村に建てられ、ド・テウット(Do Thuat)、グエン・シワン・ヴァ(Nguyen Xuan Vu)、グエン・ディン・テウエン(Nguyen Dinh Tuyen) などがこの分校を組織した。彼らは民衆から寄付を募り、新聞を買い、机、いすを作った。この義塾では、毎月 2 回「評文」(ビンヴァン: Binh Van) が行われた。「評文」では迷信を排除し、工芸技

<sup>316</sup> ベトナムにおけるディン(Dinh)は行事の時、村の人が集まる場所。

<sup>317</sup> Tran Huy Lieu (ed), *Lich su Thu do Ha Noi*, NXB Su hoc, Ha Noi, 1960, p. 126

<sup>318</sup> Dang Co Tung Bao, No.815, 29/08/ 1907.

<sup>319</sup> Dang Co Tung Bao, No. 822, 17/10/1907

<sup>320</sup> Dang Co Tung Bao, No. 821, 10/10/1907

術が推奨された。2つ目の分校はホオアデック府タイモオ (Tay Mo) 村に建てられ、グエン・ヒュウ・トアン (Nguyen Huu Toan)、ドオ・ダム (Do Dam)、ド・ロイ (Do Loi) などが分校を組織した。毎月2回演説が行われ、新聞読書会が設けられた。3つ目の分校はダンフオウオン (Dan Phuong) 県ダンホイ (Dan Hoi) 村に建てられ、グエン・ヴァン・ホアンが分校を組織した。この分校の人々はドンズー運動に1人5ドンずつ支援した<sup>321</sup>。また、ホオアデック (Hoai Duc) 府チェム (Chem) 村のテウカン (Tu Khanh) 寺にもドンキン義塾分校が設立された。ホアン・タン・ビ、ファン・タン・フォン、グエン・ヒュウ・ティエン (Nguyen Huu Tien) などが分校の組織に参加した。ファン・チャウ・チンはこの分校で演説している<sup>322</sup>。

また、バックニン省ではドンキン義塾をモデルにした教室が開かれ、ジャラム (Gia Lam) 県ディスウエン (Dinh Xuyen) 村でドンキン義塾の一人教師 (Nguyen Canh Lam) はクラスの組織はドンキン義塾の規定を作った。ヒュンエン (Hung Yen) 省でヴァンジャン (Van Giang) 県、イエンミ (Yen Mi) 社などらによって小さい義塾が設立された。この義塾では1商店 (ヒュロイテ : Hung Loi Te) を経営し、国産品を販売した。<sup>323</sup>

タイビン (Thai Binh) 省でも義塾運動は発展した。様々な地方の知識人たちが義塾を開き、幼年から青年まで、さまざまな年齢の人がクオック・グを学んだ。講義の内容はドンキン義塾を模倣したものであった<sup>324</sup>。

このように、ドンキン義塾の影響は大都市から農村へ広がり、義塾はベトナム民族運動において、独立運動を宣伝する事業に大きく貢献し、民族文化を発展させる重要な位置を占めることとなった。そのため、ドンキン義塾は新しい思想の潮流を生むのに積極的に寄与したと評価されている。福沢諭吉の教育思想を唱える慶應義塾の精神にならったベトナム義塾運動に、ベトナム知識人達は強く共鳴したが、それだけで新しい思想の潮流が生まれたわけではない。ドンキン義塾はベトナムの最初の近代的教育として、慶應義塾を模倣するだけでなく、『ダンコテウンバオ』新聞を発行したのを初め、教科書や宣伝の材料を編集・出版してベトナム人の愛国心を鼓舞するとともに、それらの出版物は漢字を少なくしてクオック・グの使用を推進する役割を果たした。また、ドンキン義塾では慶應義塾のように実学を重んじて、ベトナムの風俗習慣を改め、新しい生活方法を奨励するなど、ベトナム近代化のために多方面に教育啓蒙活動を行なった。日本で最初の演説会が三田演説会<sup>325</sup>であったのと同じように、ベトナム最初の演説会もドンキン義塾の演説会<sup>326</sup>であった。

<sup>321</sup> Chuong Thau, *Dong Kinh nghĩa thực và Văn thơ Dong Kinh nghĩa thực*, tap 1, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010, pp. 82–83

<sup>322</sup> Chuong Thau, *Dong Kinh nghĩa thực và Văn thơ Dong Kinh nghĩa thực*, tap 1, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010, pp. 83–84

<sup>323</sup> Chuong Thau, *Dong Kinh nghĩa thực và Văn thơ Dong Kinh nghĩa thực*, tap 1, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010, pp. 84–85

<sup>324</sup> Chuong Thau, *Dong Kinh nghĩa thực và Văn thơ Dong Kinh nghĩa thực*, tap 1, NXB Ha Noi, Ha Noi, 2010, pp. 86.

<sup>325</sup> 三田演説会はこのサイト [http://www.keio.ac.jp/ja/contents/stained\\_glass/2000/225.html](http://www.keio.ac.jp/ja/contents/stained_glass/2000/225.html) 参照

ただ、こうした演説会で一部教師が植民地行政を公然と批判したとして、1908年1月にドンキン義塾は閉校を命じられ、各地の義塾も閉校していくことになった。

最後にあらためてドンキン義塾が非常に大きな影響力を持つ存在となった理由を考えてみたい。まず、義塾が開校された場所がハノイ、すなわちフランス総督府の置かれた都市であり、様々な事務所、病院、図書館等が整備され、グエン朝の王都フェに代わる政治、行政の中心地として重要性が増していたことが考えられるであろう。次にドンキン義塾自体が、中部諸省の学会に比べて規模が大きく、制度的にも整備されていたことが挙げられるであろう。ドンキン義塾は学校の場所が便利だったうえ、有名な先生が教えたので、多く生徒が集まった。一方、アンナンでも早くに新学を教える学校が設立された。たとえば、フウフォン（Phu Phong）、ジエンフック（Dien Phuoc）などだが、これらの学校に生徒が集中することはなかった。また、ハノイにはフランスの総督府が置かれた関係でフランス語を理解する新たなベトナム知識人が誕生して来ており、その新しいベトナム知識人の一部が義塾の教員として積極的に参加し、そのため教育の水準がかなり高かったことが挙げられる。さらに、ドンキン義塾では出版物、教科書などを数多く発行したために、全国的に義塾の活動を周知することができたうえに、ほかの義塾ではその出版物を使って教育を行ったことが挙げられよう。

### 第三節 小結

以上、ドンキン義塾と義塾運動を検討した。ここで述べたことを以下にまとめる。

まず、ドンキン義塾設立に関する諸問題として、その設立にファン・ボイ・チャウが関与したかどうか、命名の意図、開塾の目的について検討した。その結果、諸史料からファン・ボイ・チャウが関与したのは確実で、ドンズー運動のなかの和平派に、福沢諭吉のような教育者の出現を期待してのことだったとみられること、命名者はグエン・クエンとタオ・グエン・フォで、慶応義塾の名前を模したこと、ただし義塾の意味はパブリック・スクールの訳語ではなく、中国伝統の義塾の意味で解していたこと、開塾の目的は新時代の人材の養成で、新学と欧米の科学を民族の伝統文化と文化遺産の継承に結び付けて教育する方針を採ったこと、外国語を重視し、西洋の実学を基本とする点は慶応と同じだが、民族の伝統も重視する点、徳育や体育を教育しない点、学費を取らない点は慶応義塾と異なること、などを明らかにした。

次に、ドンキン義塾の活動を教育班、宣伝班、著作班、財政班の4つの班ごとに確認し、新たな思想を広めるべく宣伝班の演説活動と著作班の出版活動が活発に行われたことを具体的に示すことができた。

ついで、義塾運動がドンキン義塾からベトナムに広まっていく様子を具体的に検討し、ドンキンからその周辺へ、そして都市から農村へと広がっていったこと、義塾運動が独立運動を宣伝し、民族文化を発展させるうえで大きな役割を果たすことができたのは、ドンキン義

塾による『ダンコテウンバオ』新聞の発行と教科書の発行によること、などを明らかにした。

以上の検討結果からすれば、この義塾運動という改良主義的とされる運動を、ファン・ボイ・チャウの武装運動の方針に反対したものと理解するのは妥当ではないと思われる。実際にトンキン義塾の関係者は、ドンズー運動に積極的に参加した。たとえば、ドンキン義塾の塾長であるルオン・ヴァン・カンの二人の息子はルオン・ラップ。ニャン、ルオン・ギ・カンとともに早く日本に行った。また、ファン・ボイ・チャウがベトナムに送った詩文は、ドンキン義塾によってクオック・グに翻訳され、新思潮の宣伝のための材料にされた。ドンキン義塾の活動は 1 年足らずという短期間ではあったが、当時の新思想の潮流に積極的に寄与したものと高く評価されている。

## 結論

以上、植民地期ベトナムのドンズー運動と義塾運動および 20 世紀初頭のベトナム・日本関係史について検討してきた。ここまで述べてきたことをまとめ、その上で残された課題を明らかにして、本論文の結論としたい。

本論文で取り上げた問題は、20 世紀初頭にフランスに抵抗した二つの代表的運動であるドンズー運動と義塾運動がどのような関係にあったかを明らかにすることである。この二つの運動は、従来、対立した関係にあるものとして理解されることが多く、最近になって両者の連携関係が注目され始めたが、まだ十分な検討がなされていない。そこで、本論文では、日本との関係が深いこの二つの運動同士の関係がどのようなものであったかを、可能な限り具体的に示すことを課題とした。

序論では、ドンズー運動と義塾運動についての研究史をたどり、それぞれの運動の研究において、どんな課題が残されているのかを明らかにした。このなかで、ドンズー運動については、ファン・ボイ・チャウの思想の研究や日本での留学生の活動の研究は進んでいるものの、ベトナム本国における留学生を送りだし支援する活動についての研究がまだ残されていること、義塾運動については、ドンキン義塾が慶応義塾を模倣したと言われているが、それが正しいかどうかを再確認する必要があること、などを確認した。

第一部では、ドンズー運動と義塾運動が、ともに 20 世紀初頭のベトナムで展開した運動だったので、これらを検討する前提として、当該時期のベトナムの政治・経済・社会・教育の状況とそこでの世界情勢が知識人に与えた影響とを確認した。また、当時のベトナム知識人の日本観について、ドンズー運動を起こしたファン・ボイ・チャウと、義塾運動を先導したファン・チャウ・チンの日本観を中心に確認した。そこでの検討を踏まえ、最後に、多くのベトナムの知識人は日露戦争に勝った日本にアジア勃興の希望を見出して強い関心を持ったが、具体的なことはほとんど知らなかったため、留学して日本について学ぼうとするドンズー運動が登場したのであり、日本の詳細な情報を教科書を通して提供した義塾運動が大きな影響力を持つようになったという理解を提示した。

第二部では、ドンズー運動の具体的な様相を、日本とベトナムに分けて論じた。日本でのドンズー運動の様相では、ドンズー運動で来日した留学生の数は約 200 人が妥当であること、留学生の生活は当初は非常に厳しかったが、中国の革命家たちと関係を持ち、1907 年以降に東京に移って日本の政治家たちの援助が受けられるようになってから改善されたこと、留学生の受け入れについて 1906 年からは東京同文書院が一手に引き受けてくれたことで、留学生の増加が可能となったこと、増えた留学生たちの問題に対応するために作られた「越南公憲会」が、トンキン・アンナン・コーチシナと出身地が異なるベトナムの留学生たちを一つに団結させる役割を果たしていたこと、などを確認した。ベトナムでの運動の様相では、ドンズー運動とそれに参加した青年、及びその支援運動に参加した支援者とその活動をリスト化し、それをもとに地域ごとの特色を検討した。その結果、支援者の階層や職業では、トンキンとアンナンでは儒学者が多く、コーチシナでは官吏・富裕層が多

いという特徴があること、運動開始の時期では、トンキン・アンナンは早く、コーチシナでは遅くて1907年から参加したこと、それなのに、留学生の数は一番多く、コーチシナではドンズー運動が短期間に非常な盛り上がりを示したこと、ドンズー運動の支援では、コーチシナからの支援が大きかったこと、ドンズー運動はかなり広範囲に広がったが、各地域の全域にまでは拡大しなかったことなどを明らかにした。

第三部では、ドンキン義塾が慶応義塾を模倣して作られたという通説の妥当性を軸にして福沢諭吉と慶応義塾がベトナムの知識人に与えた影響の大きさを検討しながら、義塾運動の具体的な姿を検討した。その結果、福沢の実学観を含む教育思想がベトナムの知識人たちのそれと類似し共鳴するものであったこと、ドンキン義塾とドンズー運動の接点として、ファン・チャウ・チンの日本滞在だけでなく、その設立計画にファン・ボイ・チャウが明確に関わっていて、彼はドンズー運動のなかの和平派に福沢諭吉のような人物が生まれることを期待して関与したこと、ドンキン義塾の命名者はグエン・クエンとダオ・グエン・フォで、慶応義塾の名前を模したこと、ただし義塾の意味はパブリック・スクールの訳語ではなく、中国伝統の義塾の意味で解していたこと、ドンキン義塾と慶応義塾の間には、教育方針や外国語重視・西洋の実学を基本とすることなどの共通点はあるが、違う点も多々あること、そして義塾運動がハノイからその周辺へ、そして都市から農村へと広がっていったこと、その拡大にはドンキン義塾による『ダンコテウンバオ』新聞の発行と教科書の発行が大きな役割を果たしたこと、などを明らかにした。

以上を踏まえて、最初の大きな課題である、ドンズー運動と義塾運動がどのような関係にあったかという問題を考えると、ドンズー運動と義塾運動を対立的に捉える考え方は妥当ではなく、ドンズー運動のなかから義塾運動が派生したと考えた方がよく、義塾運動を展開した人々のなかにドンズー運動への明確な支援者がいたり、その教科書や出版物にドンズー運動に関する著作が使われてその思想を広める役割を果たしたり、という点では義塾運動にはドンズー運動を支援する運動という側面があったとみなすべきであろう。ただ、橋本和孝がドンキン義塾をドンズー運動の「秘密機関」と位置付けたこと<sup>327</sup>については、本論文ではそこまではいえるかどうかの検討はできなかったので、今後の検討課題としたい。

次のレベルの問題として、ドンズー運動のベトナムにおける支援活動を明らかにするという課題を掲げたが、これについては地域ごとの特色の現象面を明らかにすることはできた。しかし、その現象がどのような原因・理由で発生したのかまでは検討できなかった。この点は今後の課題としたい。

また、ドンキン義塾と慶応義塾の関係という課題では、本論では従来通り慶応義塾をモデルにしてドンキン義塾が作られたとみなしてよいという結論になった。ただし、ここでは論じなかったが、中国の梁啓超らの影響の強さを忘れてはならず、今後はその点も踏ま

<sup>327</sup> 橋本和孝「ドンズー運動と東京義塾—ベトナム・アンチ・コロニアリズムとレシプロシティー」、矢嶋道文編『クロス文化学叢書第1巻互惠（レシプロシティー）と国際交流：キーワードで読み解く「社会・経済・文化史」』クロスカルチャー出版社、2014、p.202

えてトータルに理解することを考えていきたい。

さらにこのことに関連して、なぜ慶應義塾が成功し、ドンキン義塾は失敗したのかという問題もある。この問題については本論文で論じることができなかったが、いまのところ福沢の実学観には日本近世の実学観を継承し成熟させたという側面があったのに対し、19世紀半ば以前のベトナムには実学思想がなくドンズー運動を進めた知識人は無からそれを広め成熟させていかなければならなかったことと、20世紀初頭のベトナムは日本に比べて「民智」が低く、新しい知識を受容するには限界があったことがあると推測している。この推定が正しいかどうか、今後の研究課題としたい。



## 参考文献

### I. 日本語文献（五十音順）

1. 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』、福村出版社、1990
2. 石井米雄監修；桜井由躬雄・桃木至朗編『ベトナムの事典』（東南アジアを知るシリーズ）同朋舎、1999
3. 石井米雄・高谷好一・前田成交ほか監修『東南アジアを知る辞典』、平凡社、1999
4. 今井昭夫「ファン・チュー・チンにおける「民主主義」と儒教」『東京外国語大学論集』第40号、1990
5. 今井昭夫、「ファン・ボイ・チャウの日本滞在経験とその思想形成」（資料紹介 東遊運動 100 周年記念学術交流会議に参加して）、『*Southeast Asian studies, Tokyo University of Foreign Studies*』11、2006
6. ヴァン・タオ著；川本邦衛訳「東遊、維新運動ならびに東京義塾—ヴァン・タオ教授講演要旨」『慶應義塾大学語言文化研究所紀要』15、1983
7. 内海三八郎著、千島英一・櫻井良樹編『ヴェトナム独立運動家 潘佩珠伝—日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯』芙蓉書房、1999
8. 岡田建志「マイラム義塾—20 世紀初頭のベトナムにおける—私塾の実態」『日本・東アジア文化研究』1、2002
9. 岡田建志「マイラム義塾設立の周辺」『日本・東アジア文化研究』2、2003
10. 川本邦衛「ファン・ボイ・チャウの日本観」『歴史学研究』391、1972
11. 柏原文太郎「安南学生教育顛末」1909 年 1 月 25 日付（日本外交史料館蔵「安南王族本邦亡命関係」（請求番号：A 6， 7， 0. 1—1—1—1）所収
12. 加藤三明「慶應義塾史跡めぐり（第 29 回）適塾と緒方洪庵」『三田評論』1117 号、200
13. グエン・チュオン・トゥー（Nguyen Chuong Thau）著；川本邦衛訳「ヴェトナム近代における福沢諭吉と慶應義塾」、西川俊作・松崎欣一編『福沢諭吉論の百年』慶應義塾大学出版会、1999
14. グエン・ティエン・ルック「ファン・ボイ・チャウの日本観」、『広島大学東洋史研究室報告』16、1994
15. グエン・ティエン・ルック「ベトナム・日本関係史の研究—明治維新から太平洋戦争まで—」博士論文、広島大学大学院文学研究科、1998
16. 三田商業研究會編纂『慶應義塾出身名流列伝』実業之世界社、1909
17. 慶應義塾編『慶應義塾之現状—三田の学風』慶應義塾、1911
18. 慶應義塾編『慶應義塾百年史（上巻）』慶應義塾、1958
19. 慶應義塾編『慶應義塾百年史（中巻（前））』慶應義塾、1960
20. 慶應義塾編『慶應義塾百年史（中巻（後））』慶應義塾、1964
21. 慶應義塾編『慶應義塾百年史（下巻）』慶應義塾、1968
22. 慶應義塾編『図説・慶應義塾百年小史—1858-1958』慶應義塾、1958
23. 黒龍会編『東亜先覚志士記伝』（中巻）、原書房、1966
24. 潘佩珠著；長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』平凡社、1966
25. 酒井いづみ「ベトナムにおける 20 世紀初頭の抗仏闘争—ファン・ボイ・チャウの思想と活動」（上）『月刊アジア・アフリカ研究』133、1972
26. 酒井いづみ「ベトナムにおける 20 世紀初頭の抗仏闘争—ファン・ボイ・チャウの思想と活動」（下）『月刊アジア・アフリカ研究』134、1972
27. 白石昌也「ファン・ボイ・チャウと日本」『東南アジア史学会会報』25、1975

28. 白石昌也「開明的知識人層の形成：20世紀初頭のベトナム」『東南アジア研究』13-4、1976
29. 白石昌也「ファン・チュ・チン—ベトナム近代教育の提唱者」阿部洋編集『現代に生きる教育思想 第8巻 アジア』、ぎょうせい、1981
30. 白石昌也「ベトナム青年の日本留学--明治期日本における東遊運動（戦前日本のアジアへの教育関与）—（明治日本のアジア諸国の教育近代化に及ぼした影響）」『国立教育研究所紀要』121、1992
31. 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書店、1993
32. 田中克佳「福沢諭吉の教育論論考」『近代日本研究』2、1985
33. 田中孜『日越ドンズーの華—ヴェトナム独立秘史—潘佩珠の東遊（日本に学べ）運動と浅羽佐喜太郎』明成社、2007
34. 谷川栄彦「第一次世界大戦前のヴェトナム民族主義」『法政研究』27-2・3・4、1961
35. 谷川栄彦『東南アジア民族解放運動史—太平洋戦争まで—』勁草書房、1969
36. 玉城肇『日本教育発達史』三一書房、1976
37. 鄧搏鵬著；後藤均平訳『越南義烈史—抗仏独立運動の死の記録—』刀水書房、1993
38. 橋本和孝「東遊運動と東京義塾—ベトナム・アンチ・コロニアリズムとレシプロシティ—」矢嶋道文編『クロス文化学叢書第1巻互惠（レシプロシティ）と国際交流：キーワードで読み解く「社会・経済・文化史」』クロスカルチャー出版社、2014
39. 橋本和孝「東遊運動から東京義塾へ—『文明新学策』を中心として」『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題（ベトナムシンポジウム2013）』、国際日本文化研究センター、2015
40. 福沢諭吉「文明論之概略」『福沢全集』第3巻、時事新報社、1898
41. 福沢諭吉「文明教育論」『福沢諭吉教育論集』、岩波文庫、1991
42. 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、1995
43. 福沢諭吉『福翁自伝』講談社学術文庫、2010
44. 福永英夫、『日本とヴェトナムその歴史のかかわり』近代文芸社、1995
45. 宮沢千尋「再来日後のベトナム東遊運動盟主クオンデ侯をめぐる日仏植民地帝国の対応と取引」『ベトナムの社会と文化』5・6合併号、2005
46. 宮沢千尋「クオンデ侯と全亜細亜会議長崎大会」『ベトナム 社会と文化』、2006
47. 宮沢千尋「クオンデのファン・チュウ・チン宛書簡と「サンテ監獄事件」」『東洋文化研究』15、2013
48. 楊広咸『安南史』東亜研究所、1942
49. 和田博徳「アジアの近代化と慶應義塾 - ベトナムの東京義塾・中国のその他について」、日吉論文集編集委員会編『日吉論文集：慶應義塾大学商学部創立十周年記念』慶應義塾大学商学部創立十周年記念日吉論文集編集委員会、1967

## II. 欧米語文献（アルファベット順）

1. Bulletin économique de l'Indochine, No 171, 1925
2. Ch. Robequain, *L'Evolution économique de l'Indochine française*, Paris, 1939
3. David G. Marr, *Vietnamese Anticolonialism, 1885-1925*, University of California Press, California, USA, 1971
4. Georges Boudarel "Bibliographie des œuvres relation à Phan Bội Châu éditées en Quốc ngữ à Hanoi depuis 1954", B.F.E.O. vol.56, 1969.
5. Georges Boudarel "*Mémoires de Phan Bội Châu*" (Phan Bội Châu niên biểu), France-Asie/Asia XXII, 1969, pp. 3-210.

6. Georges Boudarel “Phan Bội Châu et la société vietnamienne de son temps” , France-Asie/Asia XXIII- 4, 1969.
7. Jorgen Unsselt, *Vietnam: Die nationalistische und marxistische Ideologie im Spätwerk von Phan Bội Châu, 1867-1940*, Wiesbaden, Steiner, German, 1980
8. Neil L. Jamieson, *Understanding Viet nam*, , University of California Press, Berkeley , USA, 1993
9. Pierre Gourou, *L'utilisation du sol en Indochine française*, Pari, 1939
10. Vinh Sinh, *Phan Boi Chau and the Dong Du Movement*, Yale University Center for International and Area Studies, New Heaven, USA, 1988
11. Vinh Sinh, Nicholas Wickenden (translate), *Overtured Chariot the Autobiography of Phan Boi Chau*, University of Hawai, USA, 1997
12. Vu Duc Bang, “The Dong Kinh free school Movement, 1907 – 1908” in Walter F. Vella ed, *Aspects of Vietnamese History*, The University Press of Hawai, USA, 1973

### III. ベトナム語文献(アルファベット順)

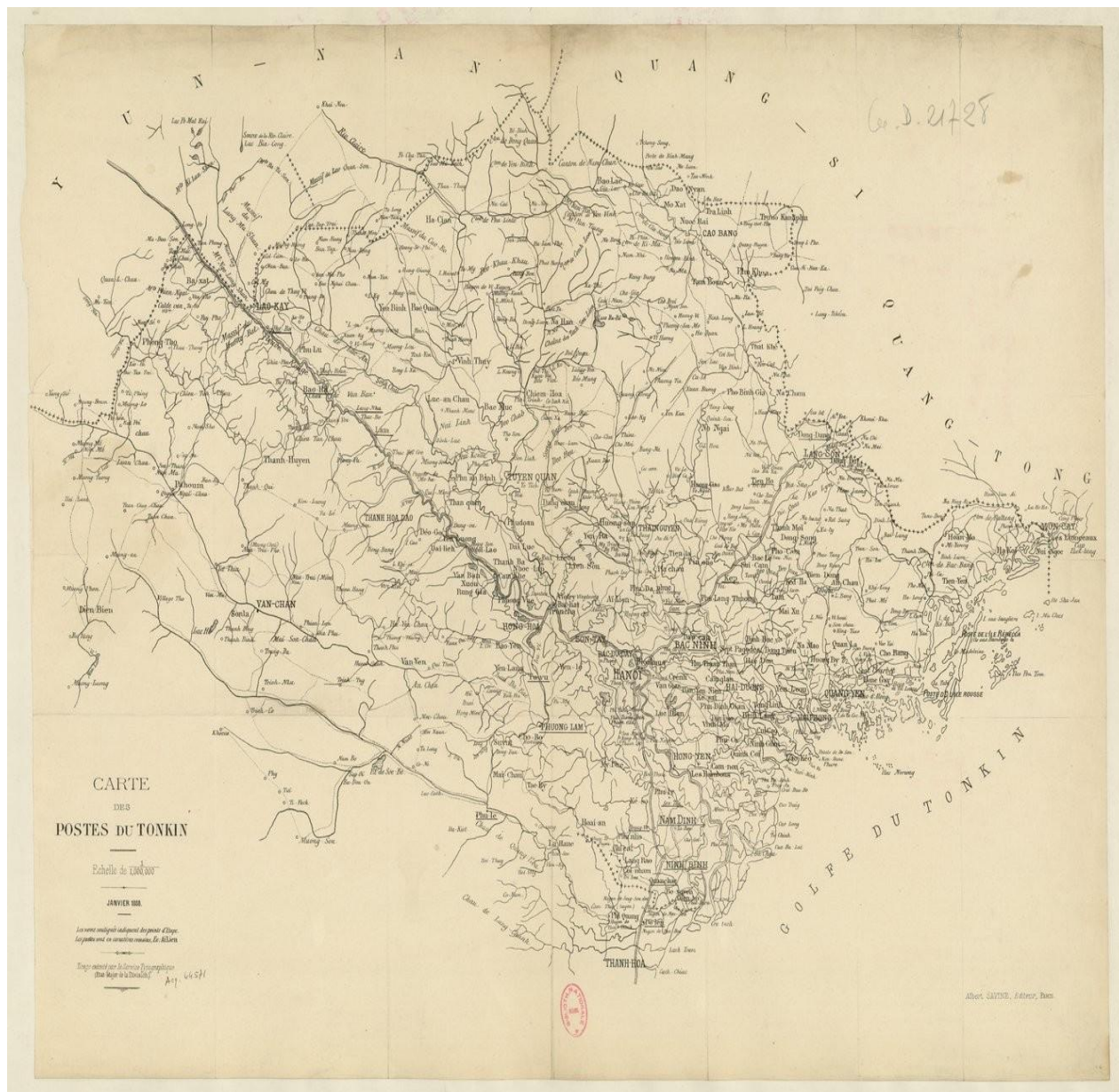
1. Chuong Thau “ Phan Bội Châu con người và sự nghiệp cứu nước ” , Luan an Tien si bao ve tai Vien Su hoc, 1981.
2. Chuong Thau , *Dong Kinh nghĩa thực và phong trào cải cách văn hóa đầu thế kỉ XX*, NXB Ha Noi, Ha Noi, 1982
3. Chuong Thau, “Dong Kinh nghĩa thực (1907) và phong trào nghĩa thực ở các địa phương” , *Nghiên cứu Lịch sử*, No 4 (293), 1997
4. Chuong Thau (ed) , *Phan Boi Chau toàn tập*, tập 2, NXB Thuan Hoa và Trung tâm Văn hóa Ngôn Ngữ Đông Tây, Ha Noi, 2001
5. Chuong Thau (ed) , *Phan Boi Chau toàn tập*, tập 6, NXB Thuan Hoa và Trung tâm Văn hóa Ngôn Ngữ Đông Tây, Ha Noi, 2001
6. Chuong Thau (ed), Phan Chau Trinh toàn tập, NXB Da Nang, Da Nang, 2005
7. Chuong Thau, “Về đời sống của lưu học sinh Việt Nam trên đất Nhật Bản đầu thế kỉ XX”, *Nghiên cứu Lịch sử*, 370, 2007
8. Chuong Thau “Tu Khanh Ung nghĩa thực ở Nhật Bản đến Dong Kinh nghĩa thực ở Việt Nam”, *Nghiên cứu Lịch sử* , No. 370, 2007
9. Chuong Thau (ed), Dong Kinh nghĩa thực và Văn thơ Dong Kinh nghĩa thực, NXB Ha Noi, 2010
10. Chuong Thau, Dao Duy Man (ed), *Dao Trinh Nhật tuyển tập tác phẩm*, NXB Lao Dong, Ha Noi, 2011
11. Cuc Luu Tru Nha nuoc va Vien Vien Dong Bac Co , *Văn thơ Dong Kinh nghĩa thực*, NXB Van Hoa, Ha Noi, 1997
12. Cuong De, *Cuộc đời cách mạng của Cuong De*, Sài Gòn, 1957
13. Duong Trung Quoc, Đinh Xuân Lam, Võ Xuân Đan, *Phong trào Dong Du ở miền Nam*, Nxb Văn hóa Sài Gòn, TPHCM, 2007
14. Dang co tung bao, No 797, No 815, No 821, No 822

15. Dang Duc An, “Thanh nien Hanh Thien tham gia phong trao Dong Du, Dong Kinh nghĩa thực và Viet Nam Quang phục hồi”, *Nghien cuu Lich su*, No 4 ( 281), 1995
16. Dang Duc An, *Từ văn hoá và trí thức phương Đông, Việt Nam đến văn hoá và trí thức làng Hành Thiện (xã Xuân Hồng, huyện Xuân Trường, tỉnh Nam Định)*, NXB Đại học Sư Phạm, Hà Nội, 2012
17. Dang Huu Thu, *Lang Hanh Thien va cac nha nho Hanh Thien trieu Nguyen*, Auteur, 1992
18. Dang Thai Mai, *Văn thơ cách mạng Việt Nam đầu thế kỉ XX*, NXB Văn học, Hà Nội, 1961.
19. Dang Viet Thanh, “Phong trao Dong Kinh nghĩa thực – cuộc cách mạng văn hóa dân tộc dân chủ đầu tiên ở nước ta”, *Nghien cuu Lich su*, No 25, 1961
20. Ho Song, “Dong Kinh nghĩa thực trong phong trào Duy Tân ở Việt Nam vào đầu thế kỉ XX”, *Nghien cuu Lich su* ,295, 6, 1997, pp 67- 72 và 297, 1, 1998
21. Le Cuong Phung, *Phan Boi Chau ngay nay* , NXB Xưa Nay , Sài Gòn, 1926
22. Le Dinh Ky , “Dong Kinh nghĩa thực – Một bước phát triển mới của thơ ca yêu nước”, *Văn học*, No.6, 1968
23. Luong Van Can, *Thuong hoc phuong cham*, Nhà in Thu Ky, Hà Nội, 1928
24. Ngo Thanh Nhan, *Nhung chi si cung hoc sinh du hoc Nhat Ban duoi su huong dan cua cu Sao Nam – Phan Boi Chau* , Anh Minh, Huế, 1951
25. Ngo Van Hoa, Duong Kinh Quoc, *Giai cap cong nhan Viet Nam nhung nam truoc khi thanh lap Dang*, NXB Khoa học Xã hội, Hà Nội, 1978
26. Nguyen Anh, “Dong Kinh nghĩa thực có phải cuộc vận động cách mạng văn hóa dân tộc không?”, *Nghien cuu Lich su*, No.32, 1961
27. Nguyen Binh Minh, “ Tính chất và giai cấp lãnh đạo hai phong trào Dong Kinh nghĩa thực, Dong Du ”, *Van Su Dia*, №33, 1957, pp. 19-33; №34, 1957
28. Nguyen Hien Le. *Dong Kinh nghĩa thực*, NXB Văn hóa Thông tin, Hà Nội, 2004
29. Nguyen Khanh Toan, *Lich su Viet Nam*, tập 2, NXB Khoa học xã hội, Hà Nội, 1971
30. ,Nguyen Tien Luc, *Nhung hoat dong cua Phan Boi Chau o Nhat Ban (1905 – 1909)*, NXB Đại học Quốc gia TP HCM, 2008
31. Nguyen Quang To, *Sao Nam Phan Boi Chau con người và thơ văn*, Duy Tân thơ xa, Sài Gòn, 1974
32. Nguyen Van Hau, *Chi si Nguyen Quang Dieu*, NXB Trẻ – Tạp chí Xưa và Nay, 2002
33. Nguyen Van Kiem, “Tìm hiểu xu hướng và thực chất của Dong Kinh nghĩa thực”, *Nghien cuu Lich su*, 66, 1964
34. Nguyen Van Kiem, “Góp thêm vào sự đánh giá Dong Kinh Nghĩa Thực”, *Nghien cứu Lịch sử*, No 4 (293), 1997
35. Nguyen Thanh, “Dong Kinh nghĩa thực và Đại Nam ( Dang Co Tung Bao)”, *Nghien cứu Lịch sử*, No 4 (293), 1997

36. Nguyen Thuc Chuyen, “57 nhan van Nam ki xuat duong trong phong trao Dong Du”, *Xua va Nay*, No 318, 2008; No 320, 2008; No 322, 2008; No 329, 2009, No 330, 2009, No 331, 2009
37. Nguyen Van Xuan, *Phong trao Duy Tan Bien khao*, NXB Da Nang va Trung tam Nghien cuu Quoc hoc, 1995
38. Phan Boi Chau, *Nam quoc dan tu tri*, Giac quan thu xa, Ha Noi, 1927
39. Phan Boi Chau, *Nu quoc dan tu tri*, Dac Lap, Hue, 1927.
40. Phan Boi Chau, *Luan ly van dap*, Duy Tan tho xa, Sai Gon, 1928
41. Phan Boi Chau, *Van de phu nu*, Duy Tan tho xa, Sai Gon, 1929
42. Phan Boi Chau, *Sao Nam van tap*, Bao Ton, Sai Gon, 1935
43. Phan Thi Han, Dang Doan Bang, Ton Quang Phiet, *Viet Nam nghia liet su*, NXB Van hoc, Ha Noi, 1972.
44. Phan Trong Bau, *Giao duc Viet Nam thoi can dai*, NXB Giao duc, Ha Noi, 2006
45. *Phong Trao Dong Du va Phan Boi Chau*, NXB Nghệ An, Trung tâm văn hóa ngôn ngữ Đông Tây, Nghệ An, Ha Noi, 2005
46. Phuong Huu, *Phong trao Dai Dong Du*, Nam Viet, Sai Gon, 1950.
47. The Nguyen, *Phan Boi Chau than the va tho van 1867 – 1940*, Bo Van hoa Giao duc va Thanh nien, Sai Gon, 1950.
48. *Quan he van hoa, giao duc Viet Nam – Nhat Ban va 100 nam phong trao Dong Du*, NXB Dai hoc Quoc Gia Ha Noi, Ha Noi, 2006
49. Shiraishi Masaya, *Phong trao dan toc Viet Nam va quan he cua no voi Nhat Ban va Chau A –Tu tuong cua Phan Boi Chau ve cach mang va the gioi*, (tap 1 va tap 2), NXB Chinh tri Quoc Gia, Ha Noi, 2000
50. So Van Hoa Thong Tin Hai Phong, Thu vien Hai Phong, *Nhan vat Lich Su Hai Phong*, NXB Hai Phong, 1998
51. Son Nam, *Phong trao Duy Tan o Bac Trung Nam • Mien Nam dau the ki XX- Thien Dia Hoi va Cuoc Minh Tan*, NXB Tre, TPHCM, 2009
52. To Trung, “Phong trao Dong Kinh nghia thuc – mot cuoc cai cach xa hoi dau tien ( trao doi y kien voi ong Dang Viet Thanh) ”, *Nghien cuu Lich su*, №29, 1961
53. Ton Quang Phiet, *Phan Boi Chau va mot giai doan lich su chong Phap cua dan toc*, NXB Van hoa, Ha Noi, 1958.
54. Tran Minh Thu, “ Co gang tien toi thong nhat nhan dinh ve Dong Kinh nghia thuc”, *Nghien cuu Lich su*, No.81, 1965
55. Tran Van Giau, *Su phat trien cua tu tuong o Viet Nam tu the ki XIX den Cach mang thang Tam 1945*, NXB Khoa hoc xa hoi, Ha Noi, 1973.
56. Tran Huy Lieu “ Nhung cuoc van dong Dong Du va Dong Kinh nghia thuc, Duy Tan la phong trao tu san hay tieu tu san?”, *Van Su Dia*, No.11, 1955

57. Tran Huy Lieu, *Lich su 80 nam chong Phap*, NXB Van Su Dia, Ha Noi, 1958
58. Tran Huy Lieu (ed), *Lich su Thu do Ha Noi*, NXB Su hoc, Ha Noi, 1960
59. Tran Trong Khac *Nam muoi bon nam hai ngoai*, Sai Gon, 1971
60. Trinh Tien Thuan “ Fukuzawa Yukichi – Khanh Ung nghĩa thực của Nhat Ban va Dong Kinh nghĩa thực oViet Nam” in Nhiều tác gia, *100 nam Dong Kinh nghĩa thực* , NXB Tri Thuc, Ha Noi, 2008
61. Van Tam, “ Gop y kien vào vấn đề: Tính chất cách mạng qua các cuộc vận động Duy Tân, Đông Du, Đông Kinh nghĩa thực” , *Van Su Dia*, No. 15, 1956
62. Viện Sử học, *Lich su Viet Nam 1897 – 1918*, NXB Khoa học Xã hội, Hà Nội, 1999
63. Vu Duc Bang, “Đại học tự lập đầu tiên tại Việt Nam hiện đại”, *Tu tuong*, No.48, 1975  
Vu Duc Bang, “Đại học tự lập đầu tiên tại Việt Nam hiện đại”, *Tu tuong* , No.49, 1975

## 附録



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

## トンキンの地図（1888年）

出典：フランス国家図書館（Bibliothèque nationale de France）

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b53057851q.r=tonkin>





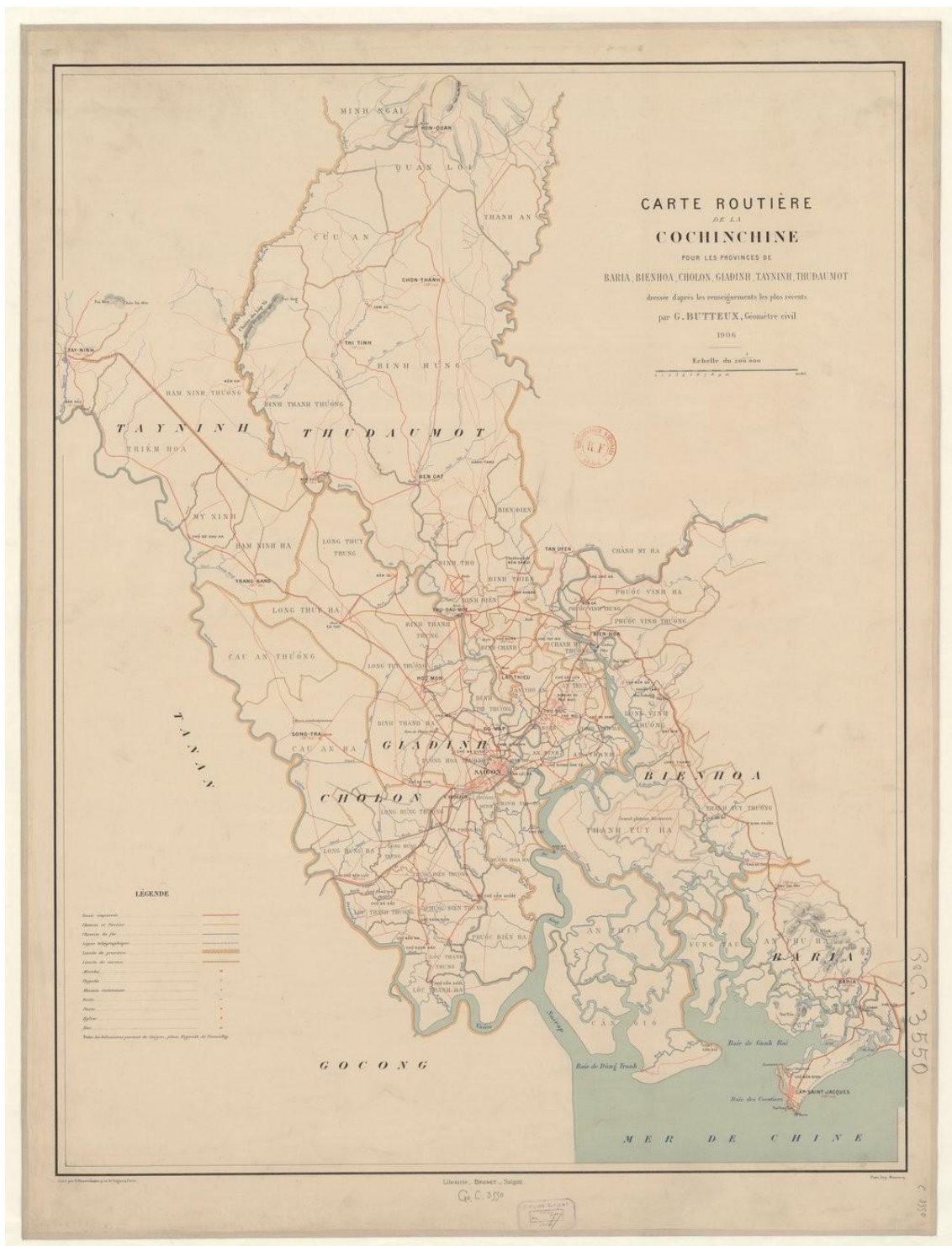
Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

### アンナンの地図 (1888 年)

出典：フランス国家図書館 (Bibliothèque nationale de France)

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8439722p.r=annam>



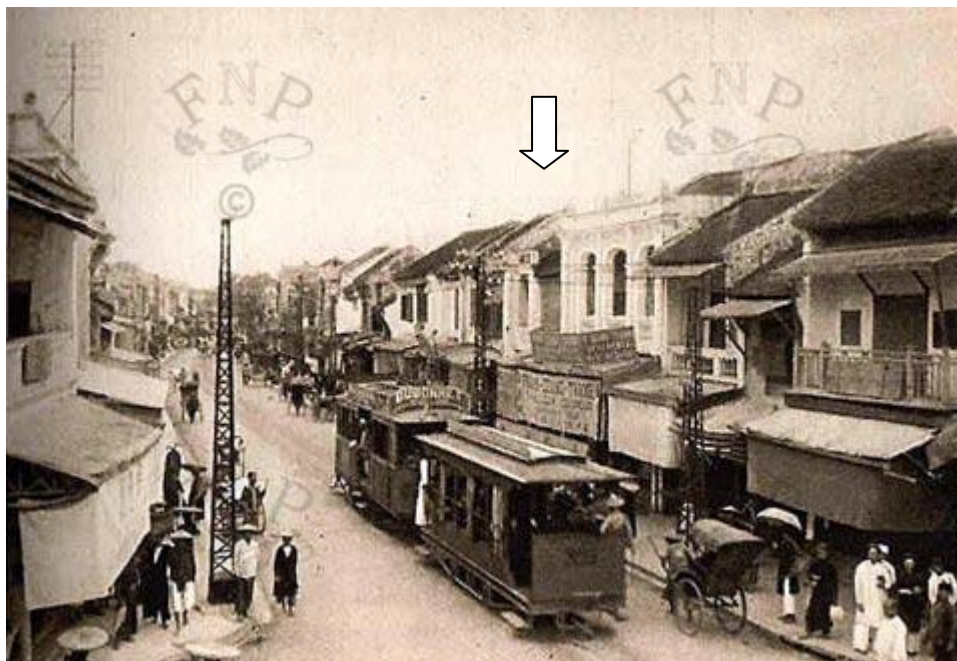


Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

## コーチシナの地図（1906 年）

出典：フランス国家図書館（Bibliothèque nationale de France）

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b530607462.r=Cochinchine>



20 世紀初頭のハノイの旧市街ハンダオ通り（矢印の下建物がドンキン義塾）

出典：ベトナム歴史国家博物館

<http://baotanglichsu.vn/portal/vi/Tin-tuc/Nhan-vat-lich-su/2013/11/3A923C54/#>



ドンキン義塾の教師

出典：ベトナム歴史国家博物館

<http://baotanglichsu.vn/portal/vi/Tin-tuc/Nhan-vat-lich-su/2013/11/3A923C54/#>



ドンキン義塾の教科書『国文習読』の中表紙

出典: Chuong Thau (ed). 「国文習読」(Quoc Van Tap Doc), *Dong Kinh nghia thuc va Van tho Dong Kinh nghia thuc*, NXB Ha Noi, 2010, p. 609



ĐÔNG KINH NGHĨA THỰC

Lời chữ hoa

A B C D D  
E G H I K  
L M N O P  
Q R S T U  
V X Y

国文習読 (Quoc Van Tap doc) 本文の 1 頁目

出典: Chuong Thau (ed). 「国文習読」 (Quoc Van Tap Doc), *Dong Kinh nghĩa thực và Văn thơ Đông Kinh nghĩa thực*, NXB Hà Nội, 2010, p. 610

*Chữ chung*

1 lần 1 li 1	11 lần 1 li 11	7 lần 1 li 7
1 . 2 . 2	11 . 2 . 8	7 . 2 . 14
1 . 3 . 3	11 . 3 . 12	7 . 3 . 21
1 . 4 . 4	11 . 4 . 16	7 . 4 . 28
1 . 5 . 5	11 . 5 . 20	7 . 5 . 35
1 . 6 . 6	11 . 6 . 24	7 . 6 . 42
1 . 7 . 7	11 . 7 . 28	7 . 7 . 49
1 . 8 . 8	11 . 8 . 32	7 . 8 . 56
1 . 9 . 9	11 . 9 . 36	7 . 9 . 63
2 lần 1 li 2	5 lần 1 li 5	8 lần 1 li 8
2 . 2 . 4	5 . 2 . 10	8 . 2 . 16
2 . 3 . 6	5 . 3 . 15	8 . 3 . 24
2 . 4 . 8	5 . 4 . 20	8 . 4 . 32
2 . 5 . 10	5 . 5 . 25	8 . 5 . 40
2 . 6 . 12	5 . 6 . 30	8 . 6 . 48
2 . 7 . 14	5 . 7 . 35	8 . 7 . 56
2 . 8 . 16	5 . 8 . 40	8 . 8 . 64
2 . 9 . 18	5 . 9 . 45	8 . 9 . 72
3 lần 1 li 3	6 lần 1 li 6	9 lần 1 li 9
3 . 2 . 6	6 . 2 . 12	9 . 2 . 18
3 . 3 . 9	6 . 3 . 18	9 . 3 . 27
3 . 4 . 12	6 . 4 . 24	9 . 4 . 36
3 . 5 . 15	6 . 5 . 30	9 . 5 . 45
3 . 6 . 18	6 . 6 . 36	9 . 6 . 54
3 . 7 . 21	6 . 7 . 42	9 . 7 . 63
3 . 8 . 24	6 . 8 . 48	9 . 8 . 72
3 . 9 . 27	6 . 9 . 54	9 . 9 . 81

**国文習読 (Quoc Van Tap doc) の内容**

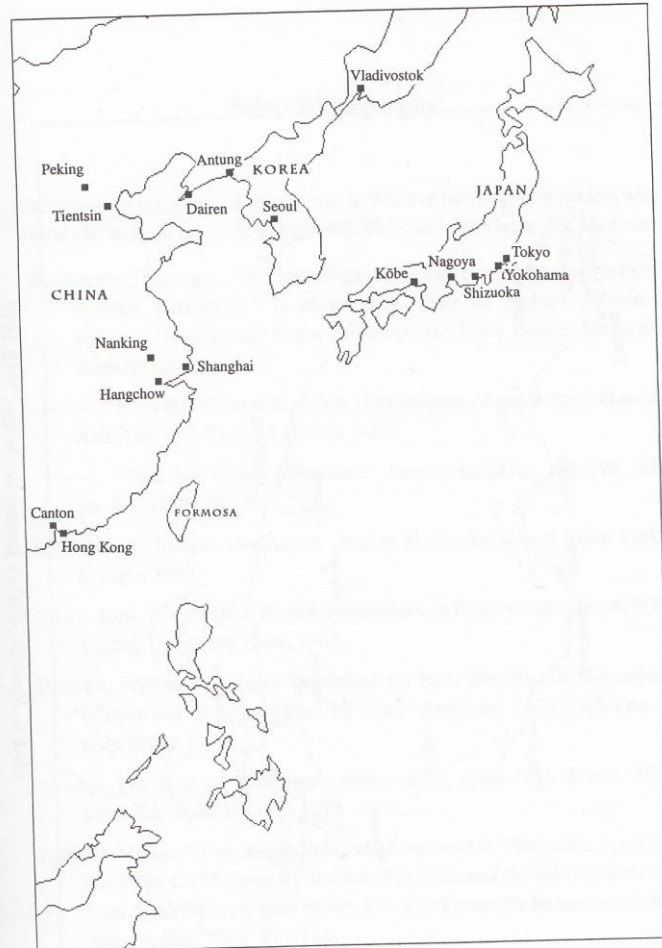
出典: Chuong Thau (ed). 「国文習読」 (Quoc Van Tap Doc), *Dong Kinh nghĩa thực và Văn thơ Dong Kinh nghĩa thực*, NXB Ha Noi, 2010, p. 648



MAP 1. Vietnam, showing places mentioned by Phan-Bội-Châu

### ベトナムにおけるファン・ボイ・チャウの足跡

出典 : Vinh Sinh, Nicholas Wickenden(translate), *Overturned Chariot the Autobiography of Phan Boi Chau*, University of Hawaii, USA, 1997



MAP 5. East Asia, showing places mentioned by Phan-Bội-Châu

### 日本及び東アジアにおけるファン・ボイ・チャウの足跡

出典 : Vinh Sinh, Nicholas Wickenden(translate), *Overturned Chariot the Autobiography of Phan Boi Chau*, University of Hawai, USA, 1997